

平安京左京五条三坊十町跡・
烏丸綾小路遺跡

2015年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京五条三坊十町跡・
烏丸綾小路遺跡

2015年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、ビル新築工事に伴う平安京跡・烏丸綾小路遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

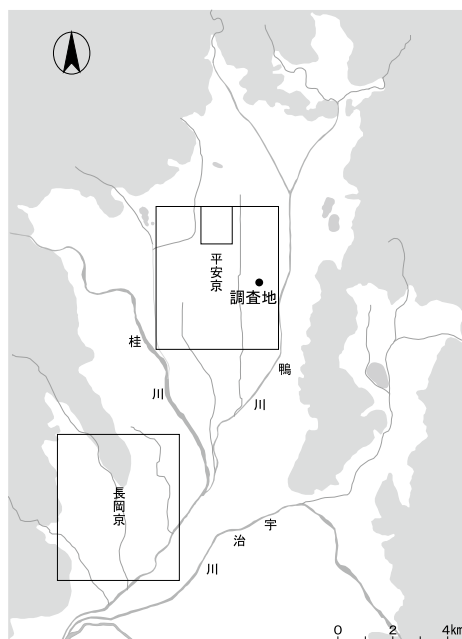
平成27年12月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京跡・烏丸綾小路遺跡（文化財保護課番号 14 H 457）
- 2 調査所在地 京都市下京区綾小路通烏丸西入童侍者町160・161
- 3 委 託 者 株式会社 田中長奈良漬店 代表取締役 田中稔章
- 4 調査期間 2015年5月11日～2015年7月14日
- 5 調査面積 144㎡
- 6 調査担当者 柏田有香
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「壬生」・「三条大橋」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 柏田有香
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。

(調査地点図)



目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
3. 遺 構	6
(1) 基本層序	6
(2) 第1期（古墳時代）の遺構	6
(3) 第2期（平安時代前期から中期）の遺構	13
(4) 第3期（平安時代後期から鎌倉時代）の遺構	13
(5) 第4期（室町時代前期）の遺構	14
(6) 第5期（室町時代後期）の遺構	19
(7) 第6期（戦国時代）の遺構	23
(8) 第7期（安土桃山時代から江戸時代）の遺構	27
4. 遺 物	31
(1) 土器・土製品	31
(2) 瓦類	48
(3) 銭貨・金属製品	52
(4) 石製品	55
(5) ガラス	57
5. ま と め	58
(1) 遺構の変遷	58
(2) 2時期の風呂遺構と寺院について	62

図 版 目 次

図版1	遺構	1	第1期	竪穴建物505（北東から）
		2	第1期	土器溜502（南南東から）
		3	第1期	溝500（東から）
図版2	遺構	1	第2期	全景（南から）
		2	第3期	全景（南から）
		3	第3期	溝440（東から）
図版3	遺構	1	第4期	全景（南から）

- 2 第4期 集石226 (東から)
- 3 第4期 集石224 (東から)
- 4 第4期 土坑215 (北西から)
- 図版4 遺構 1 第4期 風呂221・三和土230・集石237 (東から)
- 2 第4期 風呂221・三和土230・集石237 (南から)
- 図版5 遺構 1 第4期 土坑253 (東から)
- 2 第4期 土坑393 (東から)
- 3 第4期 埋甕267 (北から)
- 4 第4期 土坑263 (北東から)
- 図版6 遺構 1 第5期 全景 (南から)
- 2 第5期 カマド211 (南西から)
- 3 第5期 風呂210 (北から)
- 図版7 遺構 1 第5期 カマド195 (南東から)
- 2 第5期 地業158北西部 (北東から)
- 3 第5期 地業158断面 (東から)
- 4 第5期 風呂210上層土器出土状況 (南西から)
- 図版8 遺構 1 第6期 全景 (南から)
- 2 第6期 石室150 (南から)
- 3 第6期 石組炉 (南南東から)
- 図版9 遺構 1 第6期 庭141 (北東から)
- 2 第6期 庭112 (南南東から)
- 図版10 遺構 1 第6期 井戸173 (南東から)
- 2 第7期下層 礎石列4・5 (北から)
- 3 第7期 全景 (北東から)
- 図版11 遺構 1 第7期 井戸18・20、石組土坑19 (北東から)
- 2 第7期 井戸18 (東から)
- 3 第7期 石組土坑19 (東から)
- 4 第7期 埋納遺構212 (南西から)
- 図版12 遺物 土器1 (土器溜502・溝500・第2期整地層・第3期整地層・土坑426・土坑263出土)
- 図版13 遺物 土器2 (土坑417・風呂221出土)
- 図版14 遺物 土器3 (土坑393・埋甕267・第5期整地層出土)
- 図版15 遺物 土器4 (土坑170出土)
- 図版16 遺物 土器5 (井戸18出土)
- 図版17 遺物 瓦類・銭貨・金属製品
- 図版18 遺物 石製品

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査前全景（南東から）	2
図3	作業風景	2
図4	調査区配置図（1：500）	2
図5	第1期遺構平面図（1：100）	7
図6	西壁・北壁断面図（1：100）	8
図7	西壁・北壁断面図 層名	9
図8	竪穴建物505実測図（1：50）	10
図9	土器溜502実測図（1：20）	11
図10	第2期・第3期遺構平面図（1：150）	12
図11	柱穴456実測図（1：20）	13
図12	第4期遺構平面図（1：100）	15
図13	風呂221・三和土230・集石237実測図（1：50）	16
図14	集石群、土坑215実測図（1：40）	17
図15	埋甕267、土坑263・393実測図（1：20）	18
図16	第5期遺構平面図（1：100）	20
図17	風呂210、カマド211実測図（1：50）	21
図18	カマド195、地業158実測図（1：50）	22
図19	第6期遺構平面図（1：100）	24
図20	庭112・141実測図（1：40）	25
図21	井戸173、石室150、石組炉126、カマド100実測図（1：50、1：40）	26
図22	第7期遺構平面図（1：100）	28
図23	井戸18、石組土坑19実測図（1：50）	29
図24	埋納遺構212実測図（1：20）	30
図25	古墳時代の土器（1：4）	32
図26	平安時代の土器実測図（1：4）	33
図27	鎌倉時代から室町時代の土器実測図（1：4）	35
図28	室町時代の土器実測図1（1：4）	36
図29	室町時代の土器実測図2（1：4）	38
図30	室町時代の土器実測図3（1：4、303のみ1：6）	39
図31	室町時代の土器実測図4（1：4）	40
図32	室町時代の土器実測図5（1：4）	42

図33	室町時代の土器実測図6（1：4）	43
図34	戦国時代の土器実測図（1：4）	45
図35	江戸時代の土器実測図（1：4）	47
図36	土製品実測図（1：4）	48
図37	軒瓦拓影及び実測図（1：4）	49
図38	丸瓦・平瓦・雁振瓦拓影及び実測図（1：6）	50
図39	塀拓影及び実測図（1：6）	51
図40	銭貨拓影（1：2）	52
図41	金属製品実測図（1：2）	54
図42	石製品実測図（1：4、石17～19は1：6）	56
図43	ガラス小玉実測図（1：1）	57
図44	遺構変遷図1（1：300）	59
図45	遺構変遷図2（1：300）	60

表 目 次

表1	主要周辺調査一覧表	4
表2	遺構概要表	6
表3	遺物概要表	31
表4	土坑170出土土器構成表	44
表5	銭貨一覧表	53
表6	金属製品一覧表	55
表7	石製品一覧表	55
表8	土器一覧表	65
表9	瓦類一覧表	83

平安京左京五条三坊十町跡・烏丸綾小路遺跡

1. 調査経過

この調査は、京都市下京区綾小路通烏丸西入童侍者町160・161で実施した店舗兼個人住宅改築計画に伴うものである。調査地は、平安京左京五条三坊十町跡と弥生時代から古墳時代の集落遺跡である烏丸綾小路遺跡に該当する。工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）が試掘調査を実施したところ、多数の遺構が確認されたため、発掘調査の指導が行われ、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて調査を実施することとなった。

発掘調査区は、文化財保護課の指導により、敷地北側に東西9m、南北15mの長方形に設定した（図4）。調査面積は144㎡である。2015年5月11日に調査を開始した。調査は、第1面から第6面までを実施し、それぞれの遺構面において記録作業を行い、各遺構面の調査終了時には文化財保護課の検査指導を受けた。調査では、古墳時代の竪穴建物、平安時代の柱穴群、室町時代の寺院に関連すると考えられる遺構群、戦国時代から江戸時代の町家に関連する遺構群などを検出した。7月14日に全ての調査を終了した。なお、引き続いて同じ敷地内で文化財保護課による発掘調査（以下、「市調査」という）が実施された²⁾。

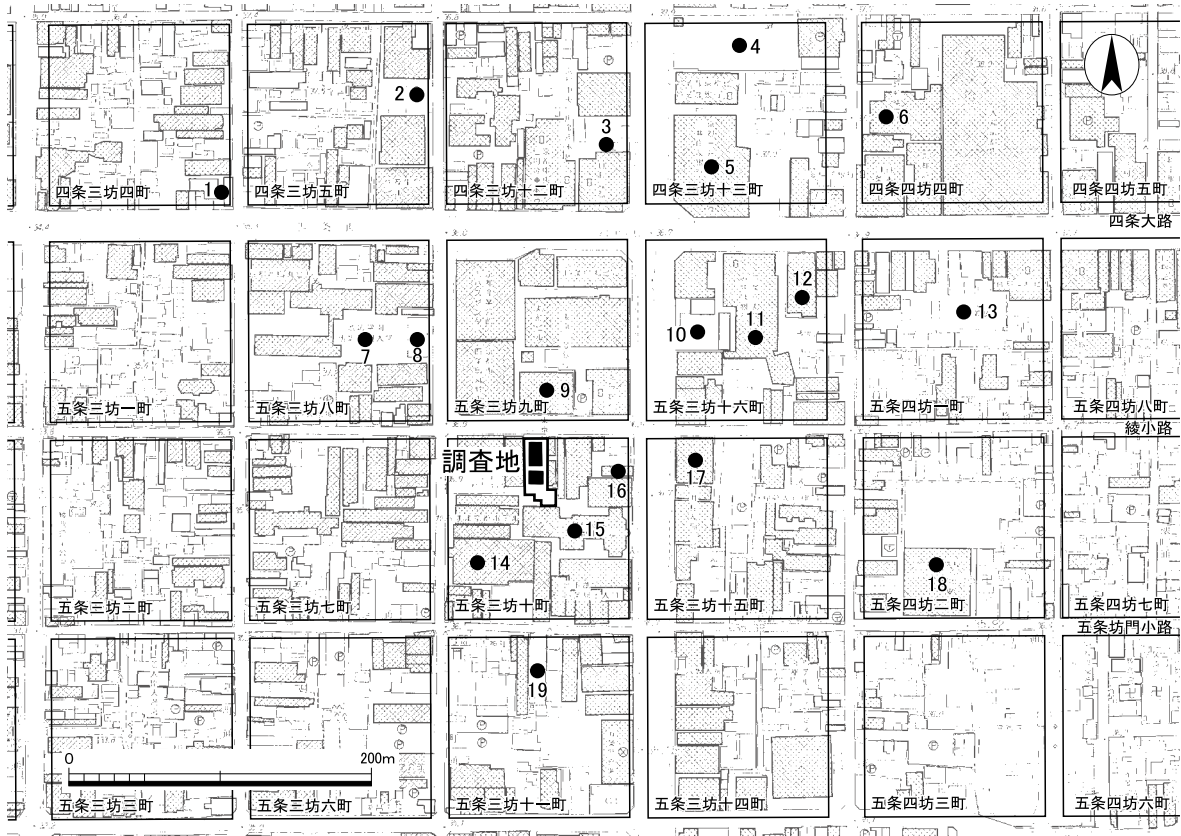


図1 調査位置図（1：5,000）



図2 調査前全景（南東から）



図3 作業風景

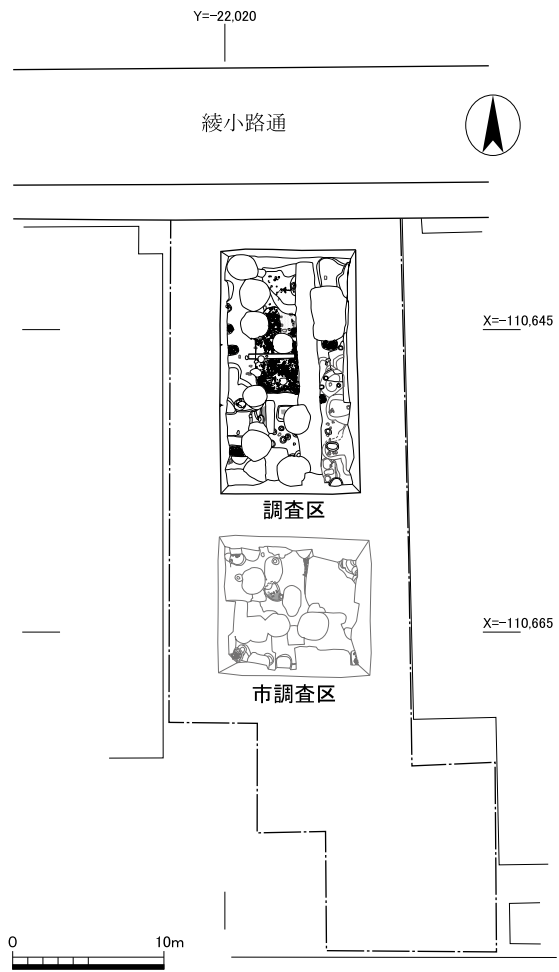


図4 調査区配置図（1：500）

註

- 1) 室町時代末期を当報告書では便宜上「戦国時代」と呼称する。
- 2) 赤松佳奈「平安京左京五条三坊十町跡・烏丸綾小路遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成27年度』京都市文化市民局 2016年 刊行予定。

2. 位置と環境 (図1、表1)

調査地は鴨川扇状地の比較的安定した基盤層上に立地し、弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡である烏丸綾小路遺跡が形成されている。烏丸綾小路遺跡は、現在の新町通高辻付近を中心として、東西約1.3km、南北約1.1kmの範囲に及ぶ京都市域では大規模な集落遺跡の一つである。集落の中心域は、時期によって異なり、弥生時代前期から後期の中心域は綾小路通以北にあると考えられ、中期の環濠の可能性のある溝が調査5・6・7・9などで検出され、その周辺では竪穴建物や方形周溝墓なども多数見つかっている。古墳時代に入ると集落の中心域が綾小路通以南に移るとみられ、調査14・15・16・18などで古墳時代初頭から古墳時代前期の竪穴建物や円形周溝状遺構が見つかっている。当調査地は、弥生時代と古墳時代の集落中心域の境に位置することになり、両時代の遺構が検出されることが予想された。

その後、平安京への遷都に伴って、調査地は北側を綾小路通、東側を烏丸小路、南側を五条坊門小路、西側を室町小路に画された平安京左京五条三坊十町となる。綾小路通に面した同町の中央部北半に当たり、四行八門制では西三行北一門に該当する。同町には、平安時代末期に町の西南部に平某女の所有地が存在した¹⁾とされるが、今回の調査地は同町北部であり、関連性は低いと思われる。それ以外に当町の居住者を示す資料上の記述は管見ではないが、当町南西部で実施された調査14では、平安時代後期の州浜を伴う庭園遺構が検出されており、中上流階層の居住が想定される。また、調査地の約270m北西の四条三坊五町跡で実施された調査1でも平安時代中期の園池が検出されている。それ以外では、重複する後世の遺構によって平安時代の遺構の多くが削平され、井戸、土坑、小規模な掘立柱建物や柱穴が検出されているのみである。特に、平安時代前期の遺構の検出例は極めて少なく、活発に宅地として利用されるのは、平安時代中期に入ってからと考えられる。

中世になると、四条大路以南が商工業の街として大きく発展する。特に調査地に近接した四条通と綾小路通の間の室町通を中心に栄え、「四条綾小路」という固有名詞²⁾と呼ばれるほど繁栄する。また、さまざまな商工業者とともに中世京都の経済基盤を支えた土倉・酒屋も四条室町を中心に多数存在したことが知られる³⁾。今調査地の綾小路通を挟んだ向かい側で実施された調査9では、『土倉酒屋注文⁴⁾』に記載された「澤村又次郎」という酒屋跡と考えられる15世紀後半代の埋甕群と14世紀中ごろに破却された埋甕群の2時期の酒屋跡が検出されている。また、調査1や調査2でも埋甕抜き土坑群が検出されており、酒屋の存在を裏付ける調査事例として注目される。さらに、下京では鎌倉時代末期以降、法華宗の活動が活発になることが知られる⁵⁾。鎌倉から上洛した日像が六条坊門室町の大工某、五条坊門西洞院の柳酒の中興法実を信徒として獲得、中興邸内の法華堂を拠点にし、洛中弘道を行っている。その後も法華宗は富裕な下京町衆の信仰を集めて勢力を拡大し、それが後々、天文五年(1536)の延暦寺による洛中法華寺院への攻撃、天文法華の乱へとつながっていく。ただし、法華宗以外の寺院の存在も知られ、永正四年(1507)には五条三坊八町の南半に浄土宗善長寺が創建され⁶⁾、五条三坊二町には中世に地藏尊矢田寺が存在したとされ、いずれも

表1 主要周辺調査一覧表

番号	条坊	調査年	主要な遺構	烏丸綾小路遺跡関連	文献
1	四条三坊四町	2006	平安：園地・溝・井戸・柱穴 鎌倉：土坑・地下室・井戸 室町：土坑・地下室・炉・溝・井戸 桃山～江戸：土坑・炉・井戸・柱穴		『平安京左京四条三坊四町・烏丸綾小路遺跡』（株）日開調査設計コンサルタント 2007年
2	四条三坊五町	2007	鎌倉～室町：埋甕群・井戸・溝 江戸：井戸・土坑	弥生：集石遺構	『平安京左京四条三坊五町一菊水鉾町の調査一』古代文化調査会 2008年
3	四条三坊十二町	2006	平安：土坑・柱穴・溝 鎌倉～室町：井戸・土坑・柱穴・溝 桃山～江戸：井戸・土坑・柱穴	弥生中～後期：方形周溝墓・堅穴建物 古墳：土坑	『平安京左京四条三坊十二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-26 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2007年
4	四条三坊十三町	1989～1990	平安：柱穴・土坑・井戸・溝 鎌倉～室町：井戸・土坑・柱穴・溝 江戸：井戸・石室・土坑	弥生中：土坑・溝	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994年
5	四条三坊十三町	1982	平安：建物・井戸・土坑 鎌倉～室町：建物・井戸・土坑	弥生前：土坑 弥生中～後期：堅穴建物・土坑・溝	『平安京跡研究調査報告第11輯 平安京左京四条三坊十三町一長刀鉾町遺跡一』（財）古代学協会 1984年
6	四条四坊四町	1991	平安～鎌倉：井戸・土坑 室町：土葬墓・埋甕・土取り・溝・柱穴 江戸：鏡鑄造関連遺構・井戸	弥生中～後期：溝・流路	『平安京左京四条四坊4町』京都文化博物館 1993年
7	五条三坊八町	1995	平安：溝 室町：土葬墓・溝・井戸	弥生中：流路	『平安京跡研究調査報告第19輯 平安京左京五条三坊八町』（財）古代学協会 1997年
8	五条三坊八町	1991	平安：井戸・土坑・柱穴 鎌倉～室町：井戸・土坑・溝・柱穴 桃山～江戸：井戸・土坑・柱穴・建物・石室	弥生中～後：溝・流路 古墳：溝	『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994年
9	五条三坊九町	2008	平安：建物・井戸・土坑 鎌倉～室町：埋甕群・地下式倉庫・礎石列・井戸・土葬墓 桃山～江戸：礎石列・石組溝・石室・井戸	弥生中：溝	『平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-10 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2008年
10	五条三坊十六町	2005	平安：柱穴・溝・土坑 鎌倉～室町：柱穴・室・井戸・土坑 江戸：井戸・土坑	弥生～古墳：方形周溝墓・円形周溝墓・堅穴建物か	『平安京跡研究調査報告第22輯 平安京左京内5遺跡』（財）古代学協会 2008年
11	五条三坊十六町	1991～1992	平安：井戸 鎌倉～室町：井戸・土坑・溝 桃山～江戸：井戸・土坑・溝・建物		『平安京左京五条三坊十六町跡』関西文化財調査会 1998年
12	五条三坊十六町	2012	平安：井戸・土坑・柱穴 鎌倉～室町：土葬墓・柱穴・埋甕・井戸 桃山～江戸：井戸・土坑・柱穴・礎石柱		『平安京左京五条三坊十六町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-21 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2013年
13	五条四坊一町	2005	平安～鎌倉：土坑・柱穴・溝 室町：柱穴・土坑・井戸	弥生末～古墳初：流れ堆積	『平安京左京五条四坊一町一四条高倉マンション新築に伴う調査一』古代文化調査会 2006年
14	五条三坊十町	1979	平安後期：庭園遺構 鎌倉～室町：建物・土坑	弥生末～古墳初：堅穴建物	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』京都市文化観光局文化財保護課 1980年 『史料京都の歴史』第二巻考古 平凡社 1983年
15	五条三坊十町	1980	平安：ピット・土坑・井戸 鎌倉～室町：土坑・井戸・ピット・柵列・墓・溝 桃山～江戸：井戸・土坑・ピット・溝	古墳：円形周溝状遺構・堅穴建物	『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1983年
16	五条三坊十町	1979	平安：柱穴・土坑 鎌倉～室町：柱穴・土坑 江戸：柱穴・土坑	古墳初：堅穴建物	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報III』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982年
17	五条三坊十五町	1979	平安：井戸・土坑 鎌倉～室町：土葬墓・柱穴・土坑・井戸		『平安京跡研究調査報告第5輯 平安京左京五条三坊十五町』（財）古代学協会 1981年
18	五条四坊二町	1992～1993	平安：土坑・井戸・溝・柱穴 鎌倉～室町：井戸・土坑・堀	古墳初：堅穴建物 飛鳥：土坑・溝	『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
19	五条三坊十一町	2007	弥生：遺物包含層 平安：溝・土坑 室町：土坑・土取り 江戸：井戸・土坑・トイレ遺構		『平安京左京五条三坊十一町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-7 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2007年

現在の地名として残る。それら寺院の進出との関連は明瞭でないが、調査6・7・9・12・15・17などで鎌倉時代から室町時代にかけての土葬墓と考えられる遺構が出土している。それ以外にも、周辺各調査ともに室町時代の遺構密度は高く、遺物も多種多様なものが出土しており、中世下京の繁栄を物語る資料と考えられる。

桃山時代には、豊臣秀吉による京都改造で寺院は移転させられ、町割りの再編などが積極的に行われたが、商工業地域の中心で町組織の確立した調査地周辺は、手を加えられなかった⁷⁾。続く江戸時代を通して商工業の中心であったことに加え、『寛永平安町古図』によると各藩の藩邸や武家屋敷が置かれたようである。調査地は、調査前まで町家建物で営業していた「田中長奈良漬店」の創業が寛政元年(1789)までさかのぼり、現代に至るまで代々の当主田中長兵衛氏の所持する地となっている。また、調査地の所在する童侍者町町会が所持する明治年間の『家券』や『券状』⁸⁾に付属すると考えられる「下京第拾壹區綾小路通室町東入童侍者町」の図には、間口二間四尺二寸の田中長兵衛の地所の東隣接地に間口十一間五尺八寸の永野物集女の地所の記載がある⁹⁾。田中家が明治年間に永野物集女屋敷地の一部を購入し、現在の約七間七尺(15.2m)の間口となったようである¹⁰⁾。

註

- 1) 『平安遺文』4236号
- 2) 高橋康夫「京都・四条綾小路」『日本都市史入門2 町』東京大学出版会 1990年
- 3) 『京都の歴史 3 近世の胎動』学芸書林 1968年の別添地図参照。
- 4) 『大日本古文書』家わけ第二十一 蜷川家文書之二 「酒屋土倉注文」
- 5) 「下京区概説」『史料京都の歴史 第12巻 下京区』平凡社 1981年、「第二章 宗教と商業の都市」『京都の歴史 3 近世の胎動』学林書院 1968年
- 6) 「善長寺町」「矢田町」『京都市の地名』平凡社 1979年
- 7) 「下京区概説」『史料京都の歴史 第12巻 下京区』平凡社 1981年
- 8) 『券状 写 下京九町組 童侍者町』『家券 童侍者町』、株式会社 田中長奈良漬店 代表取締役 田中稔章氏のご厚意により複写版を実見した。
- 9) 明治三年(1870)の年号が入る永野家「券状」(前掲註8所収)には「有栖川宮家来 永野物集女」の記載があり、明治八年(1875)の永野家「家券」(前掲註8所収)には、敷地内に長屋門を含む長屋10棟のほか、土蔵などの記載がある。
- 10) 株式会社 田中長奈良漬店 代表取締役 田中稔章氏より御教示を賜った。

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図6・7)

調査地は、現状では現代盛土のためほぼ平坦になっており、地表面の標高は36.9～37.0mである。現地表面から0.3～0.5mが現代盛土で、その下に江戸時代前期の整地層が最大0.3mの厚さで堆積する(西壁4・83層)。その下に、部分的に安土桃山時代の焼土を含む整地層が堆積する(西壁7・17・33・34・71層)。さらにその下には上層から順に戦国時代の整地層(西壁18層)、室町時代後期の整地層(西壁27層)、室町時代前期の整地層(西壁13・14・28・29・30層)、平安時代後期の整地層(西壁31層)が堆積する。平安時代後期の整地層を除去するとにぶい黄褐色シルトの基盤層となる(149層)が、一部基盤層の窪地を整地した平安時代中期の整地層が確認できた(西壁61層)。基盤層上面の標高は34.7～34.9mである。

調査は、各整地層または基盤層の上面で、第1面(安土桃山時代から江戸時代)、第2面(戦国時代)、第3面(室町時代後期)、第4面(室町時代前期)、第5面(平安時代後期から鎌倉時代)、第6面(古墳時代から平安時代中期)として調査を行った。しかし、全体的に遺構の重複が激しく、調査時には明確な時期を捉えられなかった遺構が多数ある。また、第6面で調査した古墳時代と平安時代の遺構は集落遺跡と都城遺跡という性質の相違がある。そこで、整理作業で遺構の重複関係や出土遺物の時期を検討し、第1期(古墳時代)、第2期(平安時代前期から中期)、第3期(平安時代後期から鎌倉時代)、第4期(室町時代前期)、第5期(室町時代後期)、第6期(戦国時代)、第7期(安土桃山時代から江戸時代)の7期に再整理を行った。以下に、各時期の主要な遺構について概説する。

(2) 第1期(古墳時代)の遺構(図5)

基盤層上面で検出した遺構群である。

表2 遺構概要表

時 代	時 期	遺 構
古墳時代	第1期(古墳時代)	竪穴建物505、土器溜502、溝500
平安時代 ～鎌倉時代	第2期(平安時代前期～中期)	柱穴456、ピット群
	第3期(平安時代後期～鎌倉時代)	土坑292・300・426・437、溝440
室町時代	第4期(室町時代前期)	風呂221、埋甕267、土坑253・263・280・417、 集石223・224・226・228、土葬墓393
	第5期(室町時代後期)	風呂210、カマド211、地業158、カマド195、土坑170
戦国時代	第6期(戦国時代)	井戸173、柱列8・9、溝85、庭112・141、カマド100、 石組炉126、石室150
安土桃山時代 ～江戸時代	第7期(安土桃山時代～江戸時代)	礎石列1～7、井戸1・18・20・120・125・159・350、 埋納遺構212、埋甕52、石組土坑19

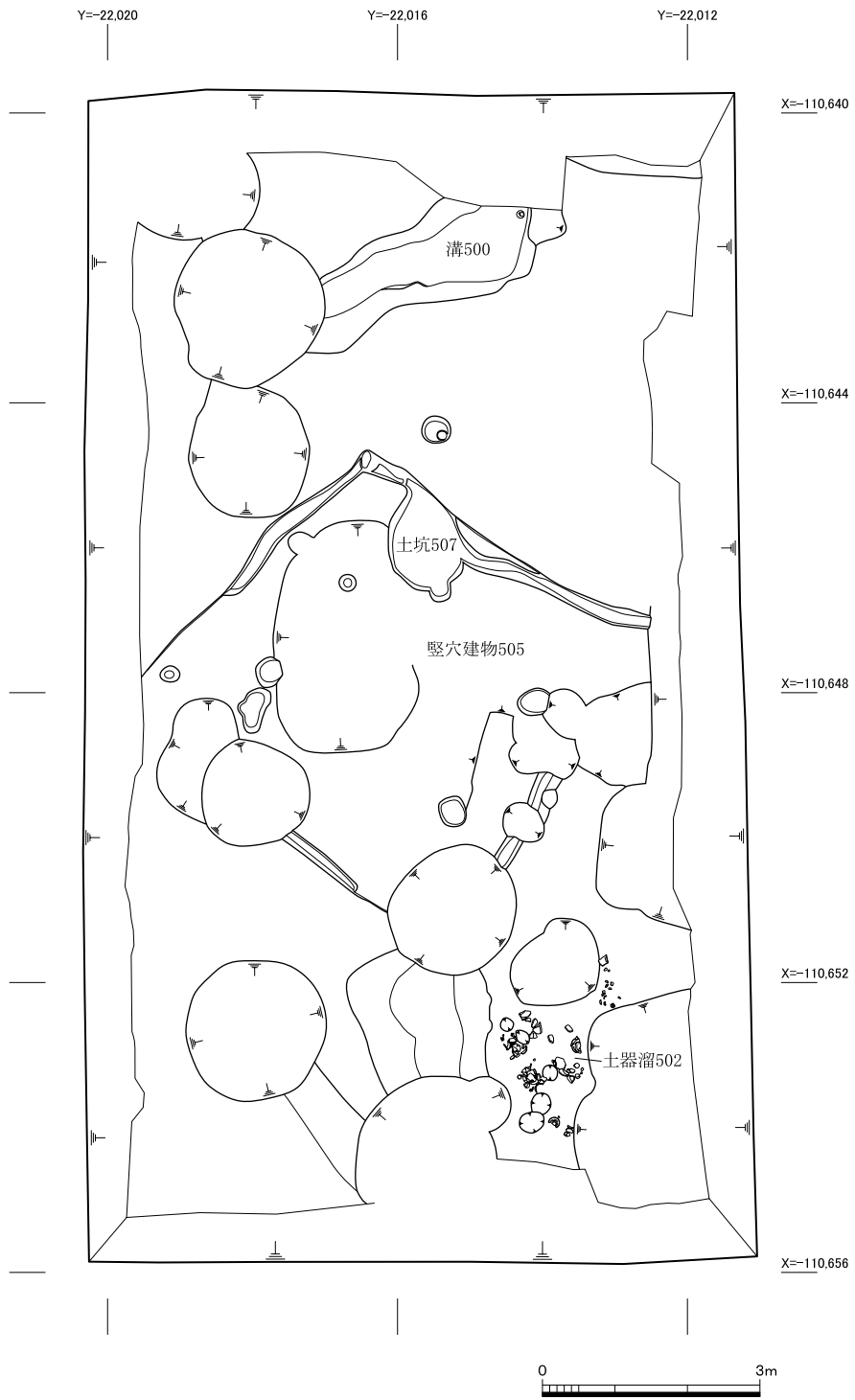


图5 第1期遺構平面図 (1 : 100)

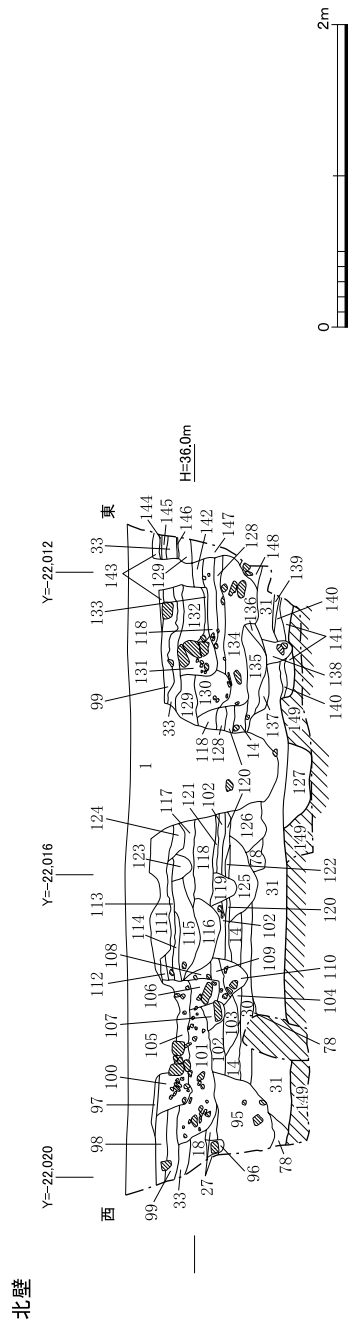
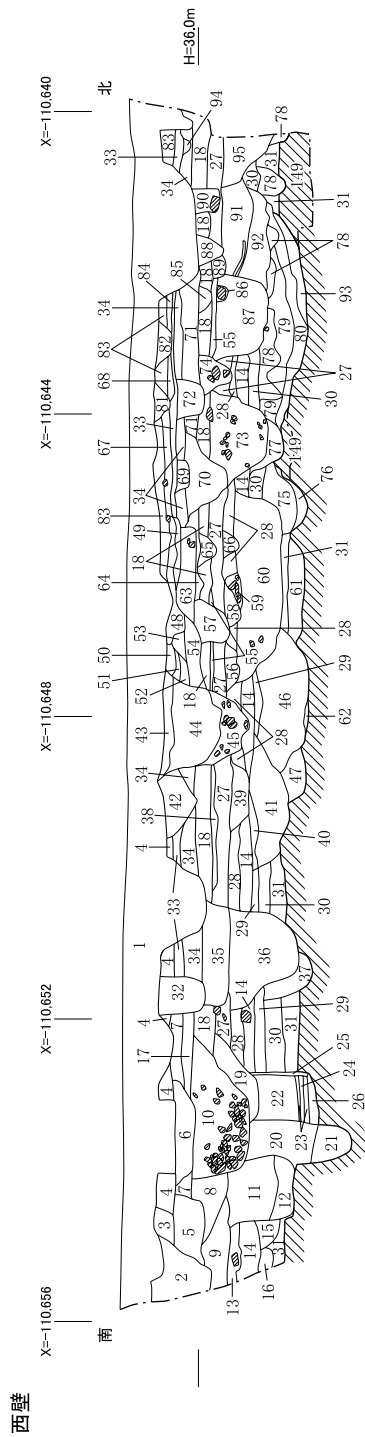


图6 西壁·北壁断面图 (1:100)

西壁・北壁

- 1 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 炭少量
- 2 10YR2/1黒色 シルト 漆喰混じる
- 3 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂
- 4 10YR4/1褐灰色 シルト～細砂 炭・焼土中量(近世整地)
- 5 2.5Y3/1黒褐色 シルト 炭少量
- 6 2.5Y2/1黒色 シルト 炭・焼土少量
- 7 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 炭少量
- 8 10YR2/1黒色 粘質 シルト～細砂 炭・焼土少量
- 9 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 炭・焼土中量
- 10 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 φ10～15cmの礫少量・炭・焼土少量
- 11 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂に7.5Y6/2灰オリーブ色 細砂ブロック多量混
- 12 5Y3/2オリーブ黒色 粘質 シルト～細砂 炭少量
- 13 2.5Y3/2黒褐色 中～粗砂 炭多量
- 14 2.5Y2/1黒色 粘質 シルト 炭中量
- 15 2.5Y2/1黒色 粘質 シルト 炭中量
- 16 2.5Y2/1黒色 粘質 シルト～細砂 炭少量
- 17 10YR2/2黒褐色 粘質 シルト～細砂 小礫多量混
- 18 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 炭少量
- 19 10YR3/2黒褐色 粘質 炭・焼土少量
- 20 10YR3/1黒褐色 シルトに粘質土ブロック多量混
- 21 2.5Y4/1黄灰色 粘質 シルトにウグイス土ブロック少量混
- 22 炭層
- 23 炭層
- 24 2.5Y3/1黒褐色 細砂～粗砂
- 25 2.5Y3/1黒褐色 粘質 粘土
- 26 7.5Y4/1灰色 細砂～粗砂 ウグイス土ブロック多量
- 27 10YR2/2黒褐色 シルト～細砂 炭少量
- 28 10YR2/1黒色 粘質 シルト～細砂
- 29 10YR3/1黒褐色 粘質 シルト 焼土多量
- 30 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂にウグイス土ブロック少量・炭少量
- 31 5Y5/3灰オリーブ色 シルト～細砂(ウグイス土)
- 32 2.5Y3/1黒褐色 シルト～細砂 炭・焼土中量
- 33 5YR3/6暗赤褐色 シルト 炭・焼土多量(焼土層)
- 34 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂と
- 35 10YR4/1褐色 粘質 シルトの互層(三和土10層程度)
- 36 2.5Y3/1褐灰色 細砂～粗砂 小礫多量
- 37 2.5Y3/1黒褐色 シルト～細砂 ウグイス土ブロック少量・炭少量
- 38 7.5YR3/3暗褐色 シルト 炭少量(灰層)
- 39 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 炭少量(灰層)
- 40 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 焼土多量
- 41 2.5Y3/1黒褐色 シルト～細砂 炭中量
- 42 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 炭・焼土中量
- 43 5YR4/6赤褐色 シルト 焼土層
- 44 2.5Y3/2黒褐色 シルト～細砂 炭多量
- 45 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 シルト～細砂 φ10～15の礫詰まる
- 46 2.5Y3/1黒褐色 シルト～細砂 ウグイス土ブロック少量・炭中量
- 47 2.5Y3/1黒褐色 シルト～細砂 ウグイス土ブロック多量
- 48 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂に2.5Y7/6明黄褐色 シルトブロック混・炭少量
- 49 10YR3/4暗褐色 シルト
- 50 7.5YR4/4褐色 シルト φ5～20cmの礫多量

- 51 7.5YR4/3褐色 シルト～細砂 炭少量
- 52 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 炭少量
- 53 7.5YR3/2褐色 シルト～細砂
- 54 7.5YR2/3暗褐色 シルト～細砂 炭・焼土少量
- 55 2.5Y4/2暗灰褐色 粘質 シルト(三和土)
- 56 2.5Y3/1黒褐色 シルト～細砂 小礫多量 炭少量
- 57 7.5YR3/1黒褐色 シルト～細砂
- 58 2.5Y2/1黒色 細砂 炭少量
- 59 2.5Y2/1黒色 細砂 φ8～15cmの礫詰まる
- 60 2.5Y3/1黒褐色 シルト～細砂 最下層に焼土と灰
- 61 2.5Y6/2灰黄色 シルト～極細砂(平安中期整地) やや粘質
- 62 2.5Y5/2暗灰褐色 極細砂(住居土)
- 63 7.5YR3/2黒褐色 シルト～細砂
- 64 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 固く締まる
- 65 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂
- 66 10YR2/2黒褐色 シルト～細砂 焼土少量
- 67 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂
- 68 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂(三和土)
- 69 7.5YR3/2黒褐色 シルト～細砂 焼土少量
- 70 2.5YR2/1黒色 シルト～細砂 炭・焼土少量
- 71 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 炭・焼土少量
- 72 10YR2/2黒褐色 シルト～細砂
- 73 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 φ5～15cmの礫多量
- 74 10YR4/1褐灰色 シルト～細砂 φ15～20の礫中量
- 75 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 ウグイス土ブロック多量・炭少量
- 76 10YR3/2黒褐色 細砂 ウグイス土ブロック少量
- 77 10YR4/1褐灰色 シルト 炭少量
- 78 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 ウグイス土ブロック多量
- 79 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 溝440
- 80 10YR4/1褐灰色 シルト 炭少量
- 81 2.5Y3/1黒褐色 シルト～細砂
- 82 2.5Y3/1黒褐色 シルト～細砂 小礫少量
- 83 10Y3/1黒褐色 シルト～細砂(近世整地)
- 84 10YR1.7/1黒色 シルト 固く締まる
- 85 2.5Y3/2黒褐色 シルト～細砂 φ5～10cmの礫詰まる
- 86 2.5Y3/1黒褐色 細砂
- 87 2.5Y3/1黒褐色 細砂～粗砂 炭少量
- 88 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂～粗砂
- 89 10YR2/2黒褐色 シルト～細砂
- 90 10YR3/2黒褐色 細砂～粗砂
- 91 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 炭少量
- 92 10YR2/2黒褐色 細砂
- 93 10YR3/2黒褐色 シルト(溝440)
- 94 10YR2/1黒色 シルト～細砂
- 95 10YR2/2黒褐色 細砂～粗砂 炭多量
- 96 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂
- 97 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 炭少量
- 98 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 固く締まる(三和土)
- 99 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂 固く締まる(三和土)
- 100 10YR3/1黒褐色 粘質 シルト φ5～25cmの礫多量
- 101 10YR4/2灰黄褐色 細砂～粗砂 φ3～15cmの礫多量
- 102 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 炭少量
- 103 10YR3/1黒褐色 細砂 炭少量
- 104 10YR4/2灰黄褐色 中砂～粗砂
- 105 10YR3/1黒褐色 粘質 シルト φ5～7cmの礫少量
- 106 10YR3/1黒褐色 粘質 シルト φ5～30cmの礫混
- 107 10YR3/3暗褐色 細砂～中砂
- 108 2.5Y3/1黒褐色 シルト～細砂 やや粘質
- 109 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂
- 110 10YR2/1黒色 シルト～細砂に10YR6/2灰黄褐色 細砂ブロック混
- 111 10YR4/2灰黄褐色 細砂～粗砂
- 112 10YR2/2黒褐色 シルト～細砂 炭少量
- 113 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 炭中量
- 114 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 焼土多量
- 115 10YR4/2灰黄褐色 シルト～極粗砂
- 116 10YR4/3にぶい黄褐色 中砂～極粗砂
- 117 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂
- 118 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂にウグイス土ブロック少量混
- 119 10YR3/2黒褐色 細砂～粗砂
- 120 10YR3/1黒褐色 粘質 シルト 炭少量
- 121 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 炭多量
- 122 2.5Y2/1黒色 シルト～細砂
- 123 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂 φ5～10cmの礫中量
- 124 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂
- 125 10YR3/1黒褐色 粘質 シルト～細砂
- 126 10YR4/1褐灰色 粘質 シルト(溝500)
- 127 10YR3/1黒褐色 粘質 シルト～細砂
- 128 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト～細砂
- 129 2.5Y4/2暗灰褐色 シルト～細砂
- 130 2.5Y3/2黒褐色 シルト～細砂 φ3～10cmの礫中量
- 131 2.5Y3/1黒褐色 シルト～細砂 φ3～40cmの礫詰まる(石組炉126掘形)
- 132 5YR5/6明赤褐色 シルト～細砂 焼土詰まる(石組炉126埋土)
- 133 10YR3/1黒褐色 粘質 シルト(石組炉126床土)
- 134 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 炭中量
- 135 2.5Y3/1黒褐色 粘質 シルト φ3～10cmの礫多量 土器多量 土坑300
- 136 2.5Y3/1黒褐色 粘質 シルト～細砂
- 137 2.5Y4/1黄灰色 粘質 シルト～細砂 炭少量
- 138 5Y3/1オリーブ黒色 粘質 シルト φ5～15cmの礫多量
- 139 2.5Y4/2暗灰褐色 シルト～細砂 炭多量
- 140 2.5Y4/1黄灰色 細砂 炭中量
- 141 2.5Y3/1黒褐色 粘質 シルト 炭少量
- 142 2.5Y3/1黒褐色 シルト～細砂 炭少量
- 143 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
- 144 10YR6/6明黄褐色 シルト～細砂 固く締まる(三和土)
- 145 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂
- 146 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 炭・焼土多量 焼け締まる
- 147 2.5Y4/2暗灰褐色 細砂～粗砂
- 148 5Y3/1オリーブ黒色 シルト～細砂 φ10～20cmの礫多量
- 149 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト(基盤層)

図7 西壁・北壁断面図 層名

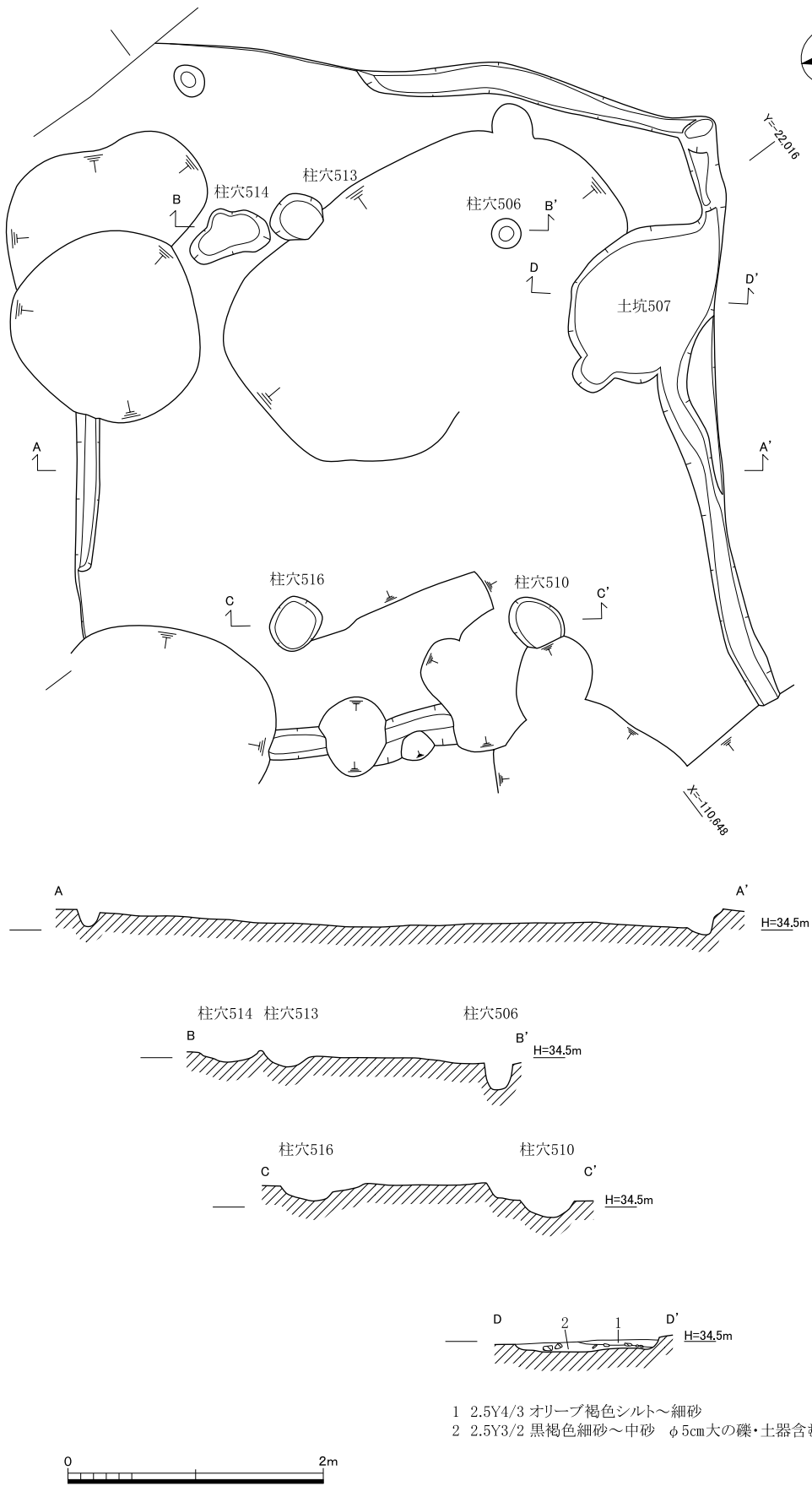


図8 竪穴建物505実測図(1:50)

竪穴建物505（図8、図版1-1） 調査区中央で検出した。全体的に削平と攪乱を受け、壁溝の一部と柱穴、貯蔵穴と考えられる土坑が残る。一辺約5mの方形の竪穴建物に復元できる。建物主軸方位は北に対して約40度東に振れる。残存する壁溝の幅は約0.15～0.25m、深さは0.05～0.1mある。建物内では支柱穴の可能性がある柱穴を5基検出した。径は0.2～0.5m、深さは検出面から0.05～0.2mある。建物北東辺では、貯蔵穴と考えられる土坑507を検出した。径約1.0mの不整形円形で、深さは検出面から約0.08mある。壁溝や土坑507から古墳時代後期の須恵器、土師器片が出土した。

土器溜502（図9、図版1-2） 調査区南東で検出した。明瞭な掘形は確認できなかったが、東西約1.8m、南北約2.5mの範囲で古墳時代前期の古式土師器がまとまって出土した。破片が多く、廃棄されたものと考えられる。

溝500（図版1-3） 調査区北端で検出した。北東から南西方向の溝である。検出長は約3.0mで、幅は1.0～1.5mある。検出面からの深さは0.1～0.35mで、溝底の標高は北東端が34.35m、南西端が34.42mで、北東が南西より低い。埋土は粘土質シルト（図6-127層）である。底から古墳時代中期の完形の須恵器小壺が出土した。

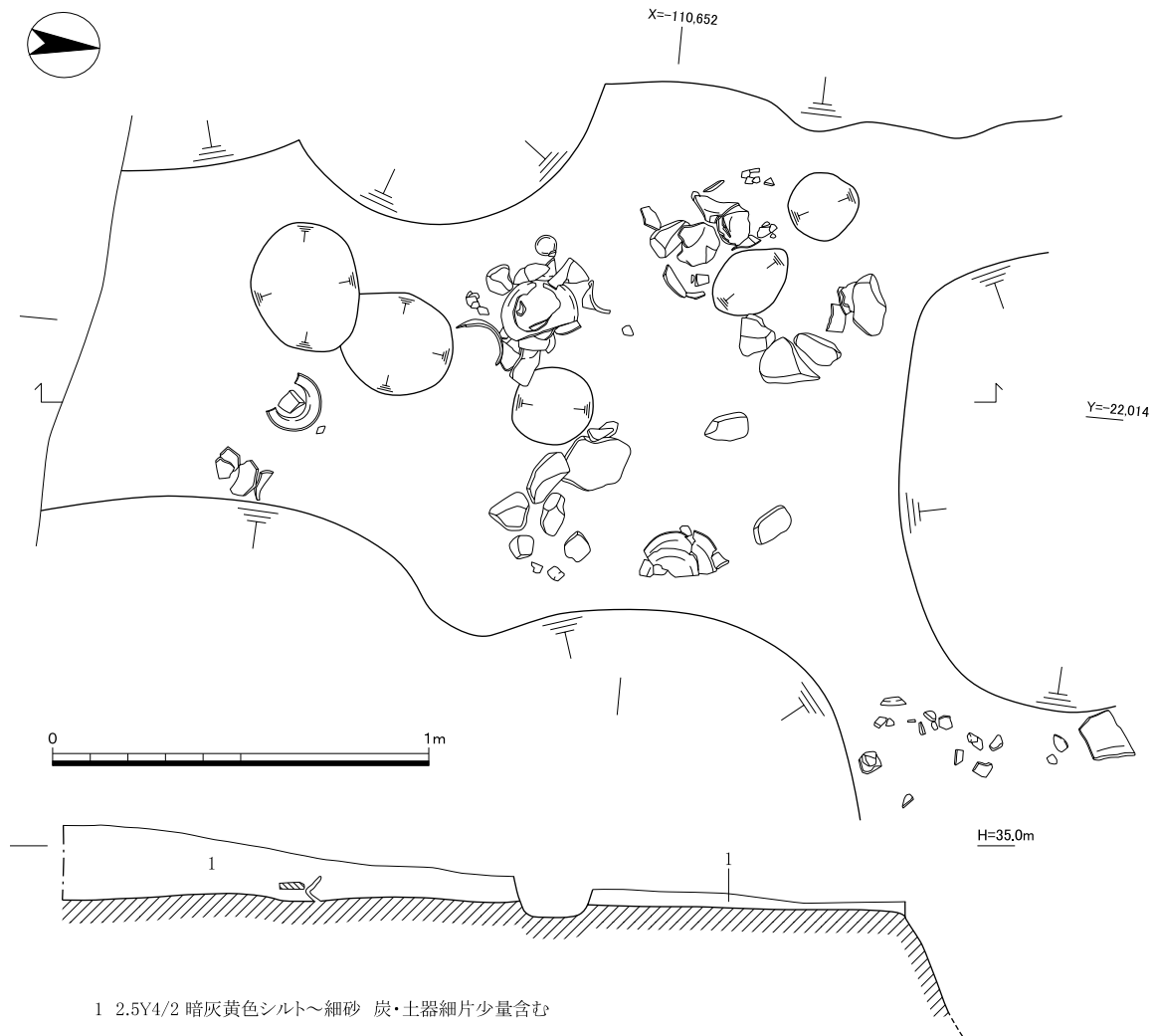
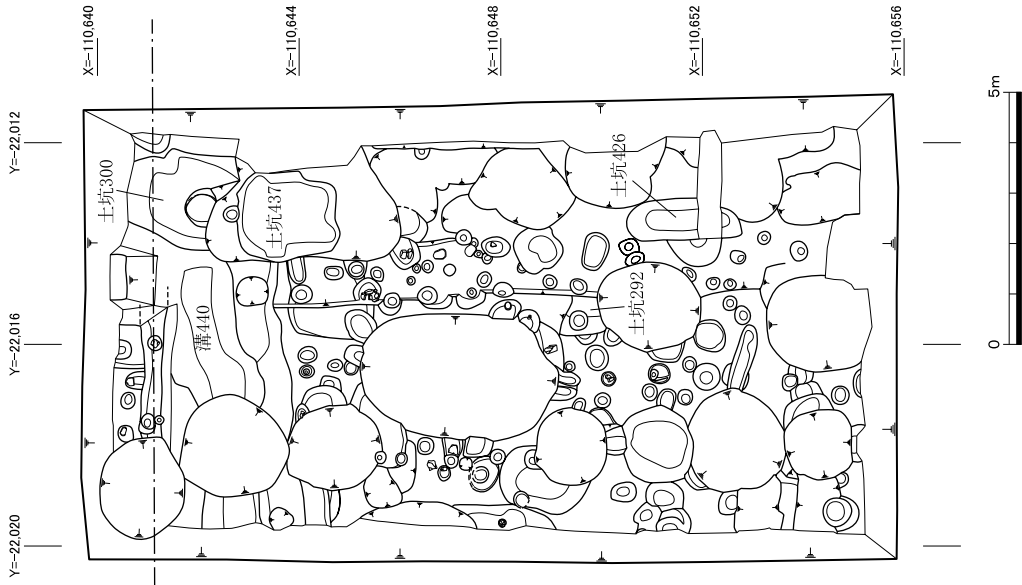


図9 土器溜502実測図（1：20）

第3期



推定織小路南築地心

第2期

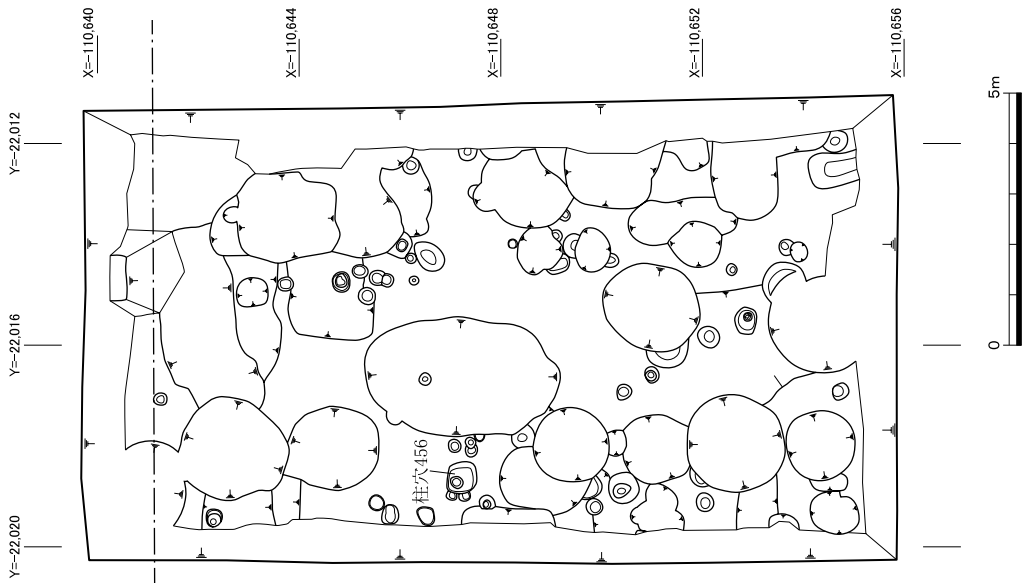


图10 第2期·第3期遺構平面図(1:150)

(3) 第2期（平安時代前期から中期）の遺構（図10、図版2-1）

基盤層上面または、部分的に確認できる整地層（図6-61層）の上面で検出した遺構群である。整地層からは10世紀前半代の遺物が出土した。複数の柱穴を検出したが、遺物が出土しない時期不明のものも含み、建物としてのまとまりを捉えられるものは確認できなかった。

柱穴456（図11） 調査区中央西端で検出した。掘形の平面形は隅丸方形で、一辺約0.6m、検出面からの深さは約0.15mある。掘形の北西寄りに径約0.25mの柱当たりを確認した。柱当たりの底からガラス小玉が出土した。掘形埋土からは10世紀末頃の土師器皿、須恵器甕、白磁皿、瓦片が出土した。

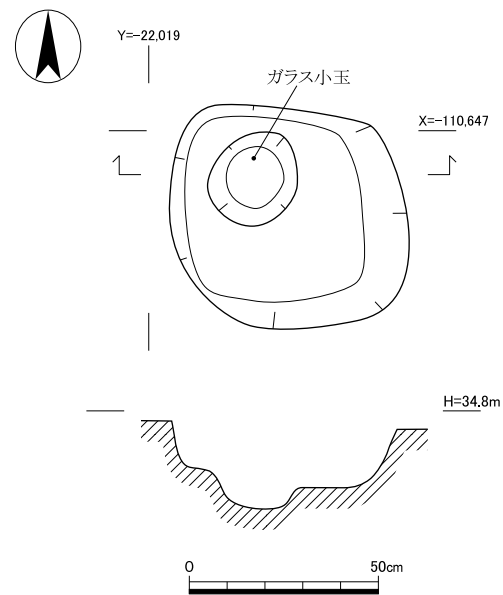


図11 柱穴456実測図（1：20）

(4) 第3期（平安時代後期から鎌倉時代）の遺構（図10、図版2-2）

10世紀末から11世紀前半代の遺物を含む、いわゆる「ウグイス土」と呼ばれる整地層（図6-31層）上面で検出した遺構群である。多数の小規模な柱穴を検出したが、建物としてのまとまりは確認できなかった。その他、溝、土坑などを検出した。

溝440（図版2-3） 調査区北端で検出した。東西方向に走る溝である。検出長は約5.5mで、幅は2.3～3.0mある。検出面からの深さは0.35～0.6mある。埋土は図6の79・80・93層である。底部の標高は東が西より約0.15m低い。埋土から11世紀前半代の土器が出土した。推定綾小路南築地心の南側に位置しており、内溝として掘削された溝の可能性がある。

土坑292 調査区中央南寄りで検出した。攪乱を受け、土坑の西肩部が残存するのみである。検出長は東西約0.4m、南北約0.45mある。深さは最大で検出面から約0.25mある。埋土から12世紀前半代の遺物がまとまって出土した。

土坑300 調査区北東端で検出した。不整形な土坑である。検出規模は東西約1.8m、南北約2.1mである。検出面からの深さは約0.25mで、底面は平坦である。埋土は図6の135～137層で、135層から13世紀中葉頃の土師器皿がまとまって出土した。

土坑437 調査区北東で検出した。平面形は東西約1.7m、南北約1.9mの隅丸長方形である。検出面からの深さは最大約0.3mで、底面は平坦である。埋土から11世紀末から12世紀初頭の土器が出土した。

土坑426 調査区南東で検出した。平面形は長楕円形で長径約2.2m、短径は約0.7mある。検出面からの深さは約0.2mある。埋土から12世紀後半代の土器がまとまって出土した。

(5) 第4期(室町時代前期)の遺構(図12、図版3-1)

14世紀末から15世紀前半代の遺物を含む整地層上面で検出した遺構群である。風呂遺構や風呂に関連すると考えられる遺構群を検出した。その他、土葬墓の可能性のある土坑などを検出した。また、第4期整地層掘り下げ途中で検出し、整地層と同時期の遺物を含む遺構群を第4期下層遺構群とし、平面図ではグレー線で表した。粘土採掘のための土坑と考えられるものなどがある。

風呂221・三和土230・集石237(図13、図版4) 調査区中央で検出した。東側は攪乱を受ける。風呂221の残存部の平面形は長方形で、東西約2.8m、南北約3.8mある。断面形は箱形を呈し、深さは約1.1mあり、底面は砂礫層に達する。埋土の中位には拳大の礫が詰まる。蒸し風呂形式の風呂屋形下部の排水機能施設と考えられる。北側には三和土230と集石237が取り付く。三和土230の検出範囲は東西約1.1m、南北約1.8mで、上面は径0.5～3cmの礫が敷き詰められ非常に固く締まる。また、径約15cmの石が1石、平坦面を上にして据わる。集石237の検出範囲は東西約1.1m、南北約1.9mである。深さは最大で約0.3mで、径3～20cmの礫が詰まる。断面観察(図13-Aライン)から、三和土230と集石221は一連の作業工程で施工されたものと考えられる。三和土230部分を約0.2m掘り下げて厚さ0.05前後の単位で水平に灰・炭層とシルト細砂層を交互に積み上げたのち集石237の礫を詰め、最後に三和土最上面の化粧を行っている。

風呂221の南側は攪乱が激しいが、炭の集中部が2箇所認められた(図12)。西側の炭集中部の西は残存長約0.65m、幅約0.4m、高さ約0.15mの土手状になっており、部分的に被熱を受けていること、後述する第5期で検出した風呂210とカマド211と位置関係が同じであることから、カマドの痕跡である可能性が高いと考え、カマド255とした。

集石223・224・226・228(図14、図版3-2・3) 風呂221の東側と西側で、土坑に拳大の礫が詰まる集石遺構を4基検出した。排水施設の可能性があると考えられる。西側で検出した集石223は平面円形で径約0.65m、深さは約0.3mある。上層に径5～25cmの礫が詰まる。集石223の南に位置する集石224は、平面楕円形で残存長径約0.7m、短径約0.65m、深さは約0.35mある。径5～20cmの礫が詰まる。東側で検出した集石226は、平面円形と考えられ径約1.0m、深さは約0.5mある。上層に径5～20cmの礫が詰まる。集石228は、平面不整形円形で径約0.55m、深さは約0.2mある。径3～15cmの礫が詰まる。

土坑222(図14) 集石223・224の北側で検出した。平面円形と考えられ、径約0.6m、深さは約0.2mある。上層に径5～25cmの礫が少量混じる。

土坑215(図14、図版3-4) 調査区北東隅で検出した。埋土に灰が詰まる不整形な土坑で、検出長は東西約0.7m、南北約2.3m、深さは検出面から約0.65mある。上層は灰に炭化物や木片がやや多く混じり(断面1層)、中層は不純物の少ない灰層であった(2層)。灰の中に含まれる炭化物は広葉樹である。

土坑253(図版5-1) 調査区北半で検出した。三和土230、埋甕263を削平する。不整形な土坑で検出長は東西約2.2m、南北約3.3m、深さは最大で約0.9mある。断面形は擂鉢状で埋土には

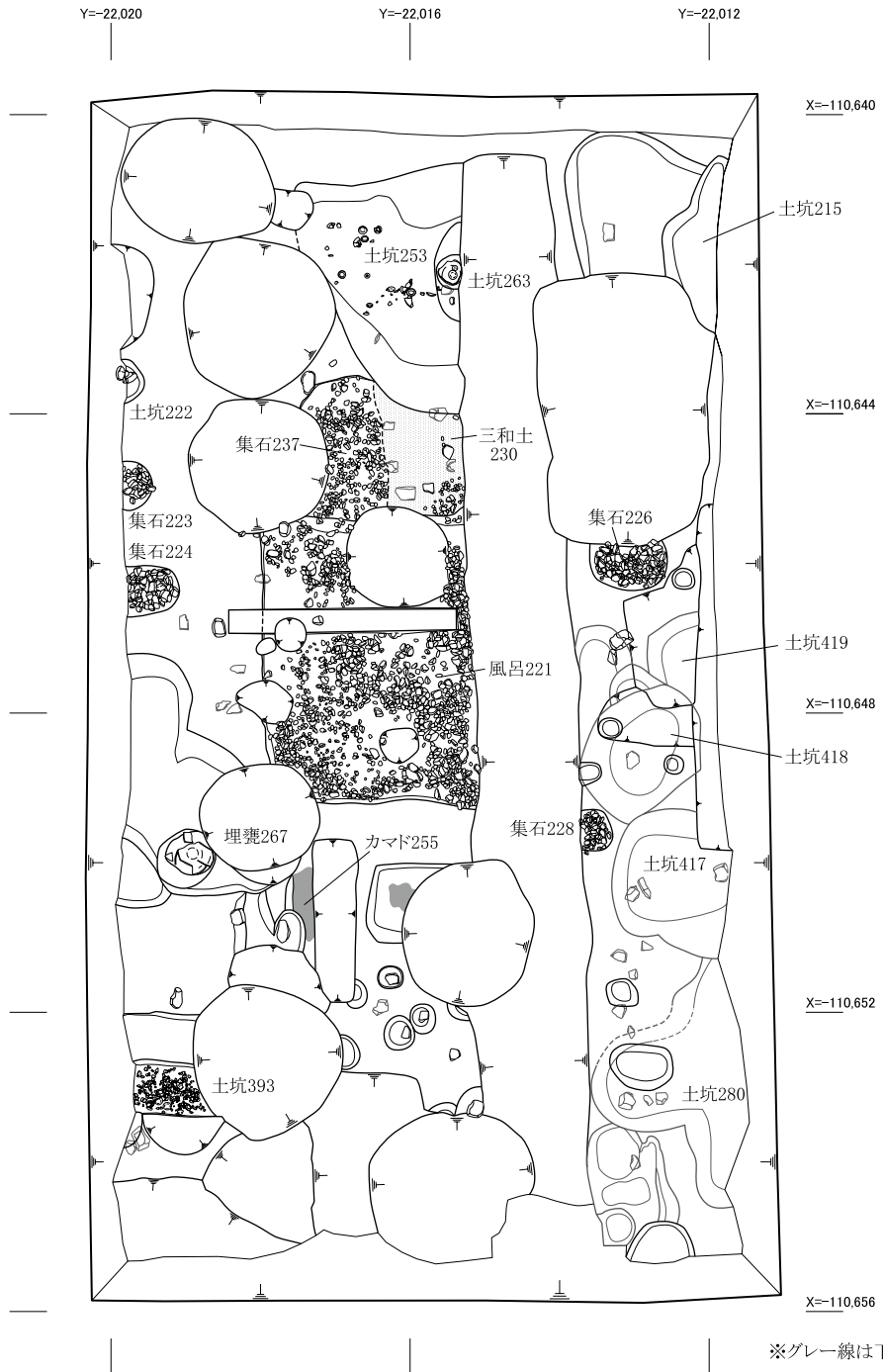
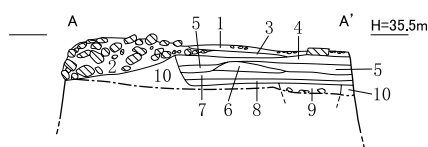
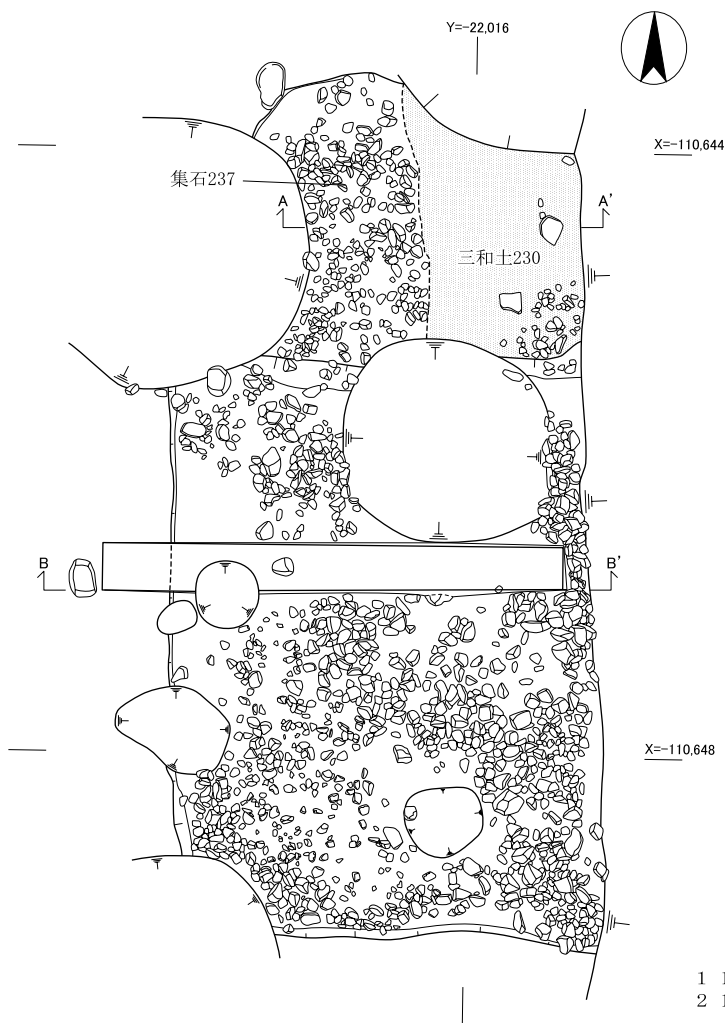
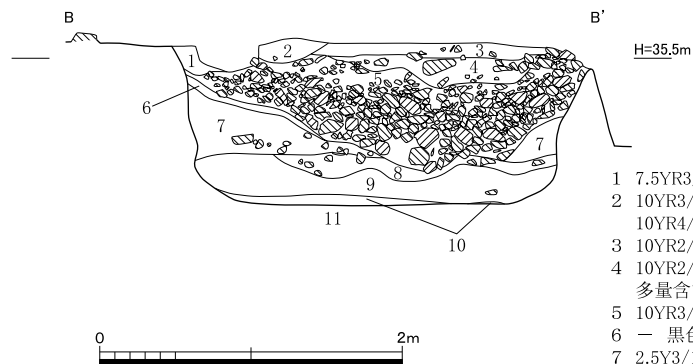


図12 第4期遺構平面図 (1 : 100)



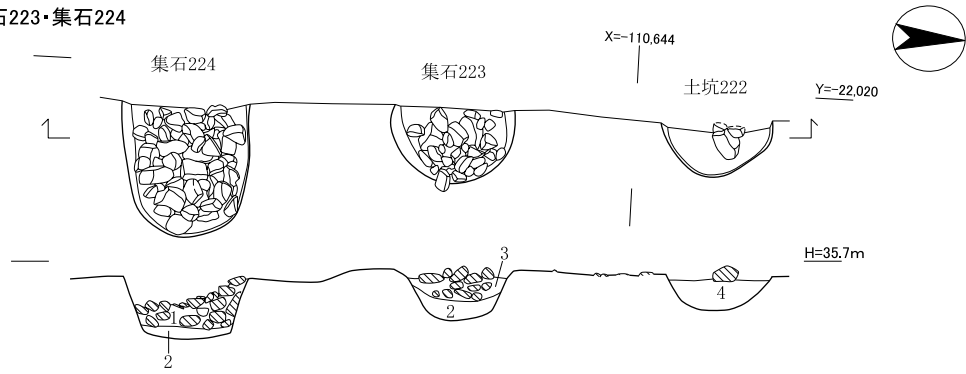
- 1 10YR3/1 黒褐色シルト～細砂 φ0.5～3cmの礫敷く
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト～細砂 粘土質
φ3～20cmの礫詰まる
- 3 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂
- 4 10YR2/1 極細砂 炭混じる
- 5 10YR3/2 黒褐色シルト～細砂
10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック混じる固く締まる
- 6 7.5YR3/2 黒褐色シルト～細砂 炭・灰混層
- 7 10YR2/2 黒褐色シルト～細砂
7.5YR3/2 黒褐色シルトブロック混じる
- 8 10YR2/1 黒色シルト～細砂 炭・灰多量含む
- 9 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト～細砂
φ3～10cmの礫多量(下層遺構)
- 10 2.5Y3/2 黒褐色シルト～細砂 炭・小礫混じる(4期整地)



- 1 7.5YR3/3 暗褐色シルト 焼土多量(上層遺構)
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト～細砂
10YR4/3 にぶい黄褐色シルトブロック多量含む
- 3 10YR2/1 黒色シルト～細砂 2.5Y5/3 黄褐色シルトブロック多量含む
- 4 10YR2/2 黒褐色シルト～細砂 2.5Y5/3 黄褐色シルトブロック
多量含む φ3～25cmの礫中量
- 5 10YR3/1 黒褐色シルト～細砂 φ3～20cmの礫詰まる
- 6 — 黒色 炭層
- 7 2.5Y3/1 黒褐色シルト～細砂 φ3～10cmの礫中量
- 8 10YR1.7/1 黒色シルト～細砂 炭・遺物多量含む
- 9 2.5Y3/2 黒褐色シルト～細砂 φ3～15cmの礫中量
- 10 2.5Y5/3 黄褐色シルト 2.5Y3/1 黒褐色シルト～細砂混じる
- 11 2.5Y4/1 黄灰色細砂～粗砂 φ3～15cmの礫多量(砂礫基盤層)

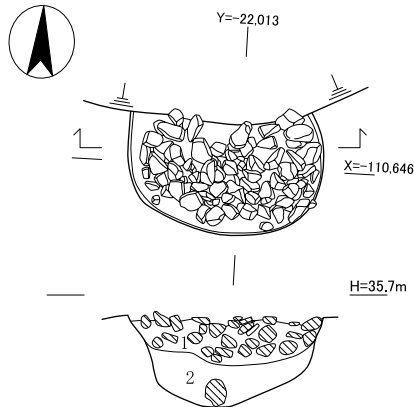
図13 風呂221・三和土230・集石237実測図 (1:50)

土坑222・集石223・集石224



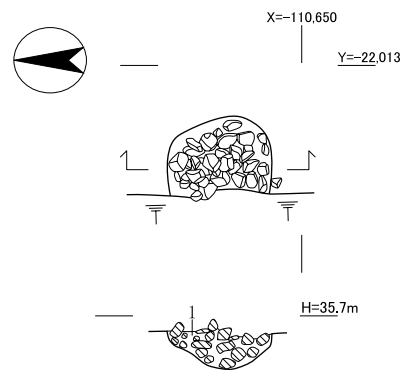
- 1 2.5Y3/1 黒褐色シルト～細砂 やや粘土質 炭少量、φ5～20cmの礫詰まる
- 2 2.5Y2/1 黒色シルト～細砂 炭・焼土少量
- 3 2.5Y3/2 黒褐色細砂 やや粘土質 φ5～25cmの礫詰まる
- 4 2.5Y3/1 黒褐色細砂～粗砂 φ5～25cmの礫少量

集石226



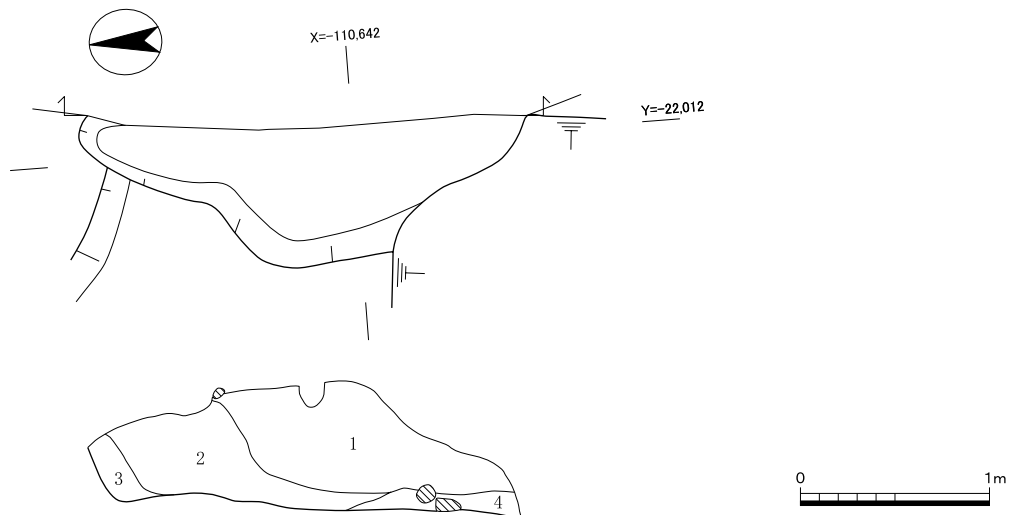
- 1 2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルト 炭少量、φ5～20cmの礫詰まる
- 2 2.5Y3/1 黒褐色シルト～細砂 炭・焼土中量

集石228



- 1 2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルト 炭少量、φ3～15cmの礫詰まる

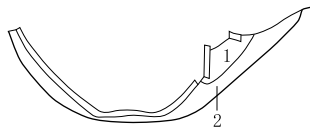
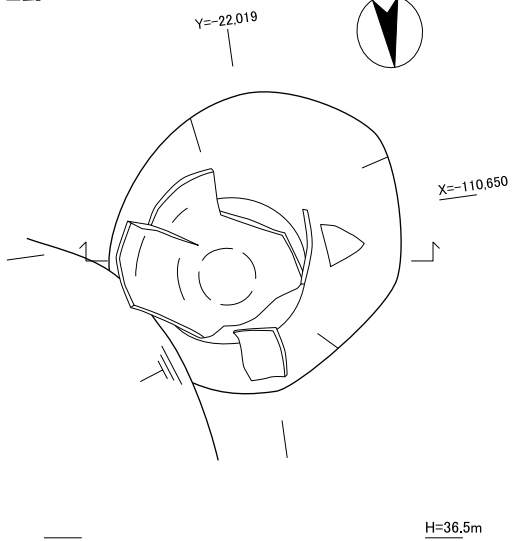
土坑215



- 1 10YR8/1 灰白色極細砂 10YR2/2 黒褐色極細砂まだらに混(灰層)
- 2 7.5YR8/1 灰白色極細砂 炭中量混
- 3 7.5YR5/1 褐灰色シルト 炭中量混
- 4 10YR7/2 にぶい黄褐色極細砂 φ5～20cmの礫多量

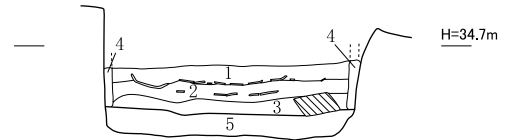
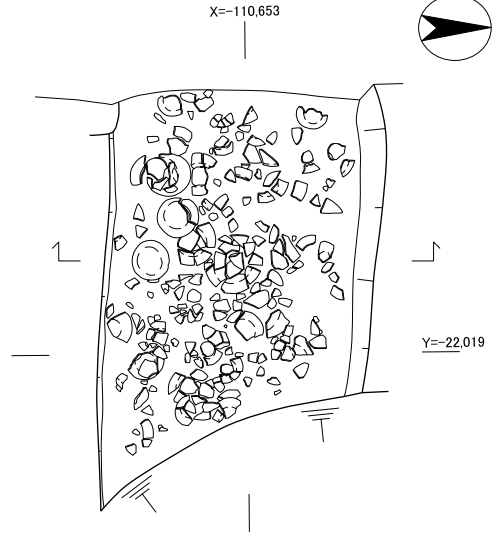
図14 集石群、土坑215実測図 (1 : 40)

埋甕267



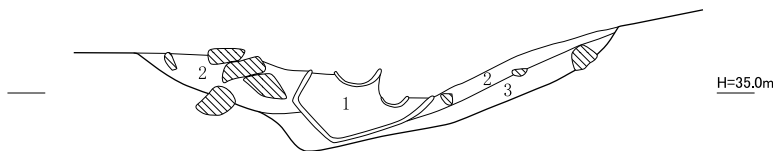
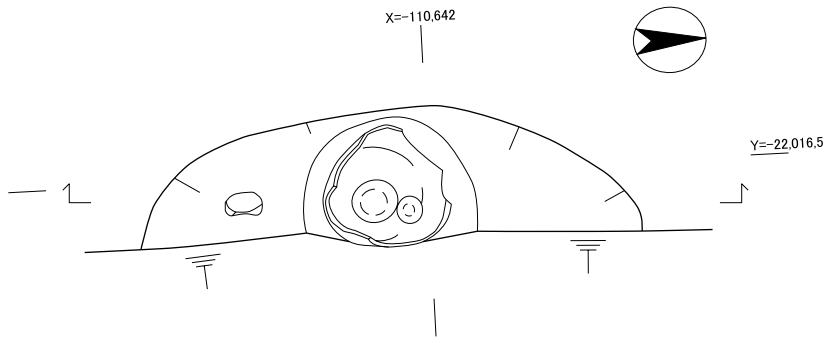
- 1 2.5Y4/1 黄灰色シルト～細砂 焼土・炭多量
- 2 2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルト 炭・焼土少量

土坑393



- 1 炭層
- 2 N2/ 黒色極細砂 炭多量
- 3 5Y4/1 灰色極細砂～細砂
- 4 2.5Y3/1 黒褐色 粘質粘土
- 5 7.5Y4/1 灰色 細砂～粗砂に
ウグイス土ブロック多量混じる(床)

土坑263



- 1 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト～細砂 炭少量
- 2 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト～細砂 φ3～15cmの礫・炭多量
- 3 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト



図15 埋甕267、土坑263・393実測図 (1 : 20)

多量の灰や炭化物のほか、完形に近い土師器皿なども多量に含まれる。遺物の帰属時期は15世紀中葉である。

土坑393（図15、図版5-2） 調査区南西で検出した。平面長方形の土坑である。残存東西長は約1.15m、南北幅は約0.7mある。掘形の断面形は箱形で、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。深さは検出面から約0.45mあり、最下層に床土を約0.1mの厚さで入れ、平坦にしている。壁際には木材が腐植したと考えられる粘土層が貼り付き、板壁構造になっていたと考えられる。内部には完形に近い多数の土師器皿が正位置に据えられ、その上を炭層が覆っていた。土葬墓の可能性が高い。遺物の帰属時期は15世紀中葉である。

埋甕267（図15、図版5-3） 風呂221の南西で検出した。上部は削平され、据えられた常滑産大甕の下半部のみが残る。掘形の残存径は約0.75m、残存深は約0.25mある。据えられた常滑大甕は、ひび割れ部を内外面から漆で補修していた。

土坑263（図15、図版5-4） 調査区北半中央で検出した。上部は土坑253に削平され、東半は攪乱を受ける。掘形の残存径は南北約1.3m、東西約0.35m、深さは約0.3mある。中央に備前産壺の下半部が斜め向きに埋まる。壺内部から完形の大小の土師器皿2点が出土した。

土坑280・417・418・419 調査区南東で第4期整地層掘り下げ中に検出した南北に連なる土坑群である。いずれも形状は不整形で、壁が抉るように掘削され、底面は砂礫層上面で止まることから、粘土採掘のための土取り土坑と考えられる。土坑280の検出規模は、東西約2.0m、南北約3.4mで、深さは検出面から約1.0mある。土坑417の検出規模は、東西約1.5m、南北約1.8mで、深さは検出面から約1.2mある。この土坑417からは15世紀前葉の土師器皿が大量に出土した。土坑418の検出規模は、東西約1.5m、南北約1.8mで、深さは検出面から約0.8mある。土坑419の検出長は、東西約0.6m、南北約1.1m、深さは検出面から約1.0mある。

（6）第5期（室町時代後期）の遺構（図16、図版6-1）

15世紀中葉の遺物を含む整地層上面で検出した遺構群である。風呂遺構、カマド、蔵の基礎と考えられる地業、火災処理土坑と考えられる土坑などを検出した。

風呂210・カマド211（図17、図版6-2・3） 調査区東端で検出した。遺構の東半は調査区外に拡がると考えられる。風呂210の平面形は長方形と考えられ、検出長は南北約4.5m、東西約0.65mである。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、深さは約1.7mある。埋土中層の29～32層は、シルト～中砂の砂質土で、蒸し風呂形式の風呂屋形下部の排水機能施設と考えられる。砂質土上面では、地下式礎石と考えられる石4・6、礎石と考えられる石5が成立する。風呂屋形の柱に関わるものである可能性がある。砂質土上面には、径15～30cmの礫が固まる箇所があり、その上に粘土～シルトと炭・焼土層が薄く互層になって堆積する。その上面には、完形の土師器皿や輸入陶磁器の皿が正位置に据えられていた（図版7-4）。この土器群と、最上層埋土（22層）から出土した土器群は、風呂210構築土、さらには風呂210北側を削平する土坑170出土の土器群よりも新しい時期の一群であることから、風呂210廃絶後、埋め戻しに際し、祭祀を行ったものと推測される。

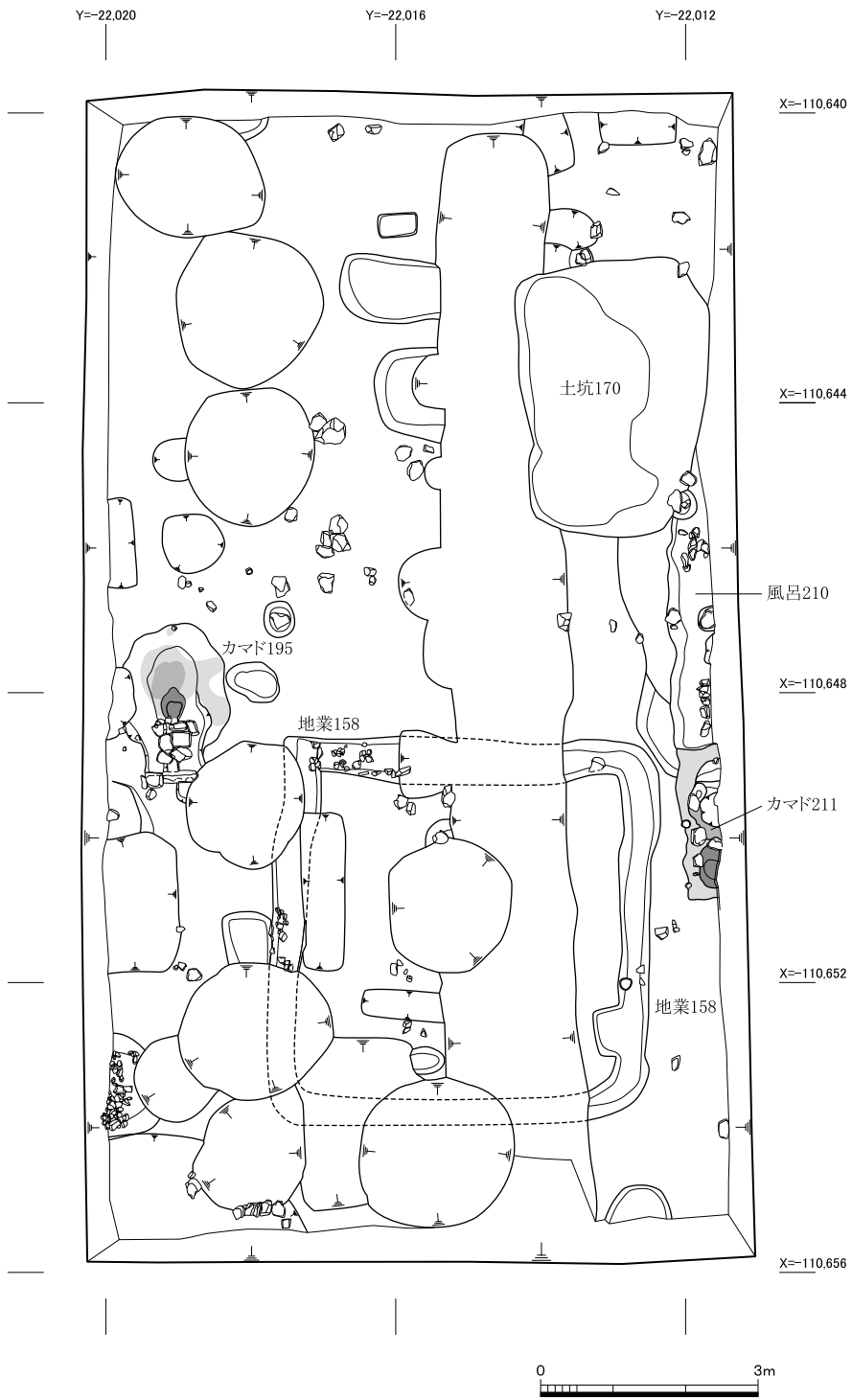
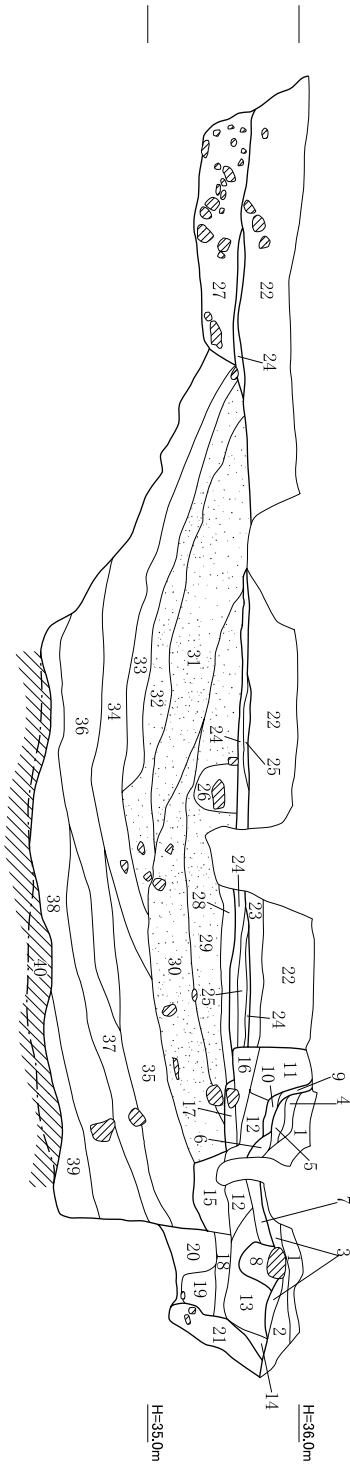
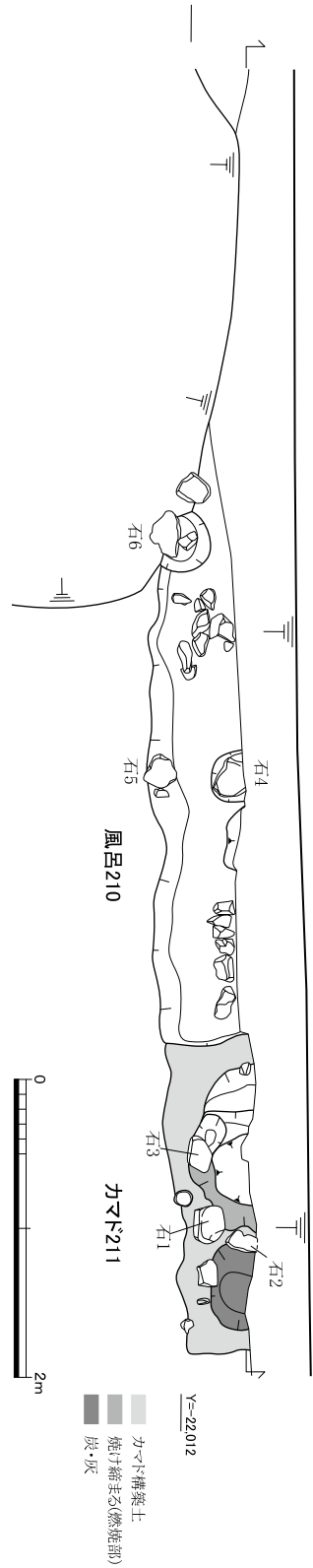


図16 第5期遺構平面図 (1 : 100)



X=-110.644

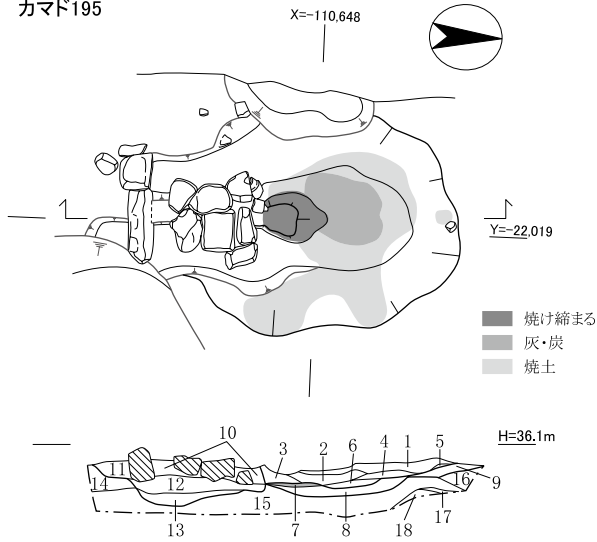
X=-110.648



- | | | |
|--|------------------------------------|----------------------------------|
| 1 2.5Y7/4 浅黄色粘土質シルト 焼土少量含 | 15 10YR2/1 黒色シルト～中砂 炭少量 | 28 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細砂 固く縮まる |
| 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト 炭多量混 | 16 2.5Y4/1 黄灰色粗砂 焼土・炭多量 | 29 10YR5/3 に近い黄褐色 中砂 砂質 |
| 3 炭・灰層 | 17 10YR2/2 黒褐色細砂 炭多量 | 30 10YR2/1 黒色シルト～細砂 炭中量混 砂質 |
| 4 7.5YR5/6 明褐色シルト 焼土多量 | 18 2.5Y3/1 黒褐色シルト～細砂 やや粘質 炭少量 | 31 2.5Y5/3 黄褐色細砂 砂質 |
| 5 7.5YR4/4 褐色シルト 炭・焼土多量 | 19 10YR1/7.1 黒色シルト 炭多量 粘質 炭少量 | 32 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細砂 炭・焼土少量混 砂質 |
| 6 5YR4/4 に近い黄褐色細砂(焼土) | 20 10YR3/1 黒褐色シルト～細砂 粘質 炭少量 | 33 7.5YR2/2 黒褐色シルト～細砂 炭多量 |
| 7 5YR3/6 暗赤褐色シルト 下層炭層 非常に固く縮まる(カマド燃焼部) | 21 10YR3/1 黒褐色シルト 粘質 | 34 7.5YR2/1 黒褐色シルト～中砂 炭・焼土中量混 |
| 8 10YR6/4 に近い黄褐色シルト 焼土少量(石2掘形) | 22 10YR3/1 黒褐色シルト～中砂 炭・焼土中量 | 35 7.5YR2/1 黒褐色シルト～細砂 炭少量 |
| 9 10YR4/3 に近い黄褐色シルト 固く縮まる | 23 2.5Y4/1 黄灰色粗砂 | 36 10YR3/1 黒褐色シルト～細砂 |
| 10 10YR2/2 黒褐色シルト～細砂 非常に固く縮まる | 24 2.5Y6/4 に近い黄色 粘土～シルト | 37 2.5Y3/2 黒褐色 細砂 |
| 11 10YR3/2 黒褐色シルト～細砂(カマド風呂の隔壁) | 25 炭土焼土の層 | 38 10YR3/1 黒褐色シルト～中砂 炭少量 |
| 12 10YR2/1 黒色シルト～細砂 炭・焼土中量 | 26 10YR3/2 黒褐色シルト～細砂(石4) | 39 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細砂 |
| 13 10YR5/4 に近い黄褐色極粗砂～小礫 | 27 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細砂 φ5～15cmの礫詰まる | 40 10YR4/3 に近い黄褐色シルト(基盤層) |
| 14 2.5Y3/1 黒褐色シルト～細砂 やや粘質 炭少量 | | |

図17 風呂210、カマド211実測図 (1 : 50)

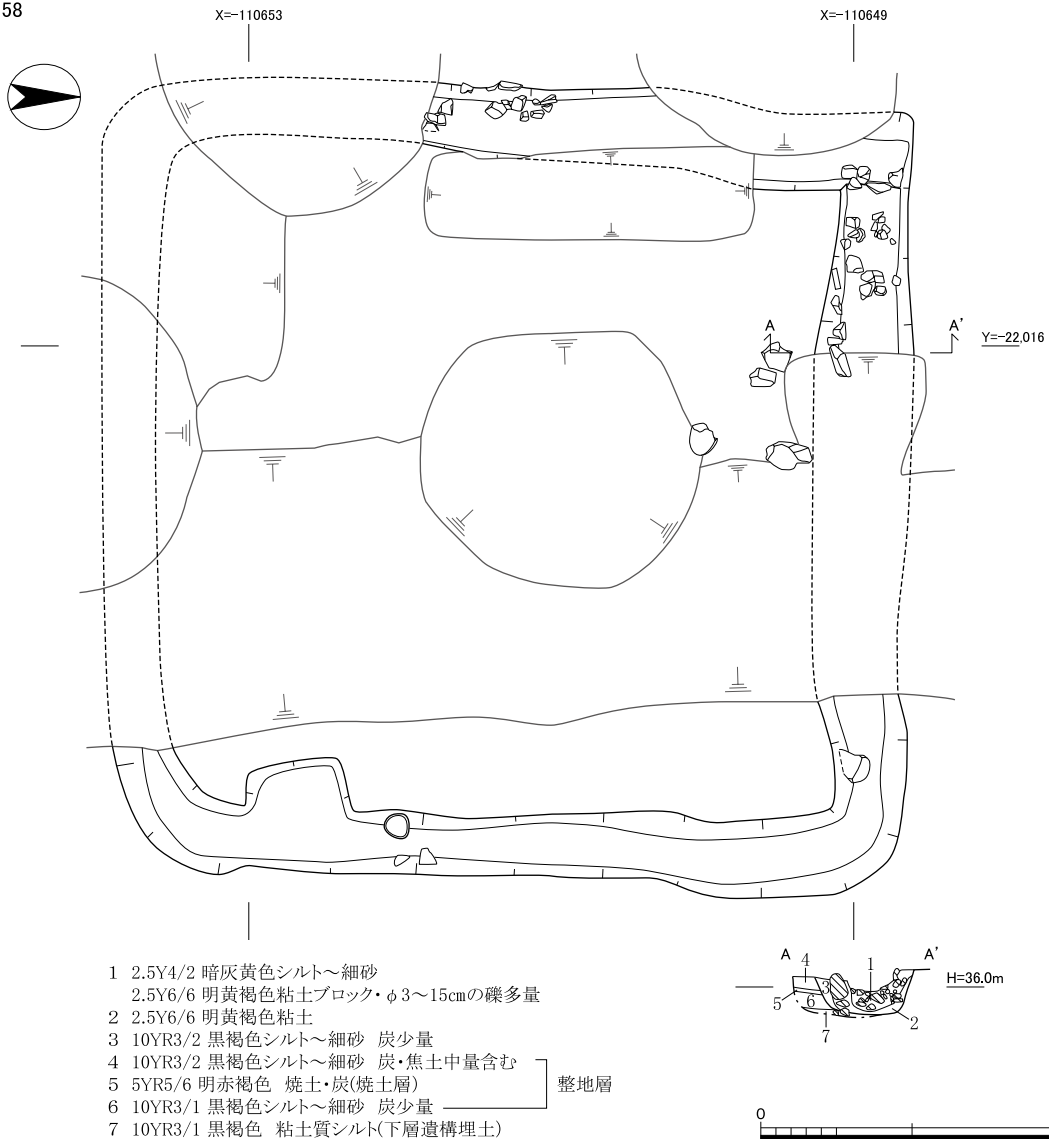
カマド195



- 1 2.5Y3/3 暗オリーブ色粘質シルト
- 2 7.5YR2/3 極暗褐色シルト 炭・焼土混じる
- 3 7.5YR2/2 黒褐色シルト 灰・炭多量
- 4 10YR2/3 黒褐色シルト～細砂 炭・焼土混じる
- 5 5YR5/6 明赤褐色シルト 焼土多量
- 6 5YR3/2 オリーブ黒色シルト 灰・炭多量
- 7 5YR4/3暗オリーブ色シルト 焼け締まる
- 8 5YR3/3 暗赤褐色シルト～細砂 灰多量(カマド床土)
- 9 7.5YR2/2 黒褐色シルト～細砂 焼土混じる(カマド構築土)
- 10 10YR3/2 黒褐色シルト～細砂
- 10YR6/4 にぶい黄橙色シルトブロック混じる
- 11 10YR2/2 黒褐色シルト～細砂
- 12 10YR2/2 黒褐色シルト～細砂
- 13 2.5Y3/2 黒褐色 細砂～粗砂 焼土ブロック混じる
- 14 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細砂
- 15 2.5Y3/1 黒褐色シルト～細砂
- 粗砂・炭混じる 締め弱い
- 16 2.5Y3/2 黒褐色シルト～細砂
- 17 2.5Y5/2 灰赤色細砂～粗砂
- 18 2.5Y3/1 黒褐色シルト～細砂

整地土

地業158



- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト～細砂
- 2.5Y6/6 明黄褐色粘土ブロック・φ3～15cmの礫多量
- 2 2.5Y6/6 明黄褐色粘土
- 3 10YR3/2 黒褐色シルト～細砂 炭少量
- 4 10YR3/2 黒褐色シルト～細砂 炭・焦土中量含む
- 5 5YR5/6 明赤褐色 焼土・炭(焼土層)
- 6 10YR3/1 黒褐色シルト～細砂 炭少量
- 7 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト(下層遺構埋土)

整地層



図18 カマド195、地業158実測図 (1:50)

つまり、風呂機能時には半地下式構造になっていたと考えられる。また、風呂210北側は土坑170に削平され、平面的には捉えられなかったが、調査区東壁の断面観察で掘形の南北長が約5.8mあり、さらに北側に南北約1.7m、深さ約0.3mの集石遺構が取り付くことが判明した(27層)。径5～15cmの礫が詰まり、風呂210と同じ埋土22層で覆われる。第4期で検出した風呂221北側に取り付く集石237と類似する遺構の可能性が高い。

カマド221は、風呂210の南に接続するカマドである。カマド掘形の北半は風呂210の掘形と重複する。掘形の南北長は約2.1m、検出幅は約0.3m、深さは最深で約1.0mある。掘形の側面と上面は固く締まる粘土質のシルトで構築される。石1・2は焚口を構成するは石で、石1が西側の柱石、石2は仕切り石である。本来は鳥居形に組まれていたものと考えられる。石1・2ともに花崗岩系石材である。石1・2より南には掻きだした炭と灰が溜まる(3層)。石1・2より北は燃焼室で、焚口に近い箇所は非常に固く焼け締まり(7層)、炭と灰が堆積する(3層)。奥は一段深くなり、焼土が堆積する(6層)。

土坑170 調査区北東に位置し、風呂210を削平する。平面隅丸長方形の土坑で、東西約1.3m、南北約1.9m、深さは約1.55mある。壁は垂直に近い角度で立ち上がる。埋土は炭と焼土を多量に含む10YR3/2黒褐色細砂で、埋土中から二次被熱を受けた土器や瓦類、壁土が多量に出土した。火災後の処理土坑と考えられる。遺物の時期は15世紀末頃のものである。

カマド195(図18、図版7-1) 調査区西半中央で検出した。南半の石組みは焚口の足場、北半が燃焼室と考えられる。石組みは、南端に花崗岩系の横長の石材を2石並べ、中央に平坦な石を4石敷く。北東の1石が花崗岩系で他は砂岩系石材である。これらの石材は二次被熱を受ける。その北に3石並べられた石材は、断面観察の結果、構築土に覆われ(10層)カマド機能時には露出していなかったと考えられ、この3石は二次被熱を受けない。燃焼室は東西約1.4m、南北約1.2mの馬蹄形を呈する。焚口付近は非常に固く焼け締まり(7層)、その北側に灰・炭層、その周囲に焼土層が広がる。

地業158(図18、図版7-2・3) 調査区南半で検出した。一辺約5.0mの正方形の布掘地業である。幅0.4～0.6m、深さ0.25～0.4mの溝に黄褐色粘土ブロックと径3～15cmの礫が詰められ、非常に固く締まる。蔵などの基礎部分と考えられる。

(7) 第6期(戦国時代)の遺構(図19、図版8-1)

16世紀前半代の遺物を含む整地層上面で検出した遺構群である。町家に関連すると考えられる柱列や井戸、庭、石室、石組炉などを検出した。

柱列8 調査区北西で検出した南北方向の柱列である。溝85の底で礎石と柱穴を検出した。溝85は布掘掘形と考えられる。溝85は検出長約4.2m、幅0.5～1.0m、深さは0.1～0.25mある。底には柱間0.7～1.0mの間隔で地下式礎石と柱穴が交互に並ぶ。この柱列8に沿って東側が三和土になっている。

柱列9 調査区北半中央で検出した南北方向の柱列である。柱間は0.4～1.2mと不均等である。

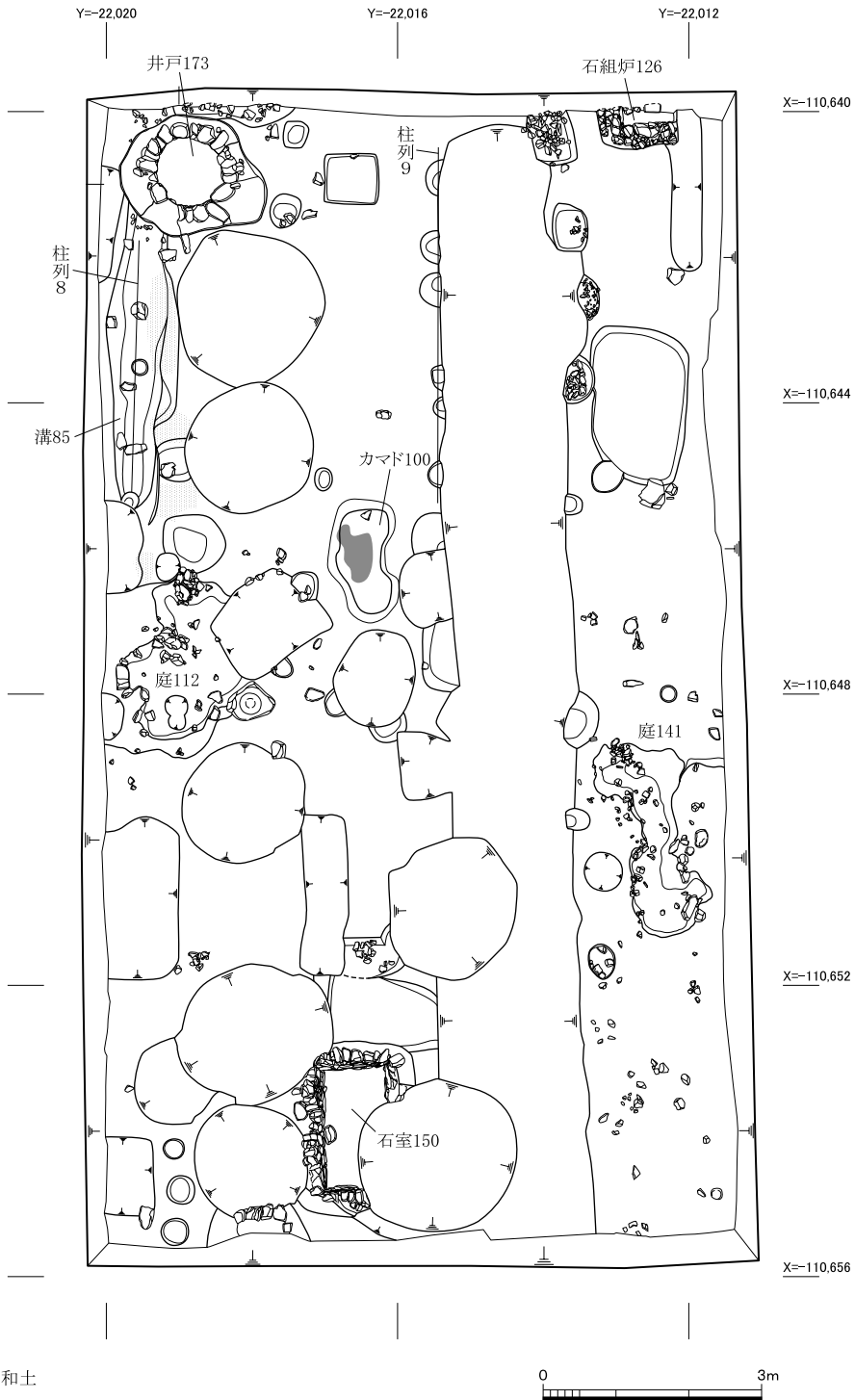
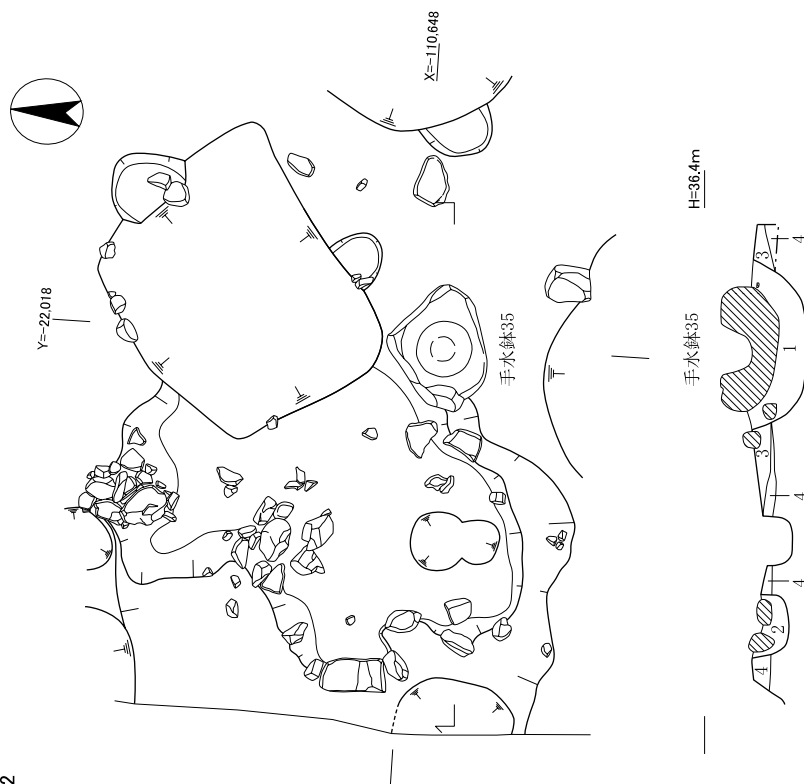


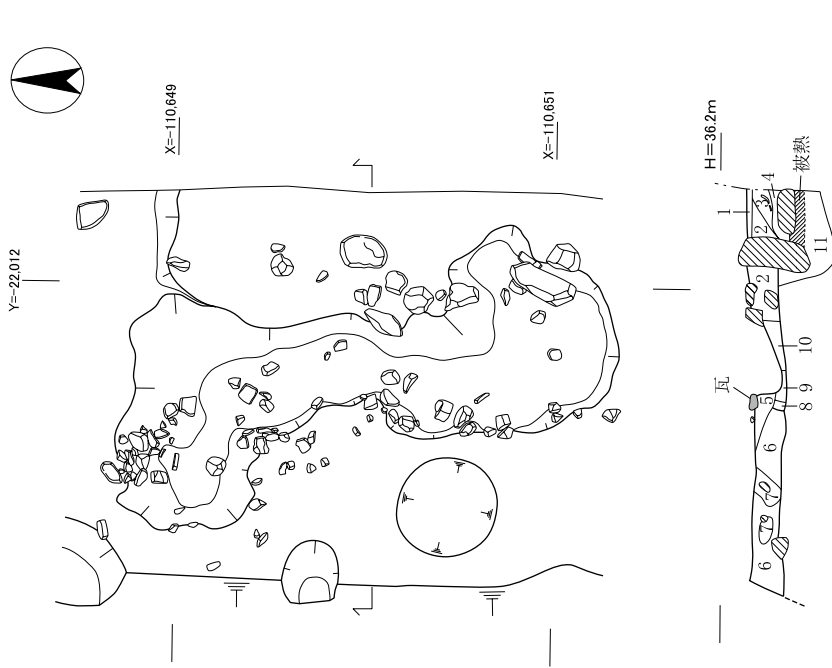
図19 第6期遺構平面図 (1 : 100)

庭112



- 1 10YR4/1 褐灰色シルト～細砂 粗砂混、炭少量(手水鉢35掘形)
- 2 7.5YR3/1 黒褐色シルト～細砂 焼土少量
- 3 10YR2/1 黒色細砂 焼土多量(整地層)
- 4 10YR3/2 黒褐色シルト～細砂 炭・焼土少量(整地層)

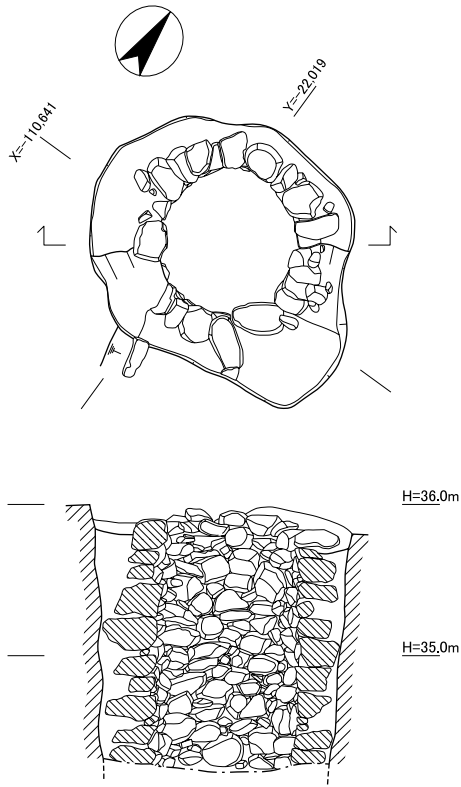
庭141



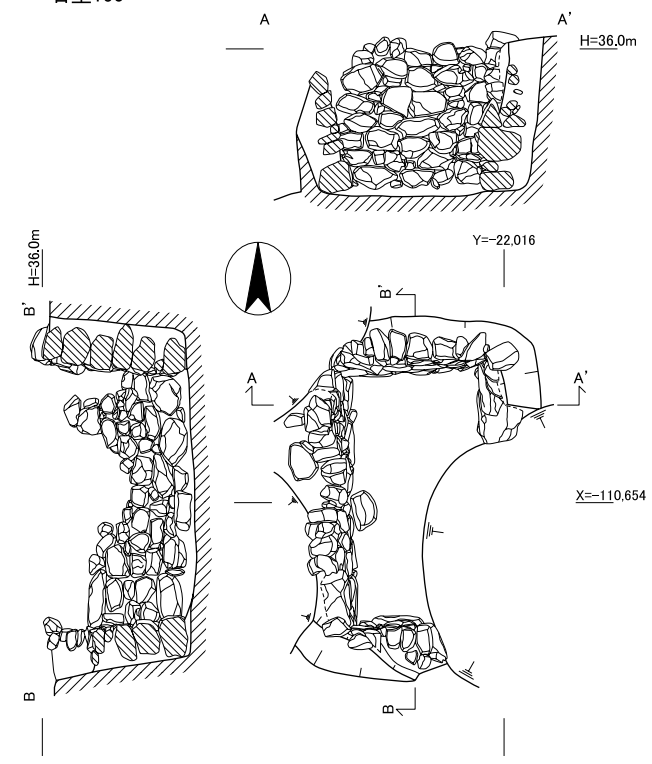
- 1 2.5Y6/3 にぶい 黄色シルト～細砂 やや粘土質
- 2 2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルト
- 3 2.5Y7/6 明黄褐色粘土質シルト
- 4 7.5YR4/6 褐色シルト 焼土・炭層(カマド21埋土)
- 5 10YR4/1 褐灰色シルト～細砂 炭・焼土中量 φ1～5cmの礫混じる
- 6 10YR3/1 黒褐色シルト～細砂 2.5Y5/3 黄褐色シルトブロック・炭・焼土混じる
- 7 5YR4/4 にぶい 赤褐色シルト～細砂 炭・焼土ブロック含む
- 8 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト
- 9 2.5Y3/1 黒褐色シルト～細砂 炭・焼土多量
- 10 2.5Y3/1 黒褐色シルト～細砂 炭混じる
- 12 2.5Y6/6 明黄褐色粘土 極細砂含む、上面被熱により固くなる

図20 庭112・141実測図 (1 : 40)

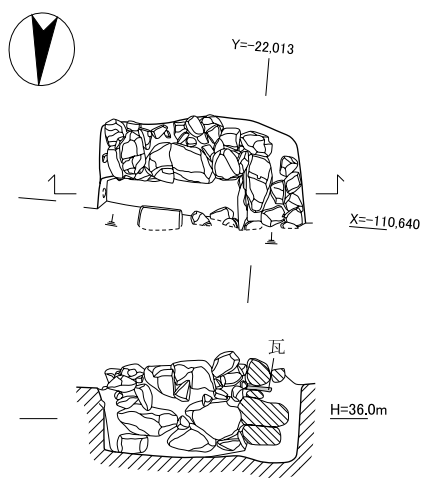
井戸173



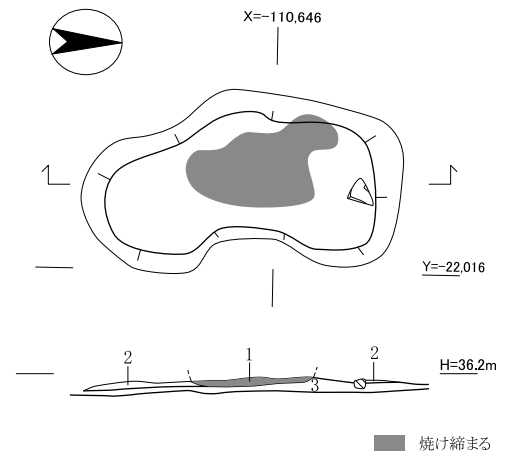
石室150



石組炉126



カマド100



■ 焼け締まる

- 1 5YR5/6 明赤褐色シルト 固い(燃焼部)
- 2 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト(カマド構築土)
- 3 2.5Y3/1 黒褐色シルト～細砂 非常に固い



図21 井戸173、石室150、石組炉126、カマド100実測図 (1 : 50、1 : 40)

柱列を構成する柱穴は径0.3～0.45 m、深さは0.2～0.35 mある。

庭112 (図20、図版9-2) 調査区西半中央で検出した。東西約1.7 m、南北約2.1 mの不整形な浅い池状遺構の縁に径5～30 cmの石が配される。南東部には手水鉢35が据えられる。手水鉢35は花崗岩系の石材で、長径約65 cm、短径約45 cm、厚みは最大で35 cmある。底部は丸みを帯び、径約0.9 m、深さ約0.3 mの円形掘形に礫を入れ、上面が南西側にやや傾くように据えられていた。

庭141 (図20、図版9-1) 調査区東半南寄りで検出した。東西約1.6 m、南北約2.6 mの不整形な浅い池状遺構の縁に径5～35 cmの石がまばらに配される。池状遺構の東側は、第5期のカマド211の高まりを利用し、上面に粘土質のシルト～細砂を貼り(1層)、化粧土としている。

井戸173 (図21、図版10-1) 調査区北西隅で検出した。円形石組井戸である。掘形は長径約2.0 mのいびつな円形を呈する。石組の内径は約0.9 mある。石材は花崗岩系と砂岩系、チャートが混在する。人力掘削で検出面から約1.7 mまで掘り下げたが底は確認できず、調査終了時に重機で掘り下げ、標高32.3 mで底を確認した。検出面からの深さは3.7 mである。埋土から16世紀中葉の土器が出土した。

石室150 (図21、図版8-2) 調査区南端で検出した。平面長方形の石室である。掘形は東西約1.7 m、南北約2.4 m、深さは検出面から約1.0 mある。石組の内径は東西約0.9 m、南北約1.7 m、深さは約0.9 mある。底は固く叩き締まる。石材は花崗岩系、砂岩系、チャートが混在する。埋土から16世紀中葉の土器が出土した。

石組炉126 (図21、図版8-3) 調査区北東隅で検出した。平面方形の石組炉で、遺構の北半部は調査区外に延びる。検出した掘形の東西径は約1.3 m、南北径は約0.7 m、深さは検出面から約0.6 mある。石組は南面と西面にあり、東側が焚口となり、コの字形に石が組まれていたものと推測される。石材は砂岩系が主体で花崗岩系、チャートが少量混じる。石材の表面は二次被熱を受け赤変する。底には床土として粘土質シルトが貼られ(図6-133層)、埋土は焼土が詰まる(図6-132層)。

カマド100 (図21) 調査区中央北寄りで検出した。東側に焚口をもつカマドの基底部と考えられる。わずかに馬蹄形の高まりが残り、燃烧部は固く焼け締まる。

(8) 第7期(安土桃山時代から江戸時代)の遺構(図22、図版10-3)

16世紀から17世紀前半の遺物を含む整地層上面で検出した遺構群である。17世紀前半から19世紀の遺構を同一面で検出した。礎石列、井戸など町家に関連する遺構が大半を占める。また、調査区北半部では先述の整地層の下に焼土を多量に含む整地層(図6-33層)で形成された遺構面を確認した。焼土層出土遺物の年代から16世紀末頃の安土桃山時代の遺構面と考えられ、その上面で検出した遺構については平面図では第7期下層遺構としてグレートーンで表した。

礎石列1～3 調査区全域で、南北方向の礎石列を検出した。各礎石列に沿って焼土の拡がりがあるが確認でき、火災により壁が焼失したものと考えられる。礎石列1は調査区西端に位置する。現代盛土直下で検出したため残存しない礎石があると考えられ、柱間は1.0～4.0 mと不均等であるが、5

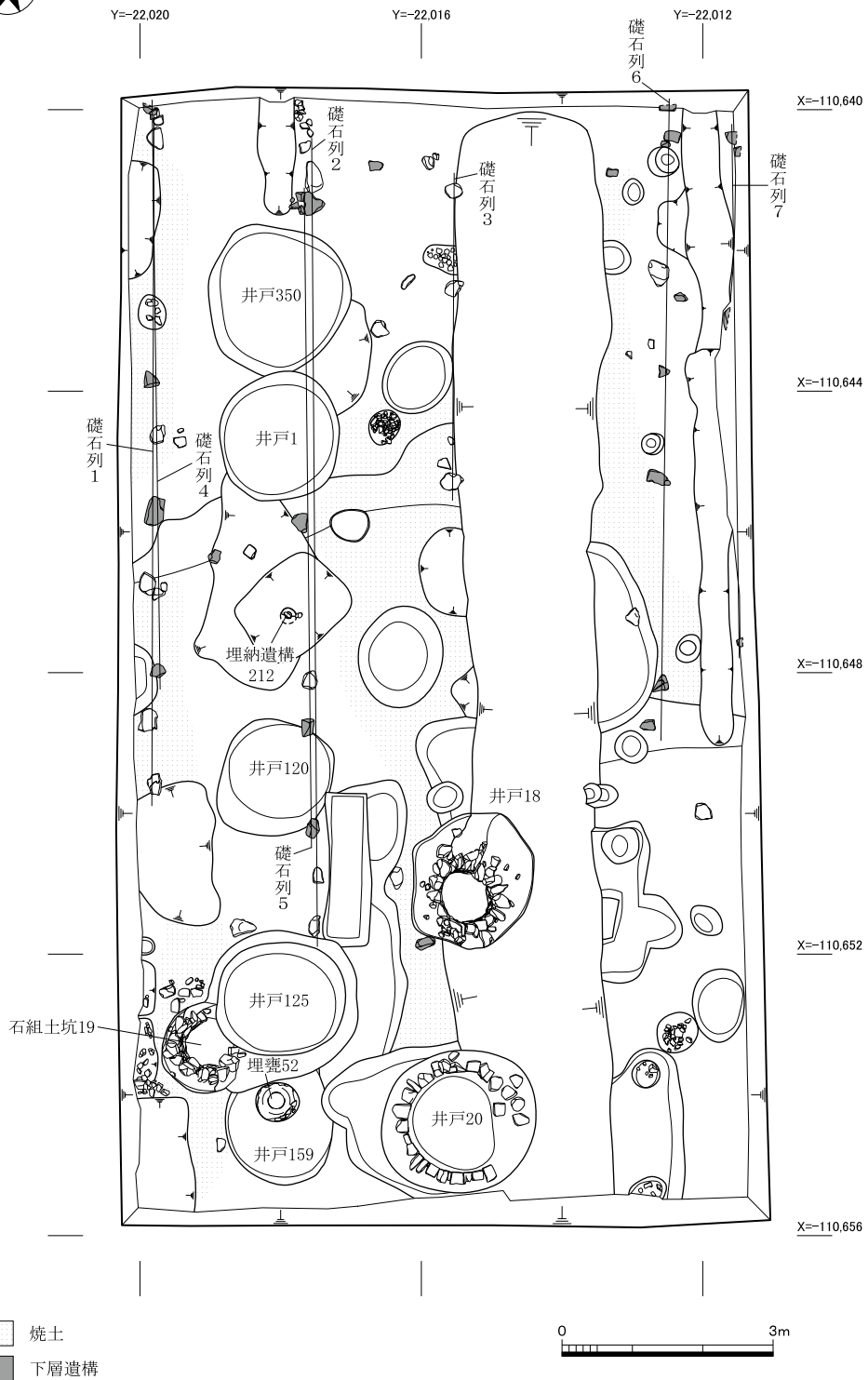


図22 第7期遺構平面図 (1 : 100)

石が南北に並ぶ。礎石列1は、第6期の柱列8と第7期下層の礎石列4の位置をほぼ踏襲する。礎石列2は、礎石列1の東約2.2mに位置し、南北4石を検出した。第7期下層の礎石列5の位置をほぼ踏襲する。礎石列1と礎石列2の間に江戸時代の各時期の井戸や、トイレ遺構と考えられる石組土坑19、埋甕52が位置することから、この間が町家の通り庭として機能していた可能性が考えられる。礎石列3は礎石列2の東約2.0mに位置する。南北3石分を検出した。礎石列3は第6期の柱列9の位置を踏襲する。

礎石列4～7（図版10-2） 第7期下層遺構として検出した礎石列である。礎石列4は調査区西端に位置し、第6期で検出した柱列8の位置を踏襲するものである。柱間は不等間であるが、5石が南北に並ぶ。礎石列5は、礎石列4の東約2.1mに位置し、南北4石を確認した。礎石列6は調査区東半で検出した。南北7石を検出したが、柱間と並びがやや不均等で、床を支える東石列の可能性もある。礎石列7は調査区東端で南北に並ぶ3石を検出した。

井戸18（図23、図版11-1・2） 調査区南半中央で検出した。円形石組井戸である。東側は大きく削平を受ける。掘形は長径約1.9mのいびつな円形を呈する。石組の内径は約0.7mある。石材は花崗岩系と砂岩系、チャートが混在する。人力掘削で検出面から約2.5mまで掘り下げたが底は確認できなかった。埋土から17世紀前半代の遺物が出土した。

井戸20（図版11-1） 調査区南端で検出した。円形石組井戸である。寛政元年（1789）に当地で創業した田中長奈良漬店で使用されたもので、田中家が隣地を買い取り現在の間口となった

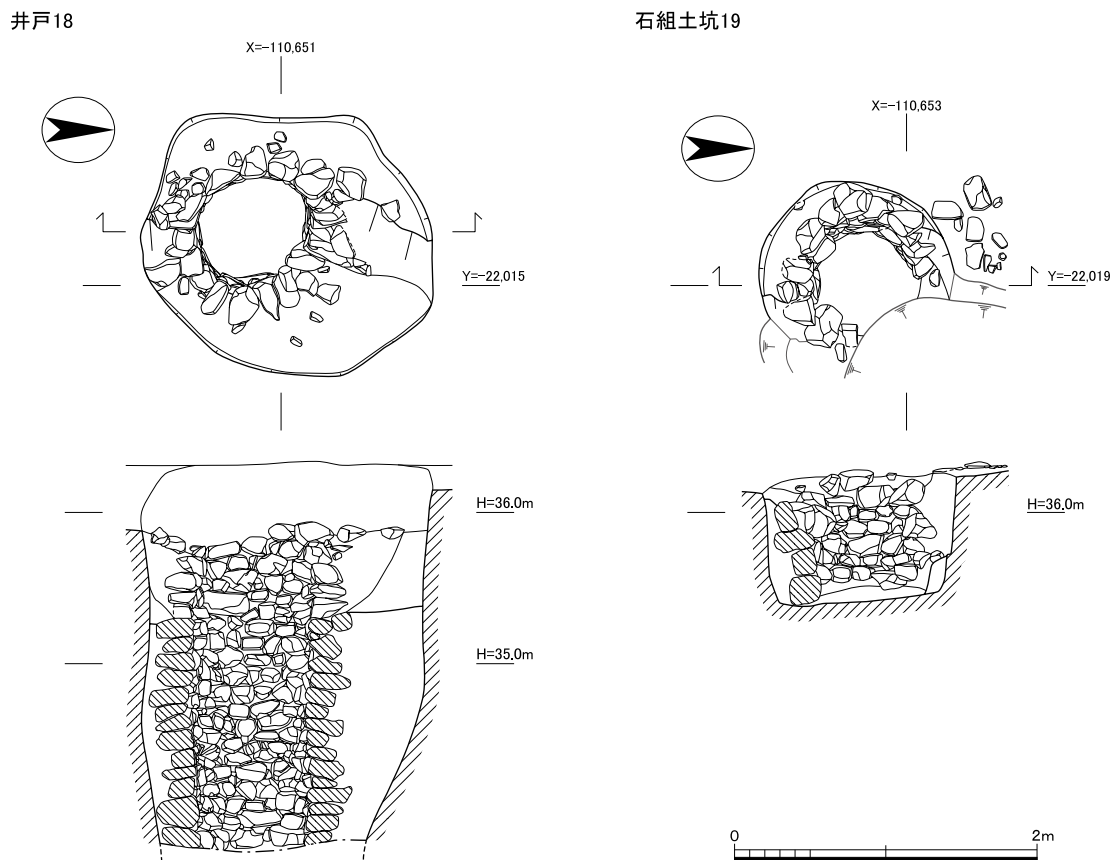


図23 井戸18、石組土坑19実測図（1：50）

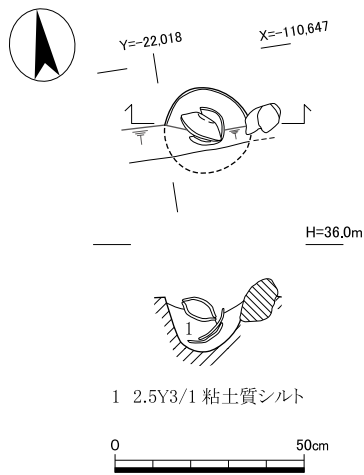


図24 埋納遺構212実測図（1：20）

明治年間に構築され、昭和40年頃に埋め戻されたものである¹⁾。掘形は径約2.1mの円形で、石組の内径が約1.3mある大型の井戸である。花崗岩系の切り石を積み、間を漆喰で固めている。真砂土で埋め戻されている。

井戸1・120・125・159・350 調査区西半で南北方向に並ぶ井戸を5基検出した。掘形の形状からいずれも円形石組井戸であったと推測されるが、掘り下げを行った検出面から約2.0mまでには石組は残存しない。井戸1の掘形は径約1.7mの円形で、埋土から18世紀代の遺物が出土した。井戸120の掘形は長径約1.7mの歪な円形で、埋土から17世紀後半代の遺物が出土した。井戸125の掘形は径

約2.1mの円形で、埋土からは19世紀代の遺物が出土した。井戸159の掘形は径約1.5mの円形で、埋土から18世紀後半代の遺物が出土した。井戸350の掘形は径約2.0mの歪な円形で、埋土から17世紀中葉頃の遺物が出土した。

石組土坑19（図23、図版11-1・3） 調査区南西隅で検出した。円形石組土坑である。掘形は径約1.3mの円形で、石組の内径は約0.6mある。深さは検出面から約0.8mある。石材は花崗岩系が主体となり、砂岩系とチャートが混じる。北側に径5～20cmの扁平な石が敷かれる。トイレ遺構の可能性ある。埋土からは18世紀後半代の遺物が出土した。

埋甕52 調査区南西隅で検出した。信楽産の焼締陶器甕が据わる。掘形は径約0.3m、深さは検出面から約0.5mある。掘形下部に径3～10cmの礫を入れ、甕を固定している。トイレ遺構の可能性ある。埋土から18世紀後半代の遺物が出土した。

埋納遺構212（図24、図版11-4） 調査区中央西寄りで検出した。完形の土師器皿2枚が合わせ口にして納められていた。さらにその下にも完形に近い土師器皿2枚が重ねて置かれていた。掘形は径約0.2mの円形で、深さは検出面から約0.15mある。地鎮などの祭祀に伴うものと考えられる。

註

1) 株式会社 田中長奈良漬店 代表取締役 田中稔章氏より御教示を賜った。

4. 遺 物

調査では、整理コンテナにして109箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器・陶磁器類、土製品、瓦類、金属製品、銭貨、石製品がある。全体の約9割を土器・陶磁器類が占める。遺物の帰属時期は、古墳時代から江戸時代までの各時期のものがある（表3）。

以下では、主要な遺構から出土した遺物について種別に概要を述べる。なお、土器・陶磁器類と瓦類についての個別の詳細については巻末の表8・9にまとめた。

(1) 土器・土製品

古墳時代の土器

土器溜502（図25、図版12） 古墳時代前期の古式土師器がまとめて出土した。1～3は口縁部が内弯して立ち上がり、端部が肥厚するいわゆる布留式甕である。体部内面はヘラケズリ、外面はハケメをナデで消す。4・5は受け口状の口縁部をもつ甕である。口縁端部は外に摘み出し、水平な面をもつ。6は小型丸底壺である。胎土は精良で、外面のヘラミガキがわずかに残る。7・8は直口壺の口縁部である。7は内外面ともに密なヘラミガキを施す。8は胎土に金雲母を含み、河内からの搬入品の可能性がある。口縁端部には沈線がめぐる。外面はタテハケメのちヨコナデ、内面はヨコハケメのちナデで仕上げる。9は受け口状の口縁部をもつ広口甕である。10は高杯脚部である。三方向に円形透かしを穿つ。

竪穴建物505（図25） 埋土からは土師器甕と須恵器杯・甕・壺、周溝からは土師器甕と須恵器

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	古式土師器、須恵器		古式土師器10点、須恵器3点：計13点		
平安時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、白色土器、緑釉陶器、黒色土器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類、金属製品、石製品、ガラス		土師器30点、須恵器1点、灰釉陶器4点、山茶碗1点、緑釉陶器2点、黒色土器3点、瓦器3点、焼締陶器1点、輸入陶磁器7点、瓦類5点、金属製品1点、石製品1点、ガラス1点：計60点		
鎌倉時代～室町時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、瓦器、白色土器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、土製品、瓦類、金属製品、銭貨、鑄造関係、石製品		土師器288点、須恵器7点、灰釉陶器1点、山茶碗3点、瓦器26点、焼締陶器10点、施釉陶器20点、輸入陶磁器25点、土製品3点、瓦類20点、金属製品21点、銭貨36点、石製品14点：計474点		
戦国時代	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、金属製品、銭貨、石製品		土師器60点、焼締陶器7点、施釉陶器4点、輸入陶磁器12点、金属製品4点、石製品1点：計88点		
江戸時代	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦類、金属製品、銭貨、石製品		土師器27点、瓦器1点、焼締陶器3点、施釉陶器5点、染付5点、青磁1点、輸入陶磁器9点、銭貨5点、石製品3点：計59点		
合計		146箱	694点（35箱）	5箱	106箱

※コンテナ箱数の合計は、整理後、A・Bランクの遺物を抽出したため、出土時より37箱多くなっている。

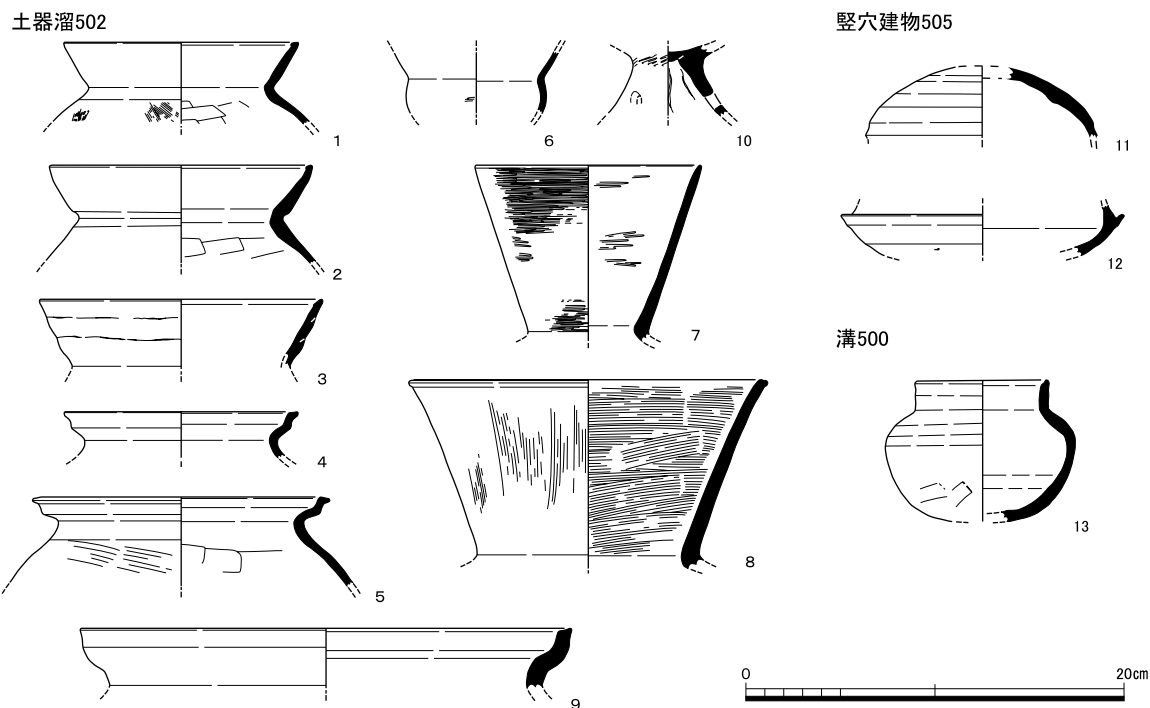


図25 古墳時代の土器（1：4）

甕、貯蔵穴と考えられる土坑507からは土師器甕が出土した。いずれも小片で図化できたのは11・12の2点のみである。11は須恵器杯蓋、12は杯身である。陶邑編年¹⁾のTK47～MT15型式に属するものとする。

溝500（図25、図版12） 土師器片、須恵器壺が出土した。13は溝底から出土した須恵器壺である。口縁部は短く立ち上がり、端部内面に沈線がめぐる。体部外面下半はヘラケズリする。TK23型式頃のものか。

平安時代の土器

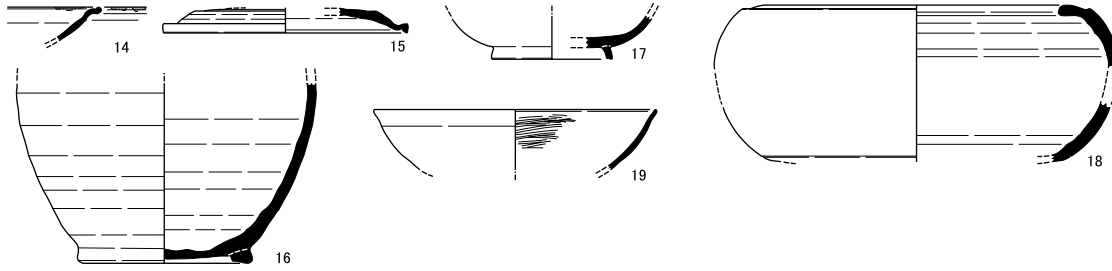
第2期整地層（図26、図版12） 土師器皿・高杯・甕、黒色土器、須恵器杯・杯蓋・鉢・甕、灰釉陶器椀・壺、緑釉陶器椀・壺、輸入陶磁器越州窯青磁椀、丸瓦、平瓦などが出土した。京都Ⅱ期新段階～Ⅲ期古段階²⁾に属する資料である。

14は土師器皿である。口縁部端部に煤が付着し、灯明皿として使用されていたと考えられる。15は須恵器杯蓋である。16は灰釉陶器壺の下半部である。外面には自然釉がかかる。17は貼り付け高台の東海系の緑釉陶器椀である。18は緑釉陶器の鉢である。口縁部と体部の境に段をもち、蓋が伴うものと考えられる。体部下位には1条の沈線がめぐる。全面施釉され、焼成は硬質で東海系かと思われるが、出土例の少ない器形である。19は内黒の黒色土器椀である。

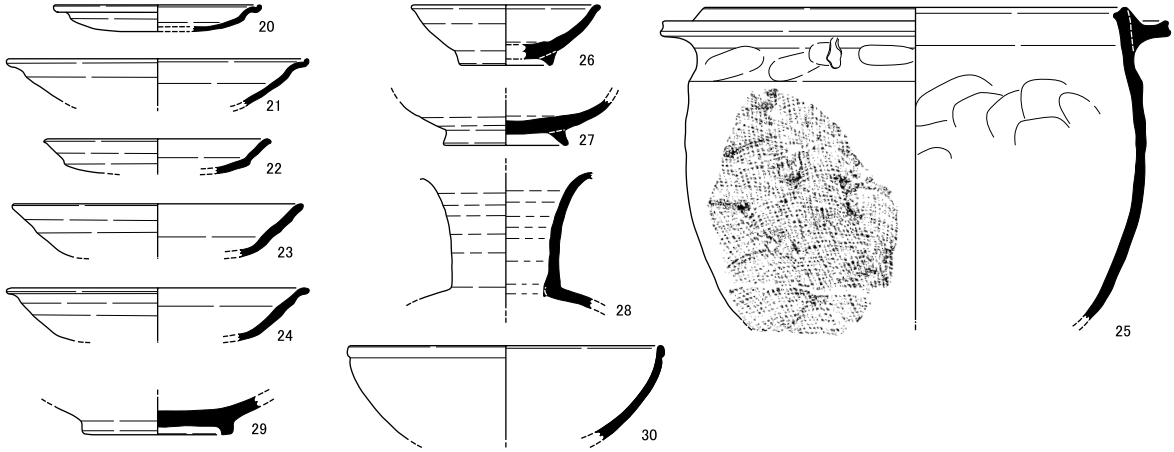
第3期整地層（図26、図版12） 土師器皿・高杯・羽釜・甕、黒色土器、白色土器椀、須恵器皿・椀・壺・甕・鉢、灰釉陶器椀・皿・壺、緑釉陶器皿、輸入陶磁器白磁椀・皿・壺、越州窯青磁椀・壺、丸・平瓦、鉄製品、銅製品などが出土した。京都Ⅲ期新段階～Ⅳ期古段階に属する資料である。

20～24は土師器皿である。20・21はいわゆる「て」の字状口縁の皿、22～24は口縁部を2段ナデする皿である。25は土師器の羽釜である。体部外面は布を巻きつけた当て具で押さえたのち一部ナデを施す。内面は板ナデののちナデで仕上げる。26～28は灰釉陶器である。26は小椀、27は椀、

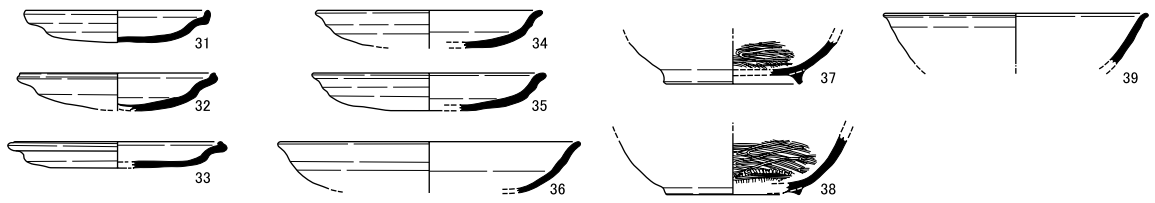
第2期整地層



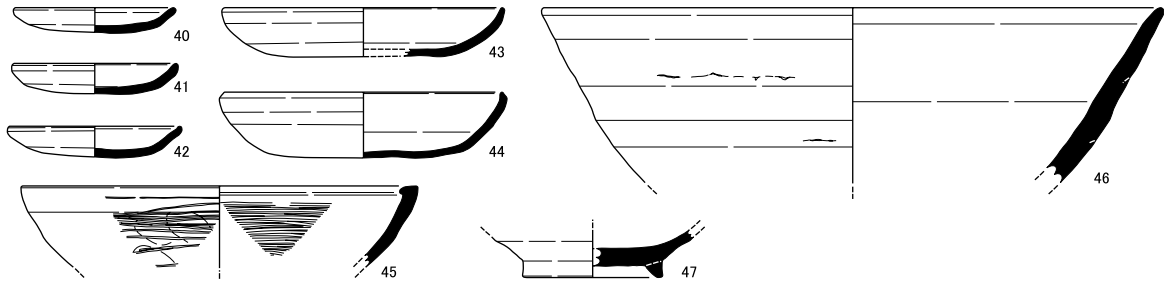
第3期整地層



溝440



土坑292



土坑426

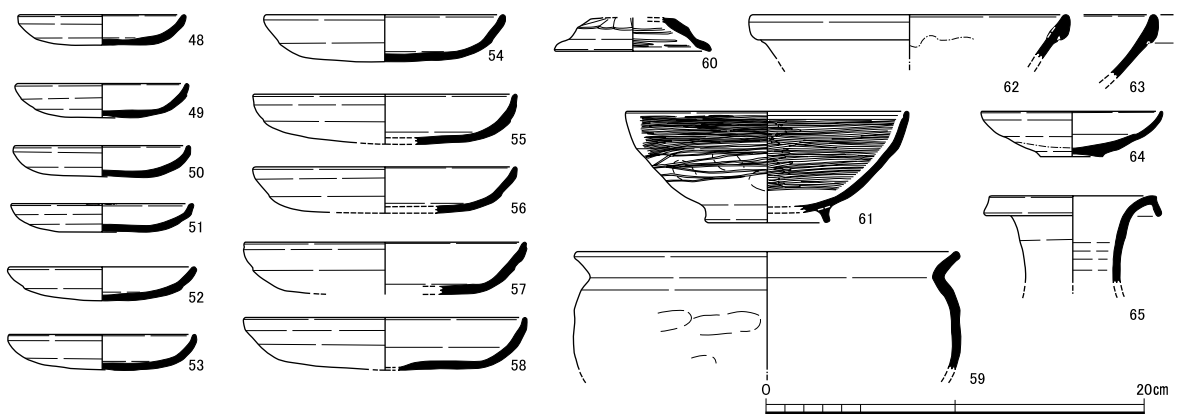


図26 平安時代の土器実測図（1：4）

28は壺の頸部である。29は輸入陶磁器の越州窯青磁椀、30は白磁椀である。

溝440（図26） 土師器皿・高杯・羽釜・甕、黒色土器、須恵器鉢・壺・甕、灰釉陶器皿、白色土器高杯、輸入陶磁器白磁椀、越州窯青磁椀、白磁椀、丸・平瓦、鉄釘などが出土した。京都Ⅳ期古段階に属する資料である。

31～36は土師器皿である。31～33は「て」の字状口縁、34～36は口縁部2段ナデの皿である。37・38は内黒の黒色土器椀である。39は輸入陶磁器の白磁椀である。

土坑292（図26） 土師器皿、須恵器甕、白色土器、山茶椀、焼締陶器鉢、瓦器鉢、輸入陶磁器白磁椀などが出土した。京都Ⅴ期中段階に属する資料である。

40～44は土師器皿である。45は瓦器の鉢である。外面は粗いヘラミガキ、内面は密なヘラミガキを施す。46は焼締陶器の常滑産鉢である。片口が付くタイプと考えられる。47は山茶椀である。

土坑426（図26、図版12） 土師器皿・鍋、須恵器甕、白色土器皿、瓦器椀・蓋、焼締陶器甕、輸入陶磁器白磁椀・皿・壺などが出土した。京都Ⅴ期新段階に属する資料である。

48～58は土師器皿である。59は土師器の鍋である。外面全面に煤が付着する。60は瓦器の蓋である。天井部はヘラによる面取りののちヘラミガキ、口縁部はヨコナデの後ヘラミガキし、口縁部と天井部の境目は丁寧なヘラミガキで縁取りする。61は瓦器椀である。内外面ともに密なヘラミガキを施す。62～65は輸入陶磁器の白磁である。63・64は椀、64は皿、65は壺口縁部である。64の皿は内面に段をもつ。65の壺は残存部については全面施釉される。

鎌倉時代から室町時代の土器

土坑300（図27） 土師器皿、須恵器甕・壺・鉢、山茶椀、瓦器椀・鍋・鉢、焼締陶器甕、輸入陶磁器白磁・青磁椀、軒丸瓦、平瓦、桃の種、砥石などが出土した。京都Ⅵ期新段階に属する資料である。

66～71は土師器皿である。72・73は瓦器椀である。72は底部に高台の剥離痕がのこる。74は山茶椀である。底部外面に墨が付着し、平滑であることから硯に転用したと考えられる。75は東播系の須恵器鉢である。76は焼締陶器の備前産甕である。77・78は輸入陶磁器の白磁椀である。

土坑434（図27） 土師器皿、須恵器甕・鉢、灰釉陶器椀、輸入陶磁器白磁片、鉄製品などが出土した。いずれも小片で詳細な時期は不明である。

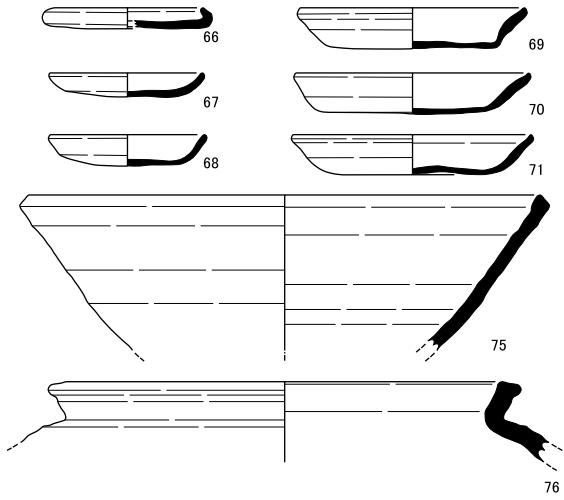
79は灰釉陶器の椀である。底部に墨書が現状で2文字あるが判読できない。

土坑263（図27、図版12） 焼締陶器の備前産壺の中から土師器皿、須恵器鉢、山茶椀、輸入陶磁器青磁椀、砥石などが出土した。京都Ⅷ期古段階～中段階に属する資料と考える。

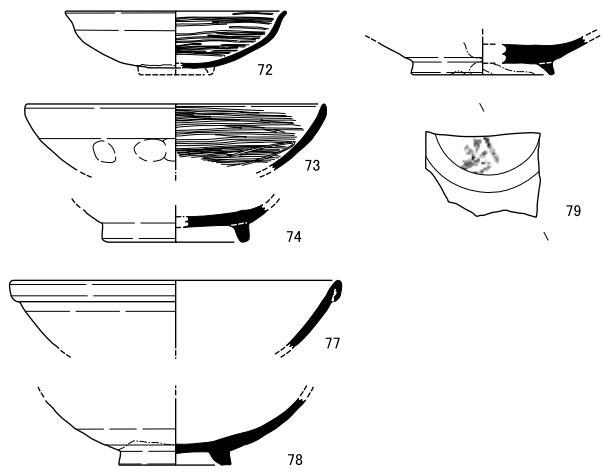
80・81は土師器皿である。82は山茶椀である。底部は糸切りのみで高台は付かない。83は焼締陶器の備前産壺である。

第4期整地層（図27） 土師器皿、須恵器甕・鉢、山茶椀、焼締陶器甕・鉢・播鉢、施釉陶器壺・椀・皿、瓦器羽釜・鍋・火鉢・鉢、輸入陶磁器青磁椀・盤・皿、白磁椀・皿・壺・合子、軒平瓦、平瓦、塼、鉄釘、刀子、銅製品、銭貨、砥石、石鍋などが出土した。京都Ⅷ期中段階～新段階に属する資料である。

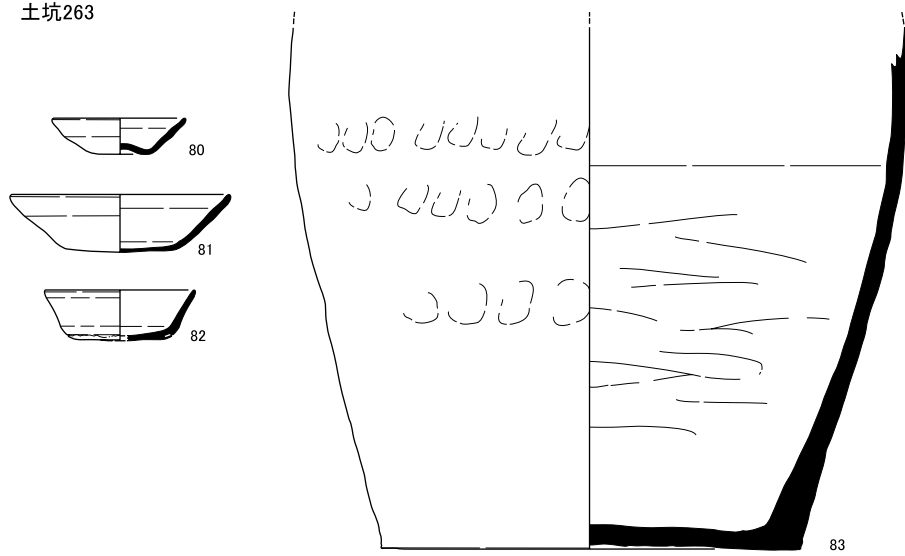
土坑300



土坑434



土坑263



第4期整地層

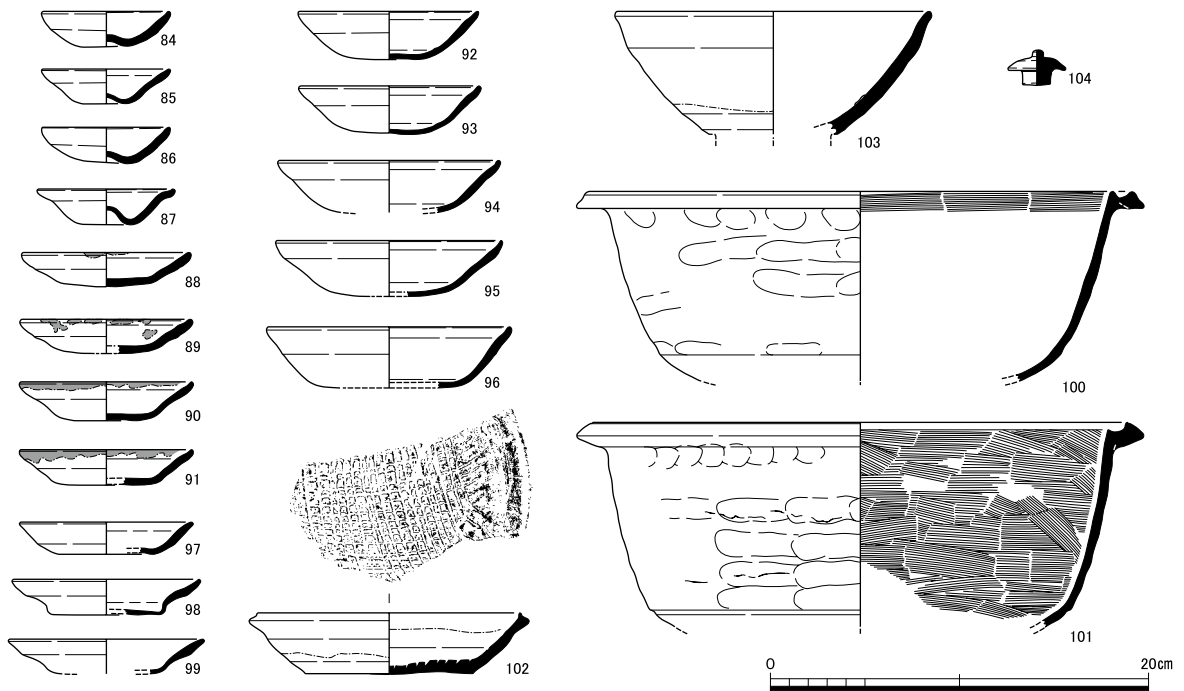


図27 鎌倉時代から室町時代の土器実測図（1：4）

土坑417

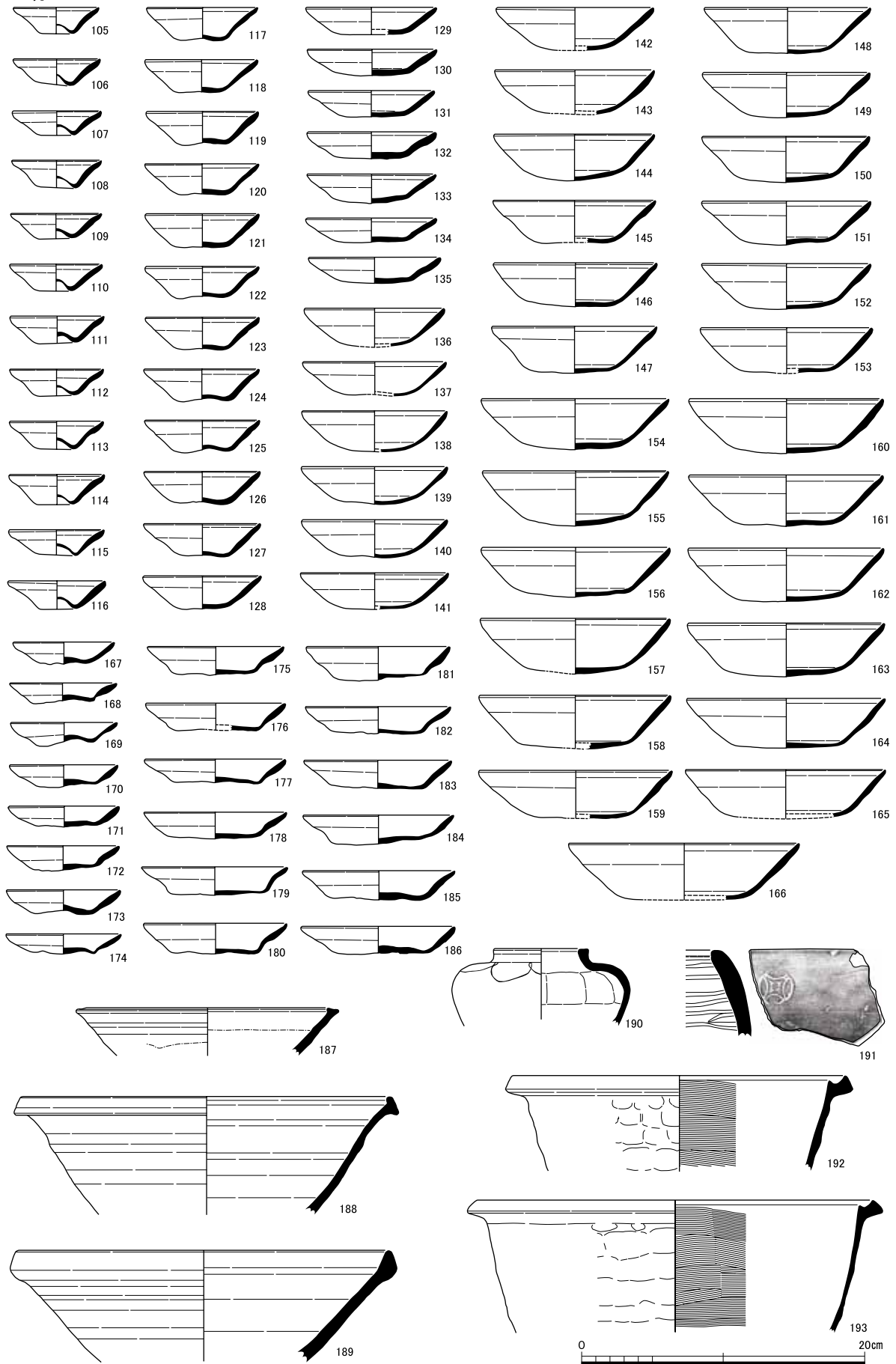


図28 室町時代の土器実測図1 (1 : 4)

84～99は土師器皿である。84～96は白色系の土師器皿で、88～91は口径がほぼ同じで全てが灯明皿として使用されている。97～99は赤色系の土師器皿である。100・101は瓦器の鍋である。100の外面には煤が厚く付着する。102・103は瀬戸の施釉陶器で、102は灰釉卸目皿、103は灰釉の平椀である。104は輸入陶磁器の白磁の蓋である。水注などの蓋か。

土坑417 (図28、図版13) 多量の土師器皿とともに須恵器鉢・甕、瓦器壺・鍋・羽釜・火鉢、施釉陶器鉢、輸入陶磁器青磁壺、軒平瓦、平瓦、塼、石鍋などが出土した。京都Ⅷ期中段階～新段階に属する資料である。

105～186は土師器皿である。105～166は白色系の土師器皿である。中でも129～135の口径9.0～9.4cmで器高の低いタイプの皿は、第4期整地層のものと同様、灯明皿として使用されている割合が高い。167～186は赤色系の土師器皿である。187は瀬戸の施釉陶器で灰釉の鉢である。188・189は東播系の須恵器鉢である。190は瓦器の壺である。肩部に花卉状の暗文を施す。191は瓦器火鉢である。外面に花七宝のスタンプが押捺される。192・193は瓦器鍋である。

風呂221 (図29、図版13) 土師器皿、須恵器鉢、山茶椀、瓦器羽釜・鍋・火鉢、焼締陶器甕・播鉢、輸入陶磁器青磁壺、軒平瓦、丸・平瓦、塼、鉄製品、銅製品、銭貨、砥石、石鍋、貝殻などが出土した。京都Ⅷ期中段階～新段階に属する資料である。

194～234は土師器皿である。194～221は白色系、222～234は赤色系の土師器皿である。235～238は高台付きの土師器皿である。京外の同一産地の製品がまとめて搬入されたものと考えられる。235は高台部が剥離してドーナツ状に残ったものである。239も土師器の皿である。高台はなく、口径も大きい。235～238と胎土・調整・形態が類似し、同一産地のものと考えられる。240は山茶椀である。高台端部に刳殻痕が認められる。241は瓦器の羽釜である。242は瓦器の片口鍋である。243は瓦器の火鉢である。二次被熱により外面は赤く変色する。244は東播系の須恵器鉢である。二次被熱を受ける。245～247は焼締陶器である。245は備前産播鉢、246は備前産甕である。247は常滑産甕で、外面は強い二次被熱を受けて自然釉が発泡する。248は輸入陶磁器の青磁筒花生である。龍泉窯産と思われる。

土坑253 (図30) 土師器皿、須恵器鉢・甕、瓦器鍋・羽釜・火鉢・風炉、焼締陶器播鉢・甕、輸入陶磁器青磁椀、白磁椀・合子、丸・平瓦、塼、鉄製品、銭貨、漆器、砥石、骨片などが出土した。京都Ⅶ期新段階～Ⅷ期新段階の幅をもつ資料である。

249～271は土師器皿である。253～259は白色系、260～271は赤色系の土師器皿である。269は灯明皿として使用されている。272は瓦器の風炉である。肩部に単独スタンプ文が連続して押捺される。菊花文に挟まれた中央のスタンプ文は、巴文と珠文、剣頭文の軒丸瓦の文様を組み合わせたものである。また雲形と考えられる火窓の一部が残存する。273～275は輸入陶磁器である。273は白磁皿、274は白磁椀、275は青磁椀である。

土坑393 (図30、図版14) 土師器皿、瓦器火鉢、焼締陶器甕、須恵器鉢、輸入陶磁器白磁椀、青磁椀、平瓦、鉄釘、砥石、漆、骨片などが出土した。京都Ⅷ期新段階に属する資料である。

276～302は土師器皿である。276～290は白色系、291～302は赤色系の土師器皿である。赤色

風呂221

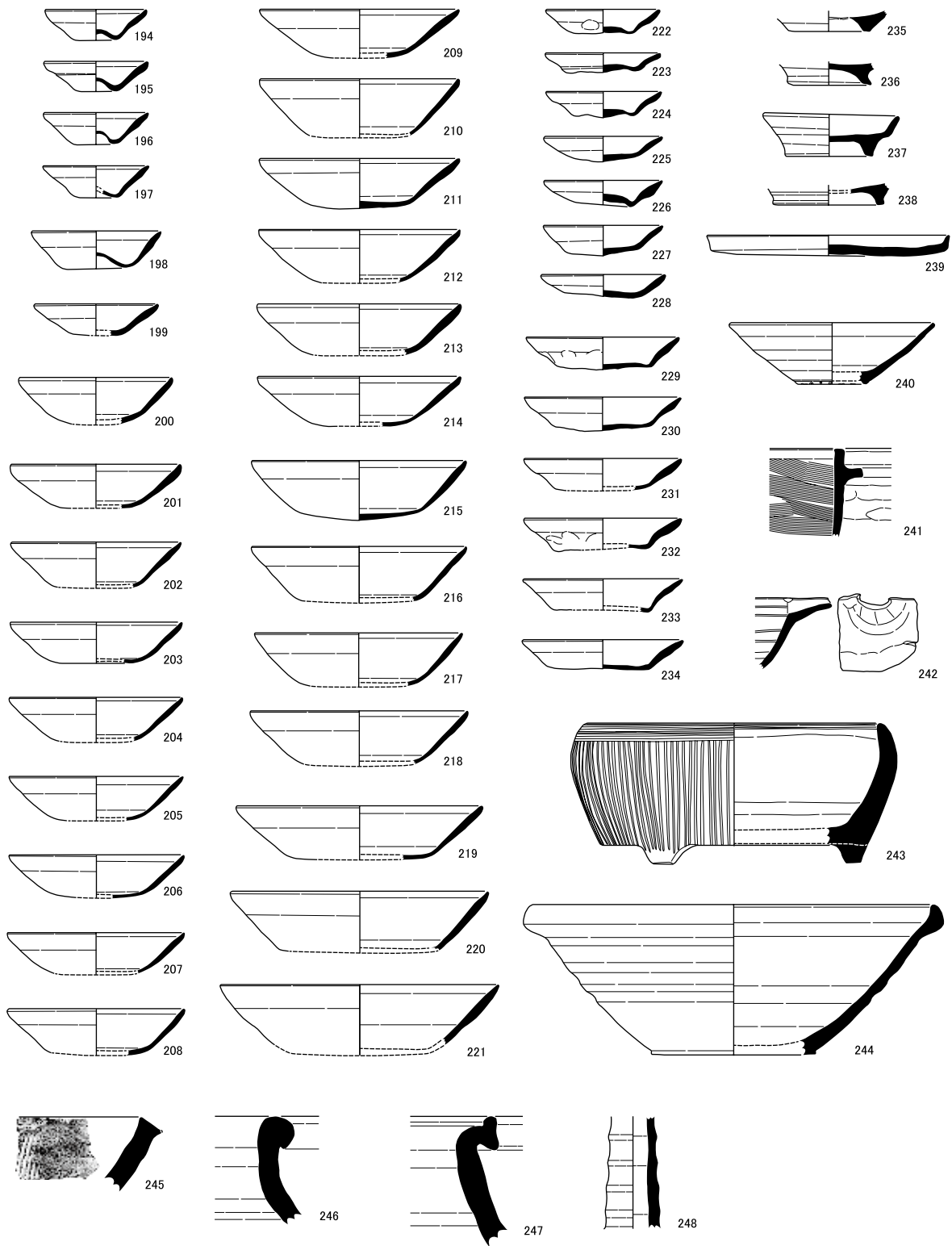
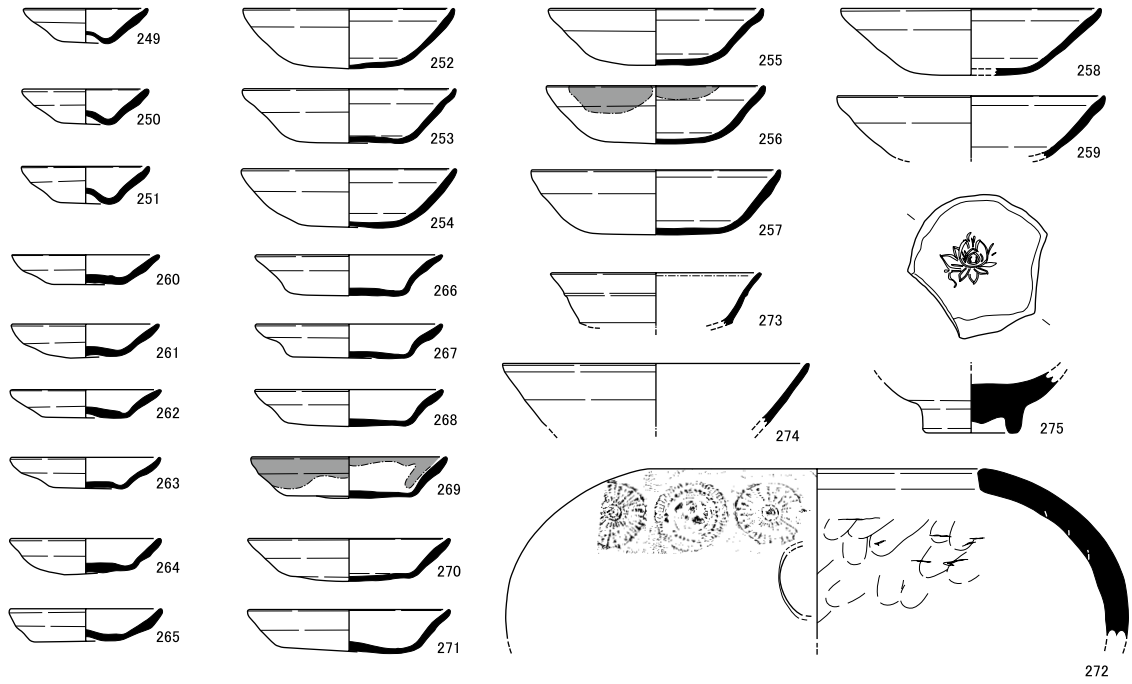
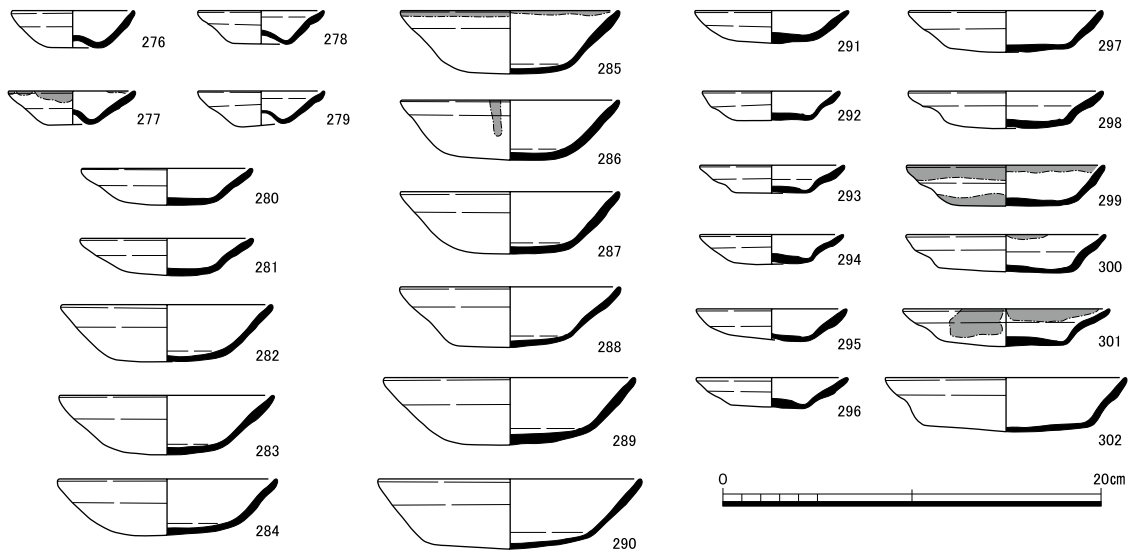


図29 室町時代の土器実測図2 (1 : 4)

土坑253



土坑393



埋壘267

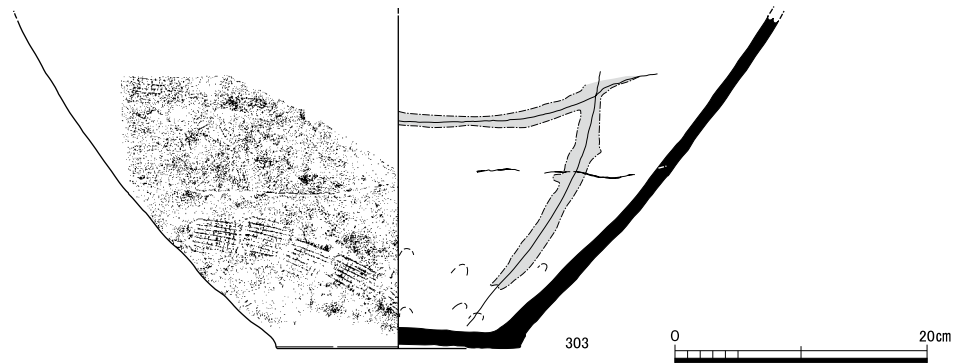
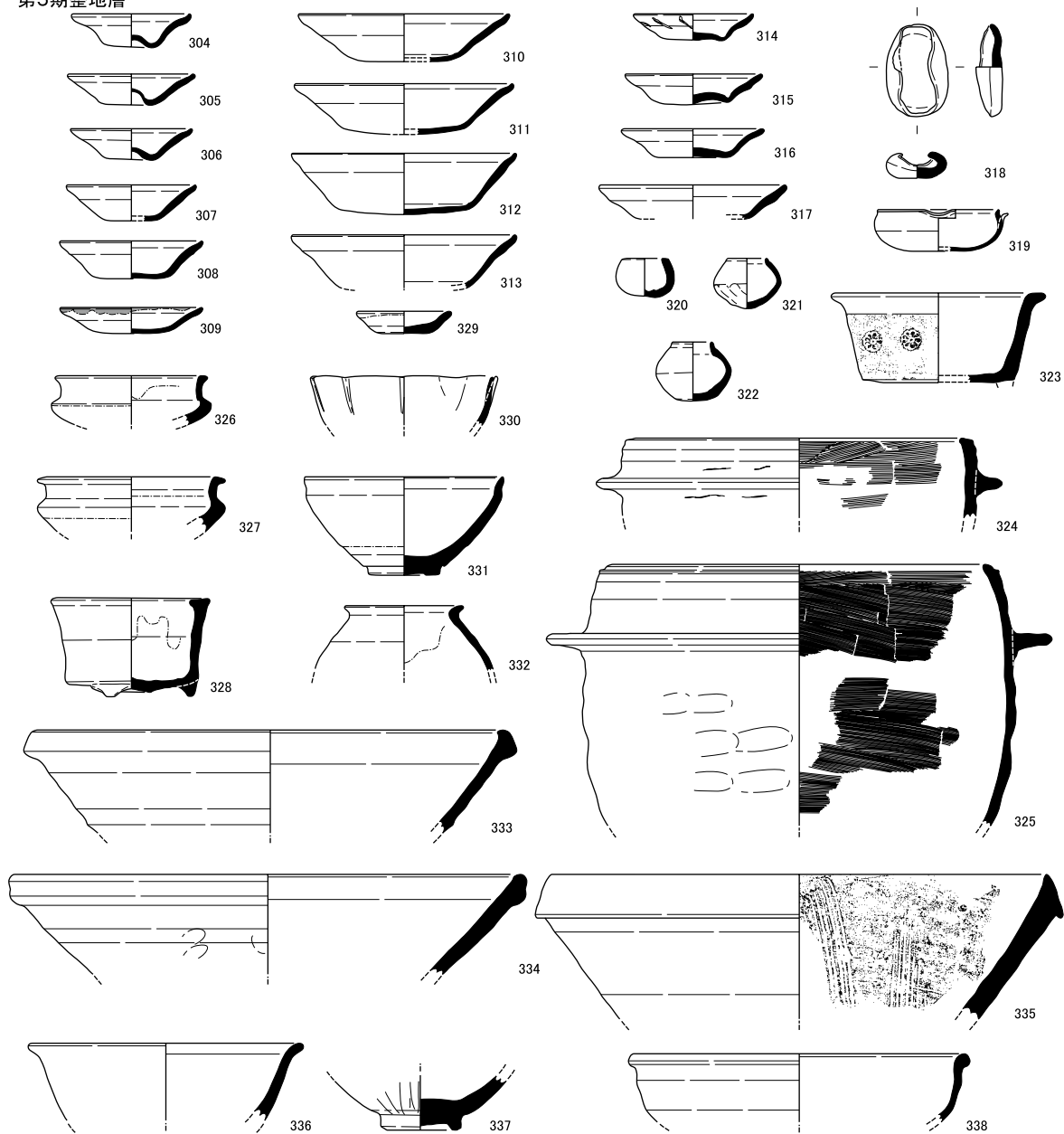
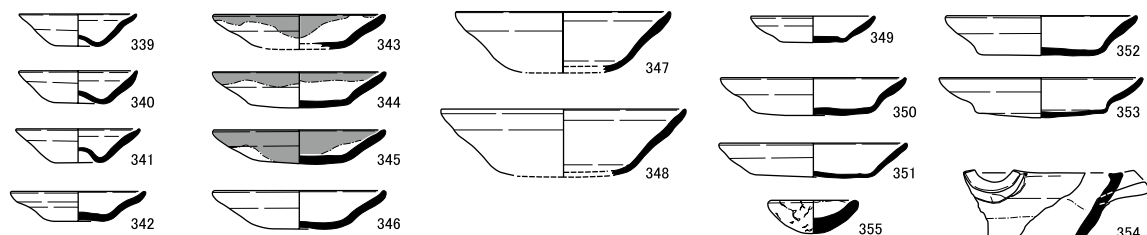


図30 室町時代の土器実測図3 (1:4、303のみ1:6)

第5期整地層



風呂210



地業158

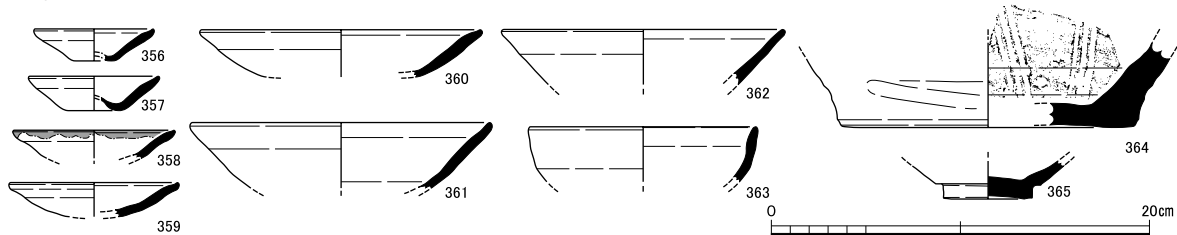


図31 室町時代の土器実測図4 (1 : 4)

系の中型のものは油煙が付着し、灯明皿として使用されているものが多い。

埋甕267 (図30、図版14) 焼締陶器の常滑産甕の埋甕の中からは錢貨3枚が出土した。掘形からは土師器皿・羽釜、輸入陶磁器白磁皿、砥石などが出土した。土師器皿は京都Ⅷ期中段階～新段階頃のものと考えられる。

303は焼締陶器の常滑産甕の下半部である。外面はナデのち一部格子目タタキ、内面は板ナデで仕上げる。ひび割れ部分に内外面から漆が塗付されている。内面の漆は厚い。

第5期整地層 (図31、図版14) 土師器皿、瓦器鍋・羽釜・火鉢・小壺・香炉、須恵器鉢、焼締陶器甕・播鉢、施釉陶器卸目皿・壺・鉢・香炉・椀、輸入陶磁器白磁椀・皿、青白磁合子、青磁椀・皿、華南三彩、丸・平瓦、塼、鉄製品、銅製品、砥石、石鍋、壁土などが出土した。京都Ⅸ期古段階に属する資料である。

304～317は土師器皿である。304～313は白色系、314～317は赤色系の土師器皿である。318は土師器のいわゆる耳皿である。319は土師器のミニチュア片口鉢である。胎土は非常に精良で器壁も薄い。内面に墨書が1文字ある。1文字の下半部は「貝」などのくずしであるが上半部は墨痕が薄く判然としない。320～322は瓦器のミニチュア壺である。320は無頸、321・322は短く頸が立ち上がる。323は瓦器の香炉である。外面に花文のスタンプが押捺される。底部には脚が剥がれた痕跡がのこる。324・325は瓦器の羽釜である。326～332は瀬戸美濃系の施釉陶器である。326と327は同タイプの袴腰香炉であるが、326には鉄釉、327には灰釉がかかる。328も香炉で完形品である。329は小型の皿で、内面のみ施釉される。330は輪花皿である。内外面ともに施釉される。331は天目茶椀である。332は鉄釉がかかる小型の壺である。333～334は東播系の須恵器鉢である。335は焼締陶器の備前産播鉢である。8条1単位の播り目をもつ。336・337は輸入陶磁器の龍泉窯系青磁椀である。338は輸入陶磁器の華南三彩の鉢である。残存破片では緑彩しか確認できない。

風呂210 (図31) 土師器皿・鍋・鉢、瓦器鍋・羽釜・火鉢・鉢、焼締陶器甕・播鉢、須恵器鉢、施釉陶器鉢・椀、輸入陶磁器白磁椀・壺、青磁椀、取瓶、丸・平瓦、塼、金属製品、錢貨、砥石などが出土した。京都Ⅸ期中段階～新段階に属する資料である。

339～353は土師器皿である。339～348は白色系、349～353は赤色系の土師器皿である。354は施釉陶器の瀬戸美濃系片口鍋である。355は製鉄道具の取瓶である。

地業158 (図31) 土師器皿、須恵器鉢、瓦器火鉢・鍋・羽釜、焼締陶器播鉢・甕、施釉陶器皿・椀・壺、輸入陶磁器白磁椀、鉄釉椀、丸・平瓦、塼、錢貨、砥石、炭などが出土した。京都Ⅷ期新段階～Ⅸ期中段階に属する資料である。

356～361は土師器皿である。すべて白色系土師器皿である。362・363は瀬戸美濃系施釉陶器で362は灰釉平椀、363は天目茶椀である。364は焼締陶器の信楽産播鉢である。焼成は軟質で3条1単位の播り目をもつ。365は輸入陶磁器の天目茶椀である。

土坑170 (図32・33、図版15、表4) 土器類の出土器種と比率は表4に提示した。土器類以外では、軒瓦、丸・平瓦、塼、雁振瓦、金属製品、錢貨、砥石、壁土などが出土している。京都Ⅸ期新段階に属する資料である。

土坑170

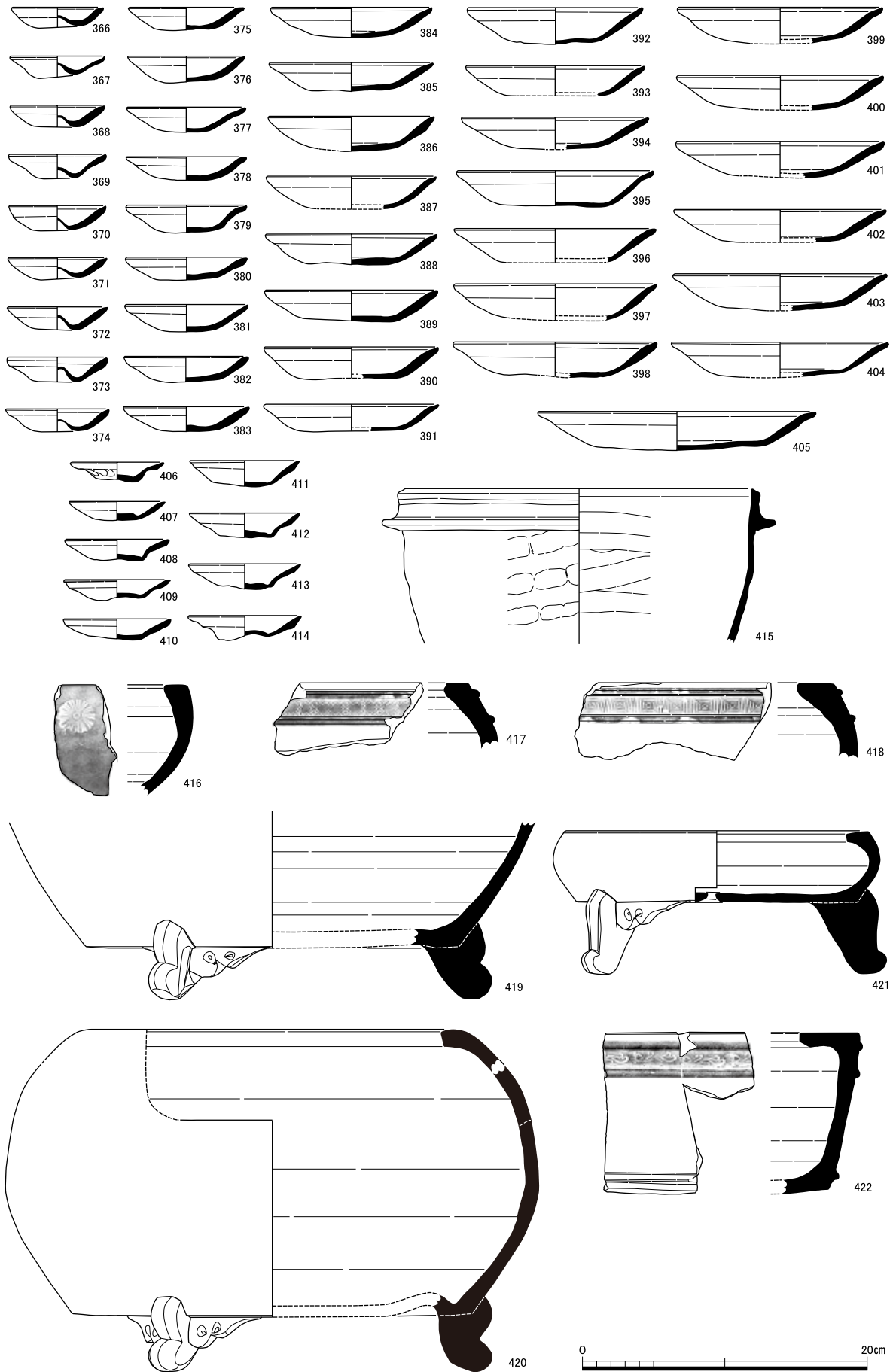


図32 室町時代の土器実測図5 (1 : 4)

土坑170

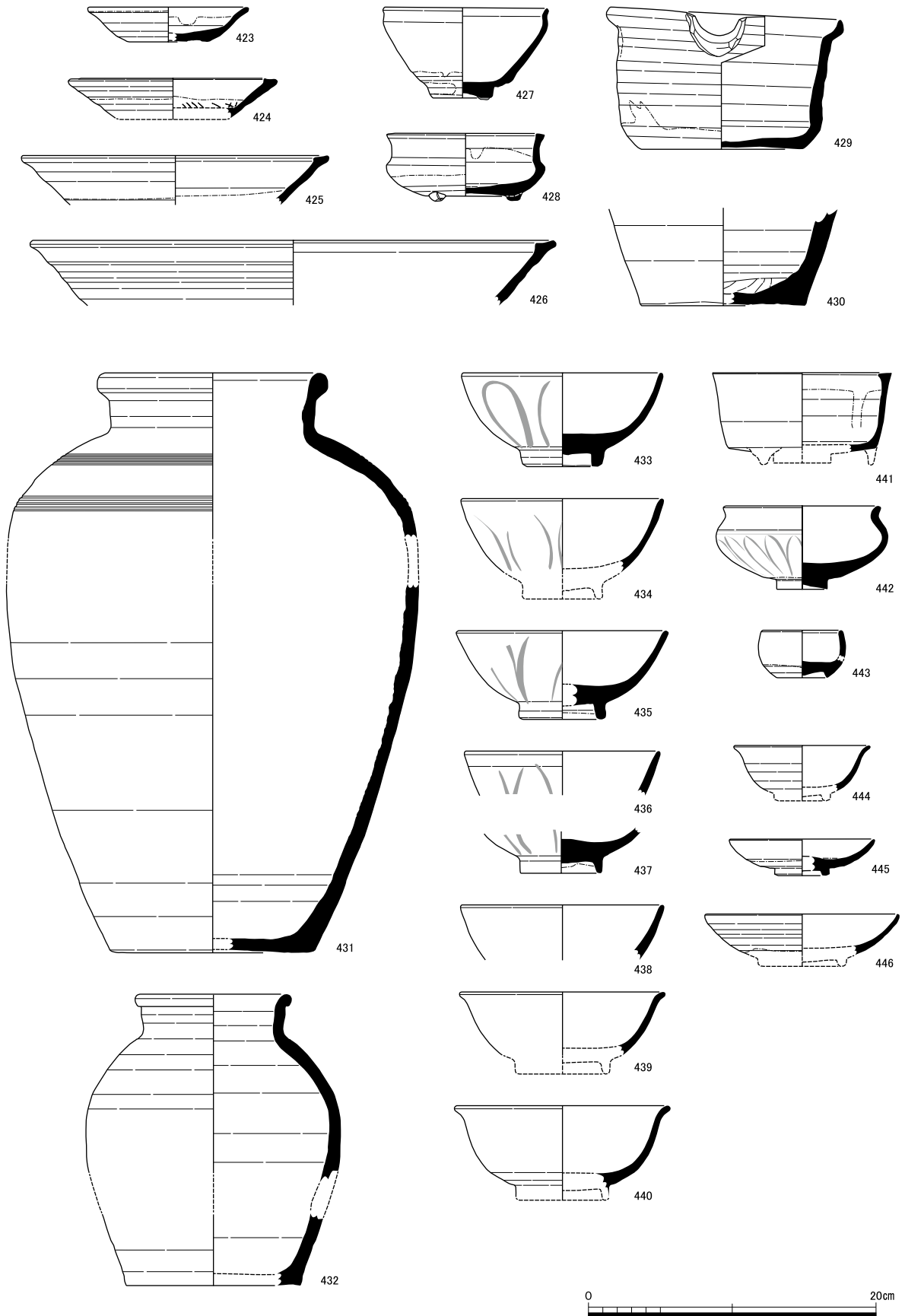


図33 室町時代の土器実測図6 (1:4)

表4 土坑170出土土器構成表

器種	器形	破片数	比率	
土師器	碗・皿	913	96.7%	66.0%
	鍋・釜	29	3.1%	
	炉・火鉢	0	0.0%	
	他・不明	2	0.2%	
	小計	944	100.0%	
瓦器	碗・皿	4	2.5%	11.1%
	鍋・釜	37	23.3%	
	壺・瓶	0	0.0%	
	火舎・火鉢	117	73.6%	
	他・不明	1	0.6%	
小計	159	100.0%		
須恵器・山茶椀	杯・碗・皿	0	0.0%	1.1%
	鉢	5	31.3%	
	壺・瓶	5	31.3%	
	甕	6	37.5%	
	他・不明	0	0.0%	
小計	16	100.0%		
瀬戸・美濃	碗・皿	23	62.2%	2.6%
	鉢	0	0.0%	
	壺・瓶	2	5.4%	
	香炉	5	13.5%	
	他・不明	7	18.9%	
小計	37	100.0%		
焼締陶器	甕	69	48.3%	10.0%
	壺	55	38.5%	
	播鉢	19	13.3%	
	盤・大皿	0	0.0%	
	他・不明	0	0.0%	
小計	143	100.0%		
輸入陶磁器	碗・皿	87	65.9%	9.2%
	壺・瓶	1	0.8%	
	盤	10	7.6%	
	香炉	18	13.6%	
	他・不明	16	12.1%	
小計	132	100.0%		
総数		1431	100.0%	

366～414は土師器皿である。366～405は白色系、406～414は赤色系の土師器皿である。415は瓦器の羽釜である。二次被熱により赤く変色する。416～422は瓦器の火鉢または風炉である。416は火鉢で菊花文スタンプが押捺される。417・418は火鉢もしくは風炉の口縁部である。2条の突帯の間に417は花菱文、418は重画文のスタンプが連続押捺される。419・420は獣脚付きの風炉である。いずれも二次被熱により赤く変色する。421は浅型の火鉢で獣脚が付く。底部中央に焼成後に穿たれた穿孔があり、植木鉢などに転用された可能性がある。422は平面方形の火鉢である。2条の突帯の間に唐草文のスタンプが連続押捺される。421・422も二次被熱により赤く変色する。423～429は瀬戸美濃系の施釉陶器である。423は灰釉の皿である。口縁部内面のみ施釉される。424は灰釉の卸目皿、425・426は灰釉の鉢である。427は天目茶椀、428は鉄釉がかかる香炉である。429は灰釉の片口鍋である。底部をのぞくほぼ全面に施釉される。底部外面には煤が付着する。430は須恵器の壺である。底部は糸切りされる。431・432

は焼締陶器の壺である。431は備前産で二次被熱を受ける。432は信楽産である。433～446は輸入陶磁器である。433～440は龍泉窯系の青磁椀である。441・442は龍泉窯系の青磁香炉である。443は青磁の小杯である。444は白磁の椀、445・446は白磁の皿である。

戦国時代の土器

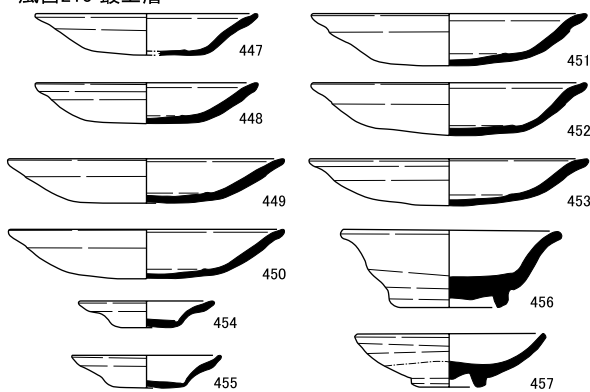
風呂210最上層(図34) 土師器皿、輸入陶磁器椀・皿が出土した。京都X期古段階に属する資料である。

447～455は土師器皿である。447～453は白色系、454・455は赤色系の土師器皿である。448の内面には鉄釘が付着する。450は全面が黒色化し、内面の一部に油煙が付着する。灯明皿か。456・457は輸入陶磁器で、456は青磁小椀、457は白磁皿である。457の白磁皿は口縁部に油煙が付着し、灯明皿として使用されていたと考えられる。

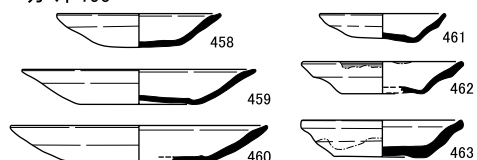
カマド195(図34) 土師器皿、瓦器鍋、焼締陶器鉢、施釉陶器皿、丸・平瓦、銭貨、壁土などが出土した。京都X期古段階に属する資料である。

458～462は土師器皿である。458～460は白色系、461・462は赤色系の土師器皿である。463は

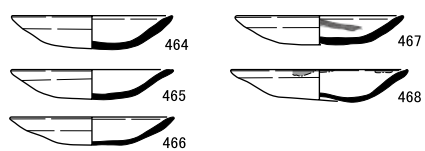
風呂210 最上層



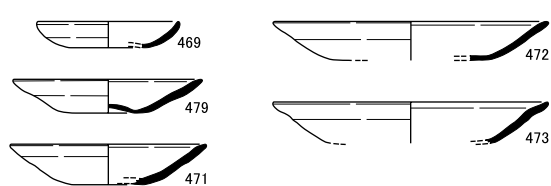
カマド195



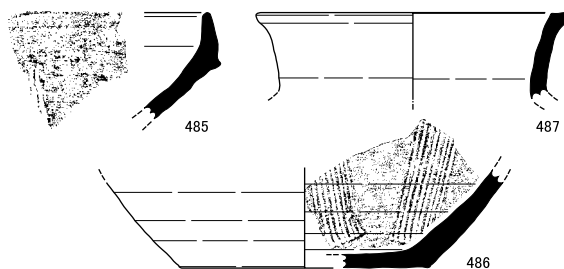
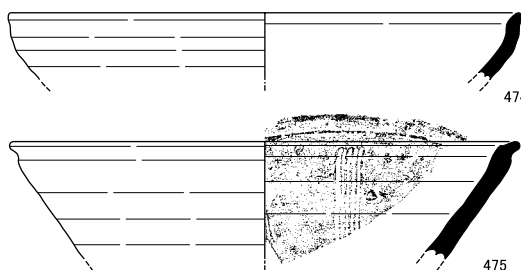
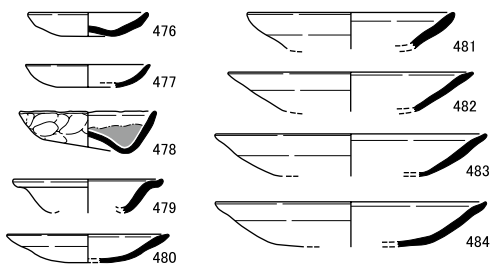
石組炉126



庭141



庭112



石室150

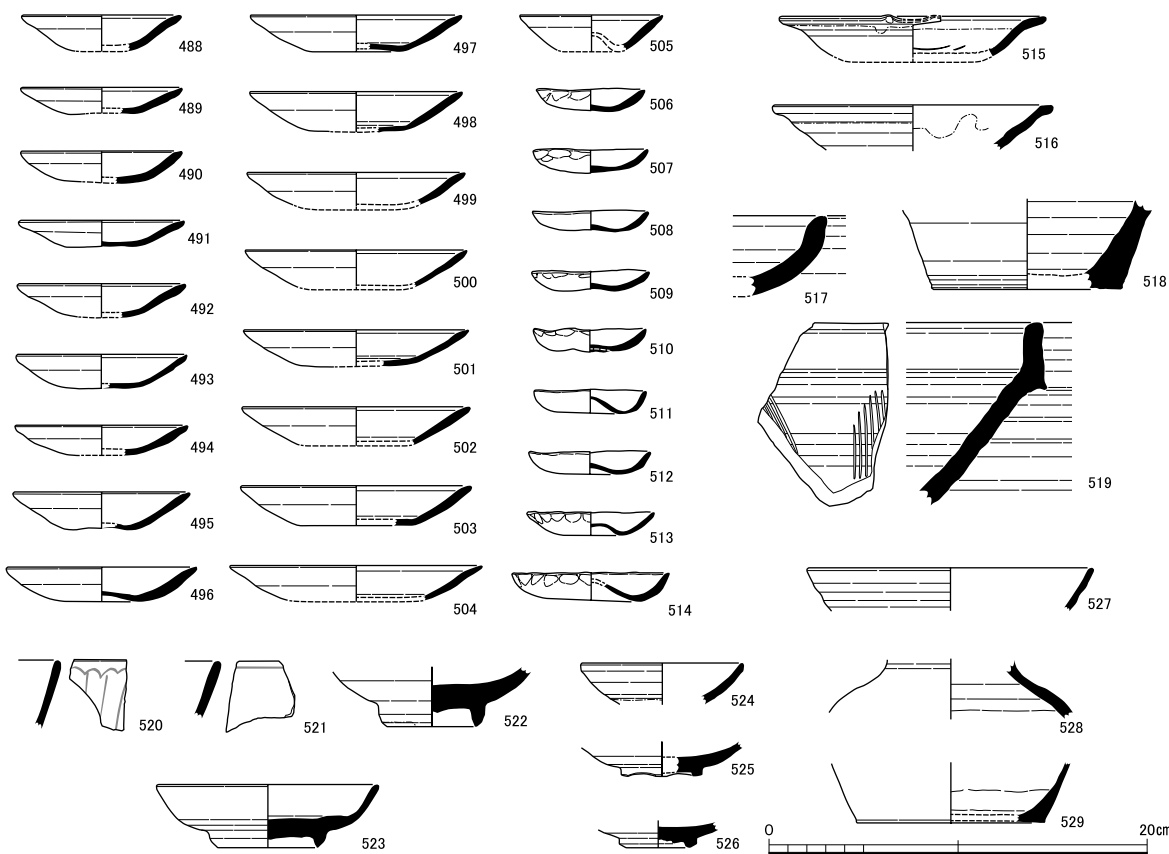


図34 戦国時代の土器実測図 (1 : 4)

瀬戸美濃系施釉陶器の灰釉皿である。

石組炉126(図34) 埋土から土師器皿、瓦器火鉢、焼締陶器播鉢、丸瓦、塼、焼けた壁土、貝などが出土した。掘形からは土師器皿、瓦器火鉢、焼締陶器甕、丸瓦、道具瓦、砥石などが出土した。いずれも京都X期中段階に属する資料である。

464～468は埋土から出土した土師器皿である。467の内面には一筆描きのような墨痕があるが、文字ではない。口縁端部にも一部墨痕が付く。

庭141(図34) 土師器皿、瓦器鉢、焼締陶器甕・播鉢、施釉陶器鉢、輸入陶磁器青磁椀、青花皿、金属製品、砥石、壁土などが出土した。京都X期中段階に属する資料である。

469～473は土師器皿である。474は瀬戸美濃系施釉陶器の灰釉鉢である。475は焼締陶器の信楽産播鉢である。焼成はやや軟質で5条1単位の播り目をもつ。

庭112(図34) 土師器皿、瓦器火鉢、焼締陶器甕・播鉢・壺、施釉陶器椀、輸入陶磁器白磁椀、青磁椀、壁土、銭貨などが出土した。また蹲踞35の掘形からは土師器皿、焼締陶器甕、砥石などが出土した。京都X期古段階～中段階に属する資料である。

476～484は土師器皿である。476～478は赤色系土師器皿である。478の内面には下半全面に墨痕が付く。479～484は白色系土師器皿である。485・486は焼締陶器の備前産播鉢である。487は焼締陶器の壺である。丹波産か。481・483の土師器皿は蹲踞35の掘形出土、それ以外は庭112埋土から出土した。

石室150(図34) 土師器皿、施釉陶器皿・鉢、焼締陶器甕・鉢・壺・播鉢、輸入陶磁器青磁椀・皿、白磁椀・皿、李朝椀・瓶、金属製品、砥石、壁土などが出土した。掘形からは、土師器皿、焼締陶器甕、輸入陶磁器青磁・白磁椀、塼などが出土した。京都X期中段階に属する資料である。

488～514は土師器皿である。488～505は白色系、506～514は赤色系の土師器皿である。515・516は瀬戸美濃系施釉陶器で、515は灰釉の卸目皿、516は鉢である。517～519は備前産の焼締陶器で、517は鉢、518は壺、519は播鉢である。520～529は輸入陶磁器である。520～522は青磁椀、523は青磁皿である。524は白磁皿、525・526は白磁の椀もしくは皿である。527～529は李朝産で527は白磁椀、528は鉄釉のかかる瓶、529は雑釉のかかる瓶である。

江戸時代の土器

埋納遺構212(図35) 530～533は完形の土師器皿を2枚合わせ口にした埋納遺構から出土した土師器皿である。532・533が合わせ口になっていた皿で、530・531はその下に置かれていた皿である。いずれも完形ですべて灯明皿として使用されていたものである。京都XI期古段階頃のものと考えられる。

井戸18(図35、図版16) 土師器皿・小壺・塩壺、瓦器鉢、焼締陶器小壺・播鉢、施釉陶器椀・皿・水注、染付椀・皿、磁器椀、輸入陶磁器青花椀、白磁、丸・平瓦、金属製品、銭貨などが出土した。掘形からは土師器皿、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器青花、銭貨などが出土した。京都XI期中段階に属する資料である。

534～551は土師器皿である。灯明皿として使用されているものが多い。552は土師器の鉢型土

埋納遺構212

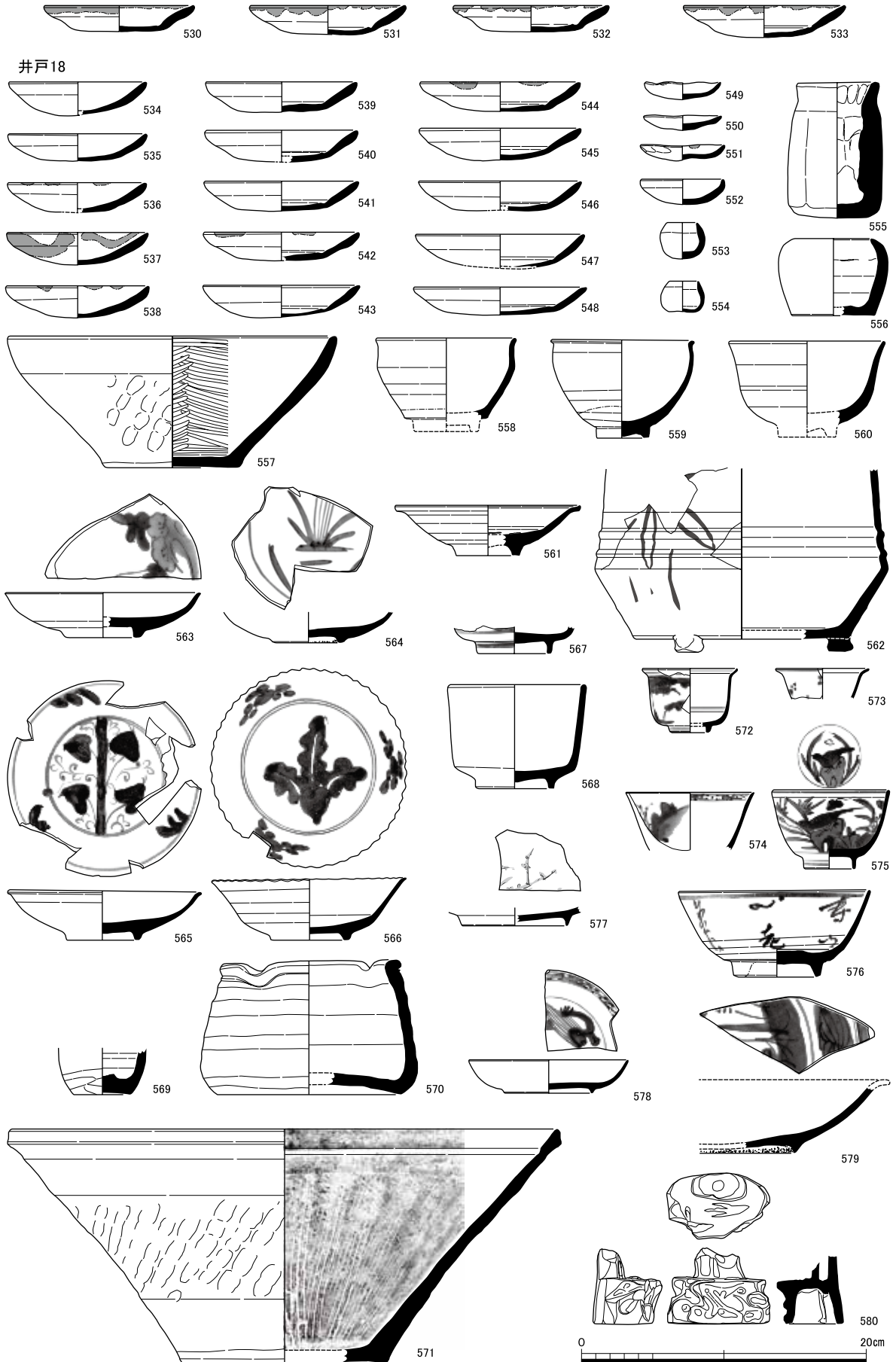


図35 江戸時代の土器実測図（1：4）

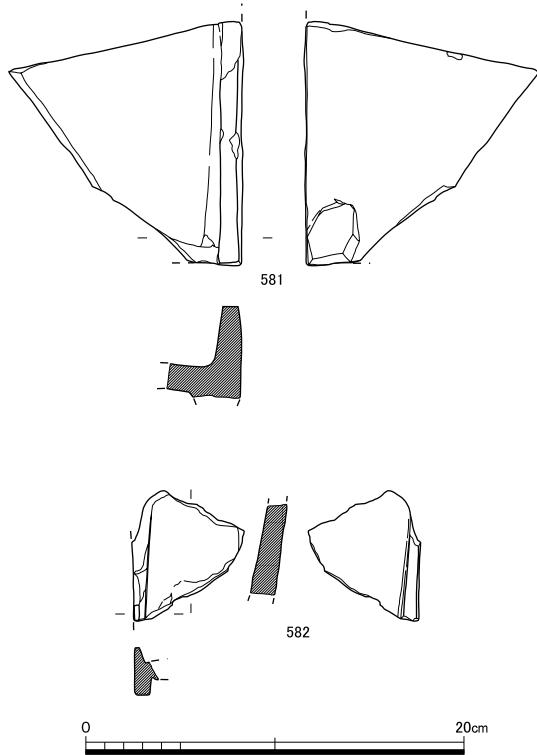


図36 土製品実測図（1：4）

器、553・554は土師器の小壺である。555・556は土師器の塩壺である。557は瓦器の鉢である。558～562は施釉陶器である。558は美濃の天目茶碗、559・560は唐津の灰釉がかかる椀である。561は唐津の灰釉皿である。底部内外面ともに砂目が付く。562は唐津の水指である。全面に灰釉がかかり、外面には鉄絵がある。563～567は初期伊万里の染付である。563～565は皿、566は輪花椀、567は筒椀である。568は伊万里の青磁椀である。569～571は焼締陶器である。569は備前産小壺、570は備前産の建水、571は丹波産の播鉢である。572～580は輸入陶磁器である。572～575は中国明時代の青花椀である。576は中国南方産の青花と考えられ、胎土が黄灰色で呉須も黒みがかかる。底部内面は露胎である。577は色絵磁器である。呉須の上に鮮やかな水色の釉で彩色する。底部には「福」字を二重の○で囲んだ銘がある。578は青花皿、579は漳州窯の青花盤である。580は白磁で、中国徳化窯の観音像の台座部分である。輪王座の観音の下半部が残る。その前面に3本爪が剥がれた痕跡が2箇所あり、龍が飾られていたものと考えられる。

土製品（図36）

581は第4期の土坑215から出土した。須恵質の箱型土製品である。内面はヘラケズリ、外面はヘラケズリののちナデで仕上げる。外面には自然釉がかかる。底部に脚が剥離した痕跡が残る。脚は貼り付け後、ヘラで面取りを行っている。582は第4期の土坑280から出土した陶製硯である。須恵質で胎土は非常に精良である。外面には自然釉がかかる。硯面は使用により光沢をもち、墨痕が残る。

（2）瓦類（表9）

軒瓦（図37、図版17） 軒丸瓦は8点出土した。文様は巴文が5点、重圏文が1点、蓮華文が1点、不明が1点である。瓦1は奈良時代の重圏文軒丸瓦である。中心に文様のようなものが確認できるが、類例がなく范傷である可能性も残る。胎土は緻密で焼成は堅緻である。瓦2は平安時代中期の池田瓦窯産の単弁十弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当裏面に布目がつき、一本造り技法で製作されたものである。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質である。瓦3は右巻きの三巴文軒丸瓦である。瓦当面には離れ砂が顕著に付着し、瓦当文様部に指ナデの痕が明瞭に残る。胎土は粗く、焼成は堅緻である。瓦4は左巻きの三巴文軒丸瓦である。瓦当面の文様と文様の間に指ナデの痕がつく。瓦当裏面は非常に粗い指ナデで仕上げる。胎土は緻密で焼成は堅緻である。瓦5は右巻きの三巴文軒丸

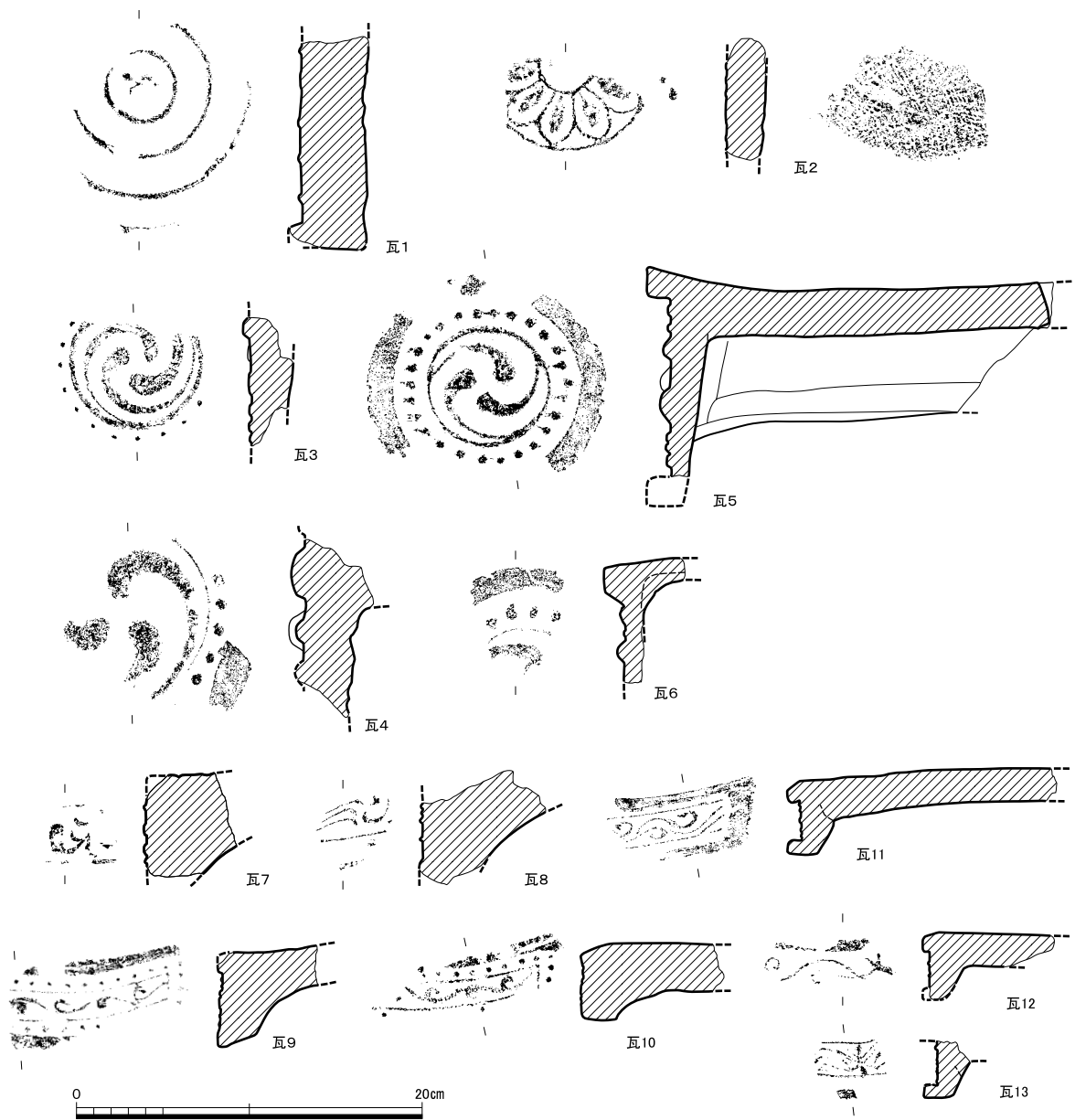


図37 軒瓦拓影及び実測図（1：4）

瓦である。丸瓦部凸面は丁寧にタテ方向に板ナデする。胎土はやや粗く、焼成は堅緻である。二次被熱を受ける。同じ土坑170から同範瓦が1点出土している。瓦6は右巻きの三巴文軒丸瓦である。瓦当面に離れ砂が顕著に付着する。胎土は緻密で焼成は堅緻である。

軒平瓦は10点出土した。文様は唐草文が8点、不明が2点である。瓦7は平安時代中期の森ヶ東瓦窯産である。胎土は緻密で焼成は堅緻である。瓦8は残存状況が悪いが、平安時代中期の唐草文軒平瓦と考えられる。胎土は緻密で、焼成は堅緻である。瓦9・10は内向唐草文軒平瓦である。瓦当上下面、側面全てヘラケズリする。瓦当裏面は粗い指ナデで、胎土は粗く焼成は堅緻である。平安時代中期の安井西裏瓦窯産か。瓦11は、顎部貼り付け技法による軒平瓦である。瓦当上面と側面はヘラケズリする。下面と裏面はヨコナデで仕上げる。胎土はやや粗く、焼成は堅緻である。瓦12は折り曲げ技法による軒平瓦である。瓦当上面はヘラケズリする。胎土はやや粗く、焼成はやや軟

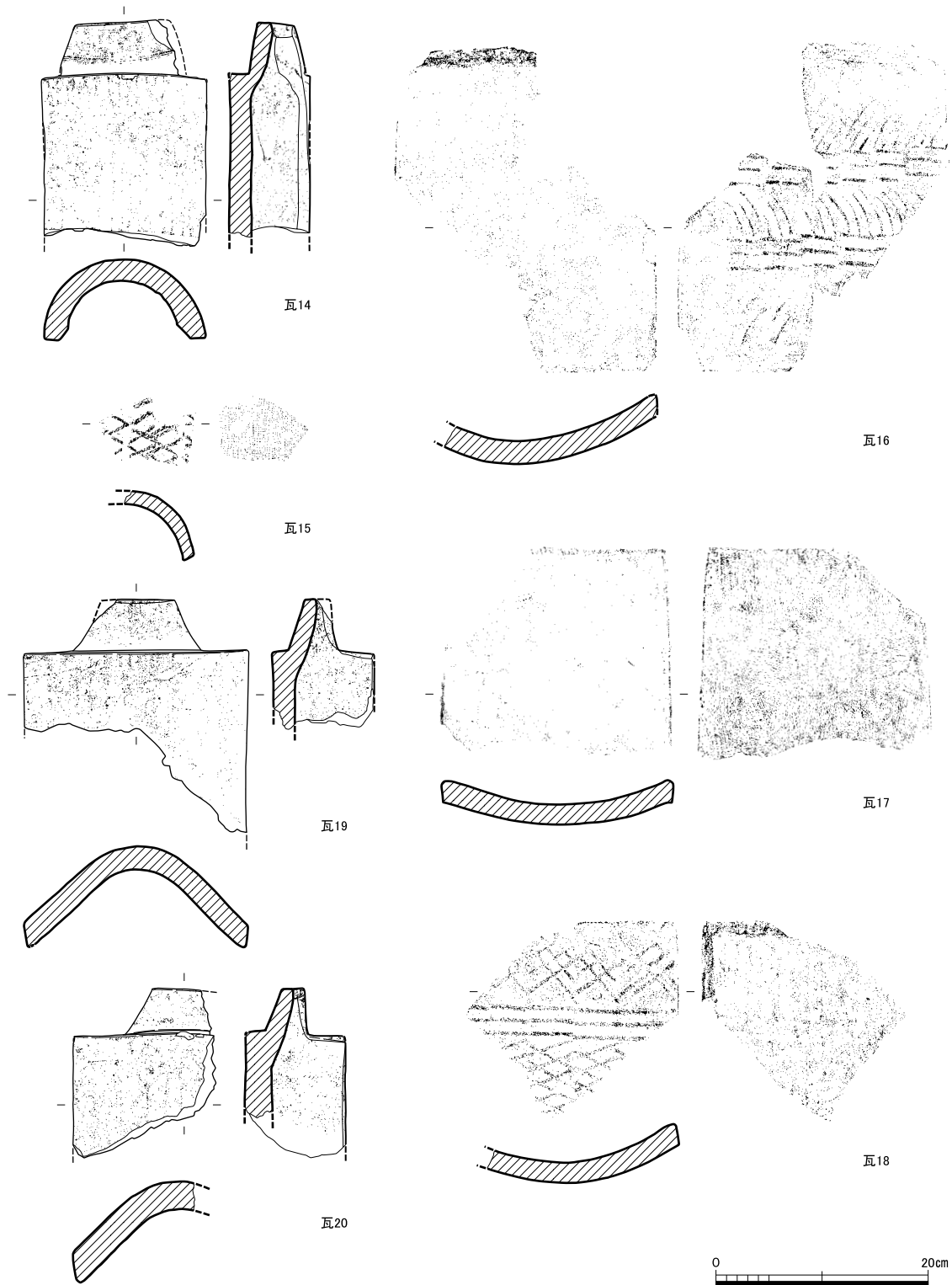


図38 丸瓦・平瓦・雁振瓦拓影及び実測図（1：6）

質である。13は顎部貼り付け技法による軒平瓦である。胎土はやや粗く、焼成は堅緻である。

丸瓦・平瓦（図38、図版17） 瓦14・15は、丸瓦である。瓦14の凸面は丁寧なナデで仕上げ、凹面はコビキ痕が明瞭に残る。瓦15の凸面は格子目タタキののちナデ、凹面は布目が明瞭に残る。焼成は非常に堅緻である。瓦16～18は平瓦である。瓦16の凹面は粗いナデで、一部に煤が付着する。

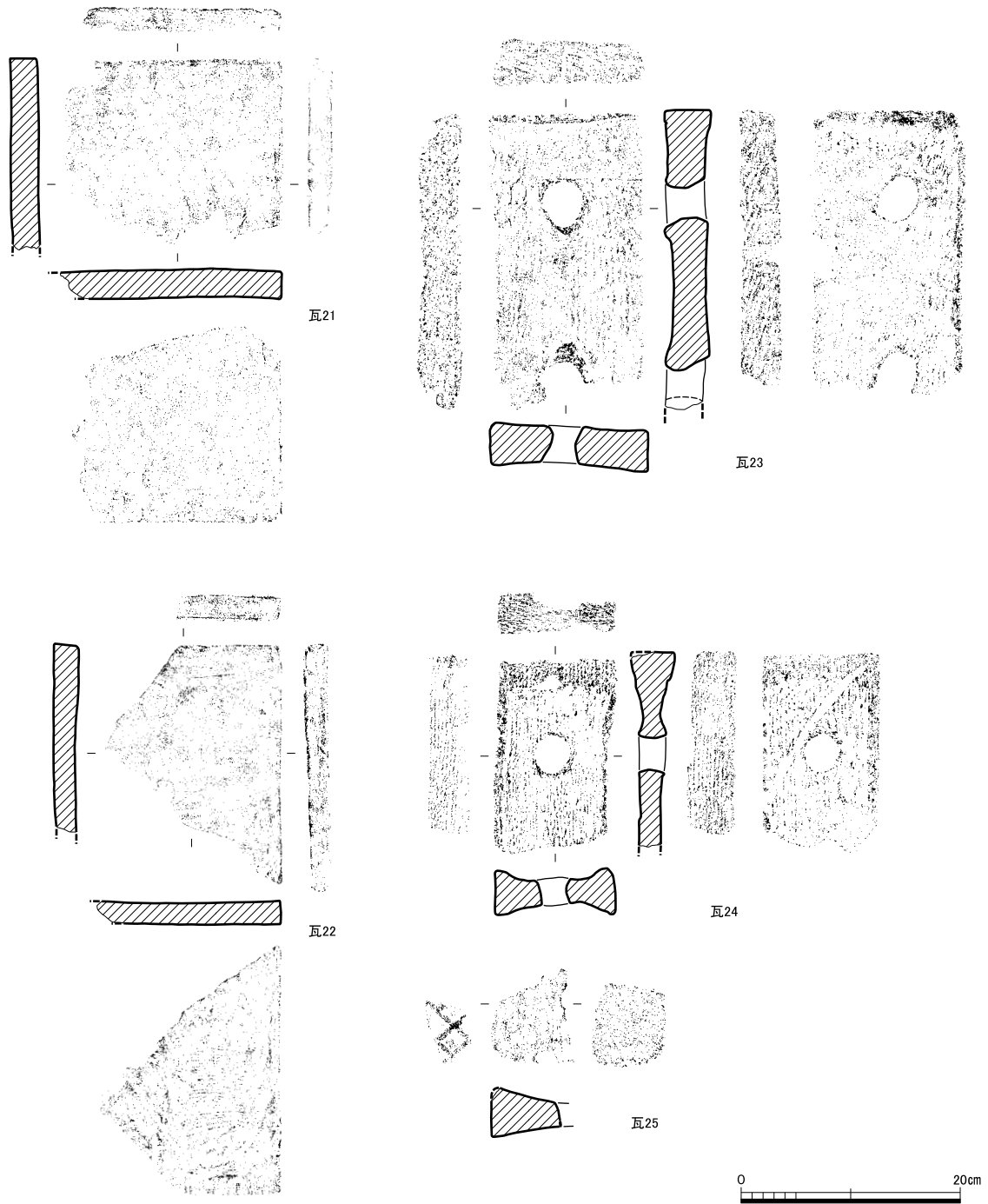


図39 埴拓影及び実測図（1：6）

凸面は弧線と三本線の組み合わせタタキをナデ消す。瓦17の凹面は丁寧なナデ、凸面は粗いナデで仕上げる。瓦18の凹面はナデ、凸面は格子目と三本線の組み合わせのタタキで仕上げられる。焼成は非常に堅緻で、丸瓦の瓦15とセットになるものと思われる。

雁振瓦（図38、図版17） 瓦19・20は建物の大棟に葺く雁振瓦である。第5期の土坑170からまともに出て出土した。いずれも二次被熱を受ける。残存状況の良好な2点を掲載した。瓦19・20ともに凸面は非常に丁寧に板ナデされる。凹面はコビキ痕が明瞭に残る。胎土はやや粗く、焼成は堅緻である。

磚（図39） 第4期・第5期の遺構や整地層から複数の敷磚が出土したが、残存状況の良い瓦21・22の2点を掲載した。瓦21は厚さが約2.5cmあり、表面と側面は丁寧な板ナデ、裏面は粗い指ナデで仕上げる。胎土は緻密で焼成は堅緻である。瓦22は厚さが約2.2cmあり、表面と側面は丁寧な板ナデ、裏面は粗い板ナデでコビキ痕が残る。胎土は緻密で焼成は堅緻である。

瓦23～25は有孔磚である。多数の有孔磚が出土したが、特徴的な3点を掲載した。瓦23は孔が2箇所ある大型のタイプである。全面縄タタキが施されるが、片側側面と表面は磨滅が著しい。また磨滅する面の端部は二次被熱を受ける。胎土は粗く焼成はやや軟質である。瓦24は小型のタイプである。孔は2箇所と考えられるが1箇所のみ残存する。全面縄タタキが施される。表面は縄タタキののち指ナデによる斜線が1本入る。胎土はやや粗く、焼成は堅緻である。瓦25は縄タタキを用いないタイプである。孔が1箇所残存する。側面は格子目タタキ、表面は丁寧な板ナデ、裏面はナデ、端面はヘラケズリで仕上げられる。胎土は緻密で焼成はやや軟質である。

(3) 銭貨・金属製品

銭貨（図40、図版17、表5）

銭貨は、137枚出土した。このうち銭種が判明したのは78枚である。各種の出土枚数と出土遺構は表5にまとめた。北宋銭が約59%を占める。状態が良い41枚を図示した。この中では、北宋銭

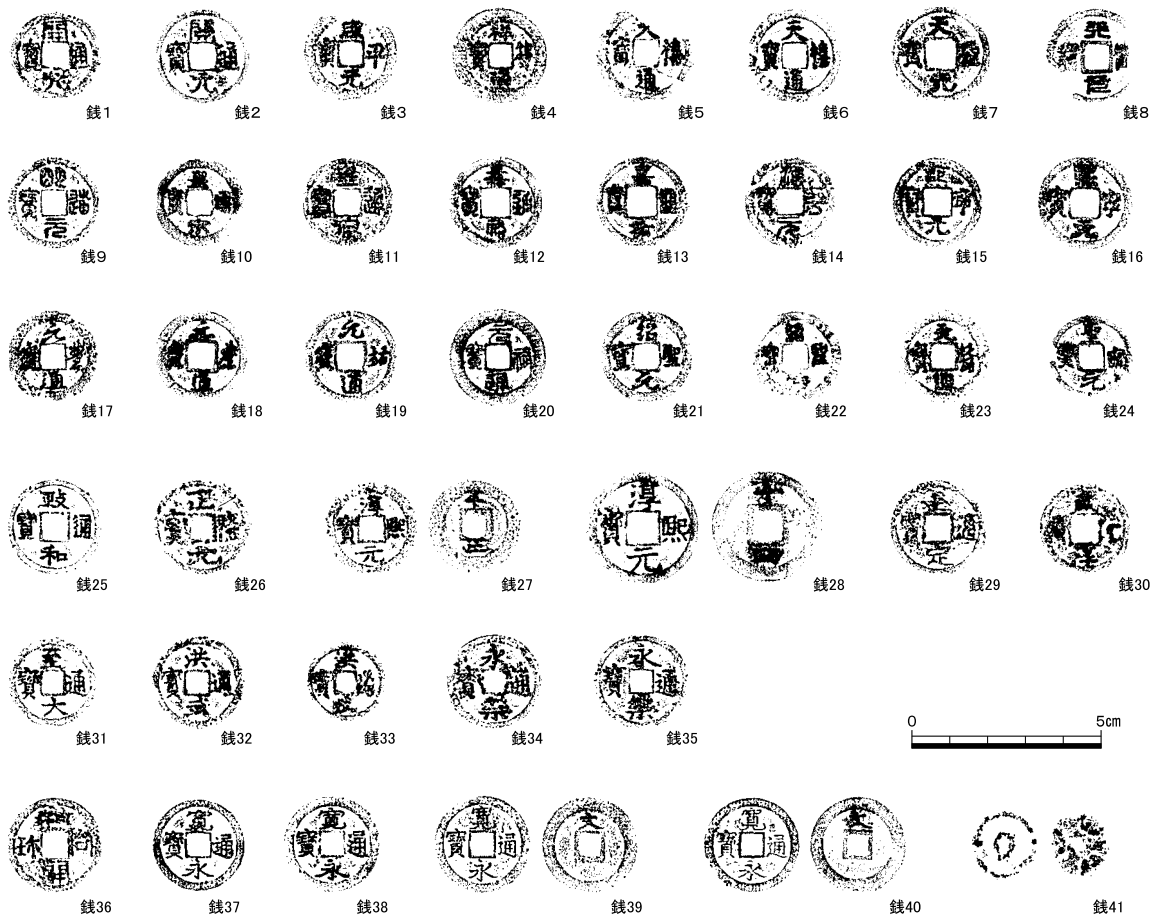


図40 銭貨拓影（1：2）

表5 錢貨一覧表

番号	種類	初鑄年	時代	枚数	出土遺構・層
銭1・2	開元通寶	621	唐	4	第5・6・7期整地層、井戸350(7期)
	軋元重寶	758	唐	1	土坑1(7期)
銭3	咸平元寶	998	北宋	2	第5・6期整地層
	景德元寶	1004	北宋	1	カマド195(5期)
銭4	祥符通寶	1008	北宋	2	第4期整地層、土坑320(4期)
銭5・6	天禧通寶	1017	北宋	4	第4・7期整地層、風呂210(5期)、井戸350(7期)
銭7・8	天聖元寶	1023	北宋	3	風呂210(5期)
銭9	明道元寶	1032	北宋	1	土坑99(6期)
銭10・11	皇宋通寶	1038	北宋	4	風呂210(5期)、第6期整地層、土坑1(7期)
銭12・13	嘉祐通寶	1056	北宋	2	土坑261・277(4期)
銭14	治平元寶	1064	北宋	2	埋甕267(4期)、第5期整地層
銭15・16	熙寧元寶	1068	北宋	3	第7期整地層
銭17・18	元豊通寶	1078	北宋	7	地業158・風呂210(5期)、ピット105(6期)、第5・7期整地層
銭19・20	元祐通寶	1086	北宋	6	風呂221(4期)、溝85(6期)、第4・6・7期整地層
銭21・22	紹聖元寶	1094	北宋	5	風呂221(4期)、第5・6・7期整地層
銭23	元符通寶	1098	北宋	1	第5期整地層
銭24	聖宋元寶	1101	北宋	2	風呂221(4期)、井戸350(7期)
銭25	政和通寶	1111	北宋	1	土坑170(5期)
銭26	正隆元寶	1157	金	1	カマド255(4期)
銭27	淳熙元寶	1174	南宋	1	第7期整地層
銭28	淳熙元寶(折二)	1174	南宋	1	土坑170(5期)
銭29	嘉定通寶	1208	南宋	1	第5期整地層
銭30	咸淳元寶	1265	南宋	1	第5期整地層
銭31	至大通寶	1310	元	1	第6期整地層
銭32・33	洪武通寶	1368	明	8	風呂210(5期)、井戸18(7期)、第5・6・7期整地層
銭34・35	永樂通寶	1408	明	3	溝85(6期)、第6・7期整地層
銭36	和同開珎	708		1	第5期整地層
銭37・38	寛永通寶			5	第7期整地層
銭39・40	寛永通寶(文銭)			3	第7期整地層
銭41	キセル銭			1	第7期整地層
	不明			59	
合計				137	

の明道元寶(銭9)、南宋銭の淳熙元寶(銭27)と淳熙元寶の折二銭(銭28)、同じく南宋銭の咸淳元寶(銭30)、元の銭貨である至大通寶(銭31)、和銅開珎(銭36)は出土事例の少ないものである。淳熙元寶(銭27)は裏面に「十二」、淳熙元寶折二銭(銭28)は裏面に「十四」の文字が入る。銭37～40は寛永通寶であるが、そのうち銭39・40は裏面に「文」の文字が入る新寛永である。銭41はキセルの火皿部分を平らに潰して緡銭などに混ぜて使用したものである。

金属製品(図41、図版17、表6)

金1～3は鉄製品である。金1・2は刀であるが、錆が厚く付着し、本来の刃の厚みは不明である。金3はL字状に残存する鉄製品である。用途は不明。

金4～26は銅製品と考えられる。金4は杯である。口径約9.6cm、高さは約2.1cmある。口縁端部が1箇所輪花状になっている。金5は鉋子である。口縁部は受け口状を呈し、片口が付く。片口の上部には把手が取りつく凸部があり、把手を留める銅釘が刺さったままになっている。金6は把手である。把手部分は断面半円形で空洞になっており、中に木質が残存している。木の柄を差し込んで使用していたものと考えられる。扇形の本体との接続部には銅製の鉋留めの痕が3箇所に残る。

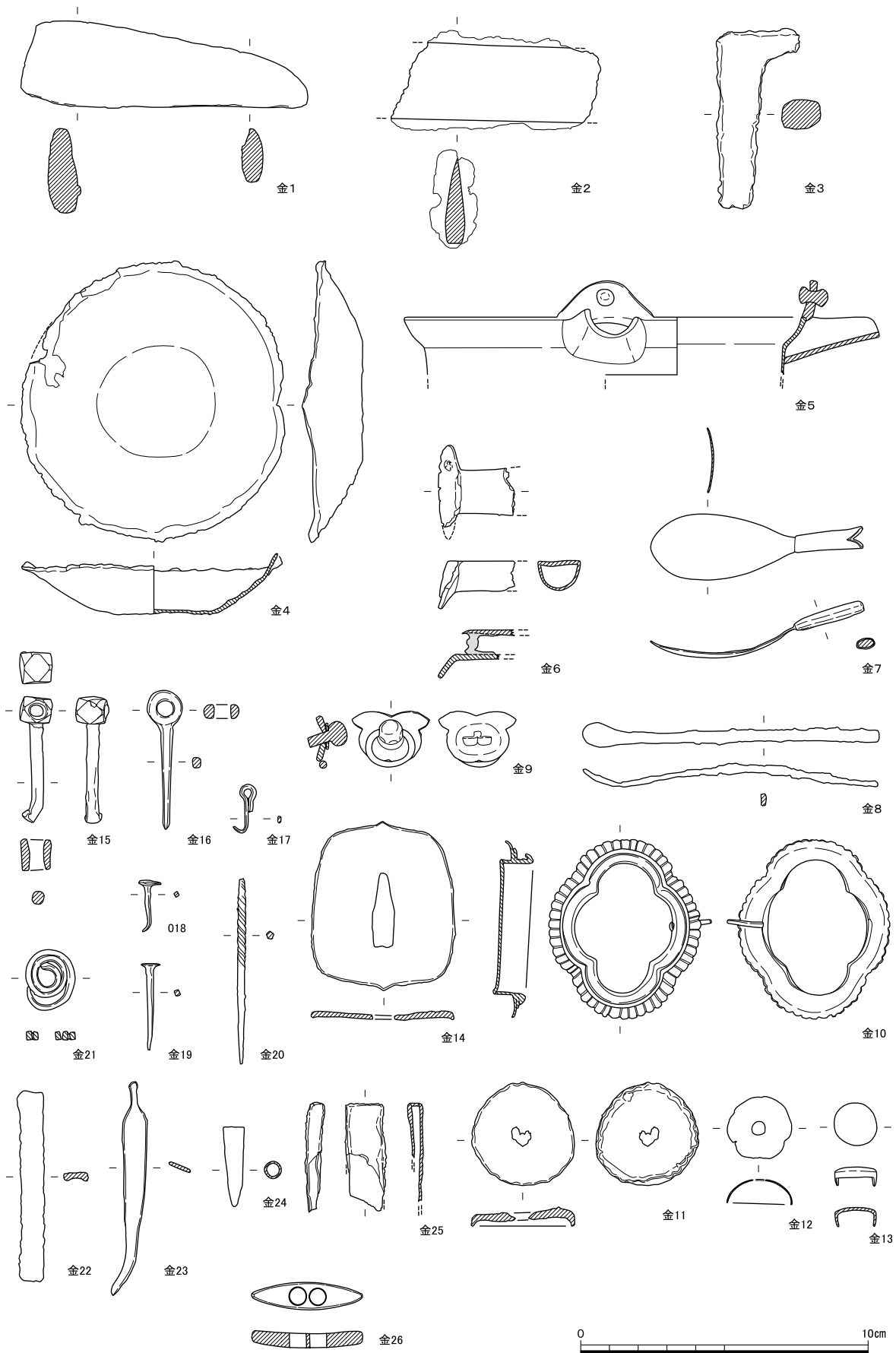


图41 金属製品実測图 (1 : 2)

金7は匙である。先割れになった柄が付く。中は空洞で、木の柄を差し込んだと考えられる。金8も匙である。完存する。金9は紐金具である。柿形の鑲台に鑲座が付く。鑲座の留め金具は裏に貫通している。金10は襖引手金具である。木瓜形で周囲には2重に縁が付き、外側の縁は細かい蓮弁状の細工が施される。鋳が刺さったまま残る。金11・12は座金具である。金11の縁は細かい輪花状に加工される。金12も輪花形である。金13は鋳金具と考えられる。金14は刀の鐔である。文様はない。金15は工具状製品である。多角形の頭の部分は外面全面に鍍金される。金16は頭の部分が環状になる鋳である。金17は掛金具、金18・19は鋳である。金20は上半がネジ状に加工される。金21は細い銅線を渦巻き状に巻いたものである。金22は長方形の薄い板状製品である。金23は筭の可能性のある銅製品である。金24は円錐状の製品で内部は空洞である。金25は扁平な箱形の製品である。金26は甲冑の部品である笠鞋である。全面に鍍金される。京都市内では山科本願寺跡で出土例がある⁴⁾。

表6 金属製品一覧表

番号	種類	材質	出土遺構・層
金1	刀	鉄	土坑434(3期)
金2	刀	鉄	風呂221(4期)
金3	L字状製品	鉄	風呂210(5期)
金4	杯	銅か	坪庭141(6期)
金5	銚子	銅か	土坑170(5期)
金6	把手	銅か	風呂221(4期)
金7	匙	銅か	第4期整地層
金8	匙	銅か	土坑184(6期)
金9	紐金具	銅か	第6期整地層
金10	襖引手金具	銅か	土坑170(5期)
金11	座金具	銅か	風呂210(5期)
金12	座金具	銅か	土坑174(5期)
金13	鋳金具	銅か	第5期整地層
金14	刀鐔	銅か	第5期整地層
金15	工具状製品	銅か	第2期整地層
金16	環状鋳	銅か	土坑170(5期)
金17	掛金具	銅か	土坑170(5期)
金18	鋳	銅か	風呂221(4期)
金19	鋳	銅か	風呂221(4期)
金20	ネジ状製品	銅か	風呂210(5期)
金21	渦巻状製品	銅か	風呂210(5期)
金22	板状製品	銅か	風呂221(4期)
金23	筭か	銅か	土坑170(5期)
金24	円錐状製品	銅か	風呂210(5期)
金25	箱形製品	銅か	風呂210(5期)
金26	笠鞋	銅に鍍金	石室150(6期)

(4) 石製品 (図42、図版18、表7)

調査では滑石製の石鍋が9点出土した。転用された1点を除いた8点は第4期・第5期の室町時代の遺構あるいは整地層から出土している。

残存状況の良い5点を図示した。石2の石鍋外面には煤が付着する。石4は両端が綺麗に切断されており、中央部にも切り込みが認められることから、温石などに転用する過程のものである可能性がある。石5は石鍋底部であるが、底部内面に煤が付着する。

石6・7は硯である。石6の硯は側面全面に漆が塗られている。石8～13は砥石である。調査では主に第4期・第5期の遺構や整地層から砥石が多量に出土した。大きく分けて長方形で箱型のもの、扁平なもの、扁平で幅が広いものの3タイプがある。それぞれで残存状況の良いものを図示した。石8～10は箱型のタイプで、表

表7 石製品一覧表

番号	種類	出土遺構・層	石材	備考
石1	石鍋	土坑216(4期)	滑石	
石2	石鍋	土坑417(4期)	滑石	
石3	石鍋	土坑391(4期)	滑石	
石4	石鍋	井戸350(7期)	滑石	転用
石5	石鍋	第5期整地層	滑石	
石6	硯	土坑280(4期)	粘板岩系	
石7	硯	土坑318(4期)	粘板岩系	
石8	砥石	第4期整地層	凝灰岩系	二次被熱
石9	砥石	風呂221(4期)	滑石	
石10	砥石	土坑260(4期)	砂岩系	
石11	砥石	風呂221(4期)	粘板岩系	
石12	砥石	井戸173(6期)	粘板岩系	二次被熱
石13	砥石	カマド255(4期)	粘板岩系	
石14	砥石か	第4期整地層	粘板岩系	
石15	磨石か	土坑410(3期)	ホルンフェルス	
石16	軽石	土坑174(5期)	軽石	
石17	茶臼	第7期整地層	花崗岩系	
石18	茶臼	第5期整地層	砂岩系	二次被熱
石19	茶臼	第7期整地層	花崗岩系	

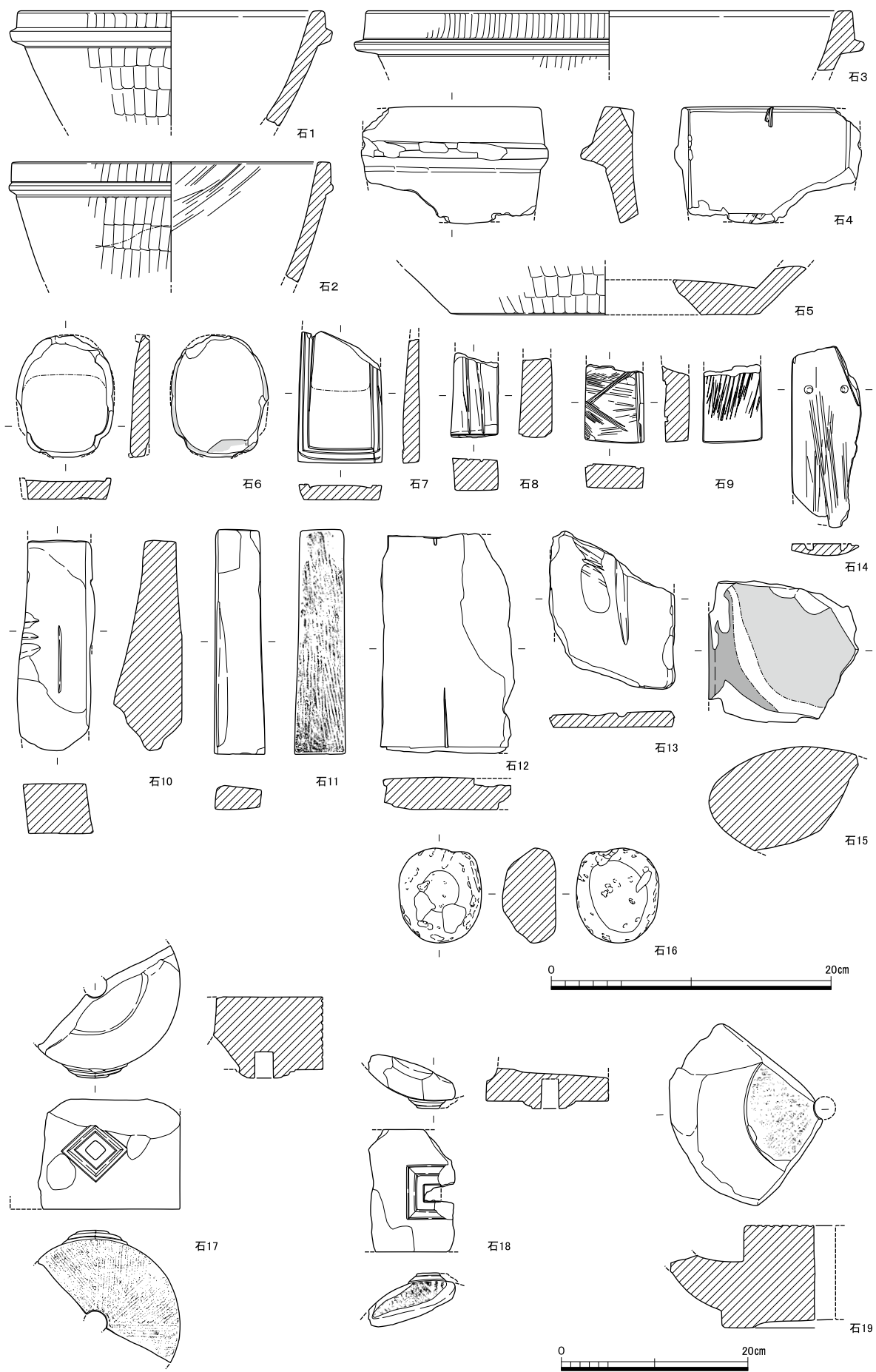


図42 石製品実測図（1：4、石17～19は1：6）

面に複数の筋状の溝がある玉砥石である。石8は花崗岩系、石10は砂岩系の石材で、粗加工用のものと考えられる。石9は滑石製の砥石で石鍋を転用した可能性が高い。石11は扁平なタイプである。石材は白色の粘板岩系で「鳴滝砥石」と通称される仕上げ用の砥石である。石12・13は扁平で幅広のタイプで、筋状の溝がある玉砥石である。やはり粘板岩系の「鳴滝砥石」で、仕上げ用である。石14は表面が摩擦により非常に平滑で、砥石の可能性が高い。2箇所穿孔があるが貫通しない。石材は粘板岩系で、最も硬質の仕上げ用砥石に用いられるものである。石15は磨石か。上面は煤が付着し、側面には赤色顔料が塗付される。古墳時代以前の烏丸綾小路遺跡に関連する遺物である可能性がある。石16は軽石である。摩擦により平坦になる箇所があり、垢擦石として使用されたものか。石17～19は茶臼である。石17は上臼で、子持菱の装飾がある挽手穴が残る。芯棒穴には漆が付着する。石材は花崗岩系である。石18も上臼である。二重正方形の挽手穴が残る。強い二次被熱を受ける。石材は砂岩である。石19は下臼である。二次被熱を受ける。石材は花崗岩系である。

(5) ガラス (図43)

玉1は、第2期の柱穴456から出土したガラス小玉である。径約3mm、高さ約3mm、重さは0.084gである。成分分析の結果、カリ鉛ガラスであることが判明した。⁵⁾顕微鏡観察で、気泡が綺麗な形状のまま観察できたことから、巻き付け技法ではなく、型で製作されたものと考えられる。

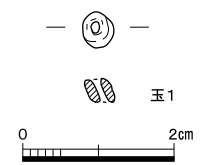


図43 ガラス小玉
実測図 (1 : 1)

註

- 1) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年に拠った。
- 2) 土器の型式・年代については小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年に準拠する。
なお、「平安京Ⅰ～Ⅴ期」「京都Ⅵ～ⅩⅣ期」を「京都Ⅰ～ⅩⅣ期」で統一した。

750頃	840頃	930頃	1010頃	1080~90頃	1180頃	1270頃	1360頃	1440頃	1500頃	1580~90頃	1660頃	1740年代頃	1820年代頃							
I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV							
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

- 3) 永井久美男『新版 中世出土銭の分類図版』高志書院 2002年
- 4) 「Ⅵ 主要な出土遺物」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局 1991年
- 5) 独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所北野信彦氏の分析による。

5. まとめ

今回の調査では、6面7時期の調査を行い、古墳時代から江戸時代までの各時期の遺構を検出した。下京周辺は江戸時代以降の攪乱が激しく、遺構面の残存状況が良好でないことが多いが、当地は「田中長奈良漬店」が寛政元年（1789）に創業して以来、明治期に敷地の拡張などの改編はあったものの、調査直前まで町家建物で営業を続けてこられた。そのため大規模な攪乱を受けることなく、中世以前の遺構が良好な状態で残り、下京中心部の土地利用の実態と変遷を復元する資料を得ることができたことは大きな成果である。また、今調査終了後に同敷地内で実施された文化財保護課による発掘調査でも、各時期の遺構が多数検出されている¹⁾。文化財保護課の協力を受けて、以下ではその成果を含めた各時期の遺構の変遷をまとめる。

（1）遺構の変遷（図44・45）

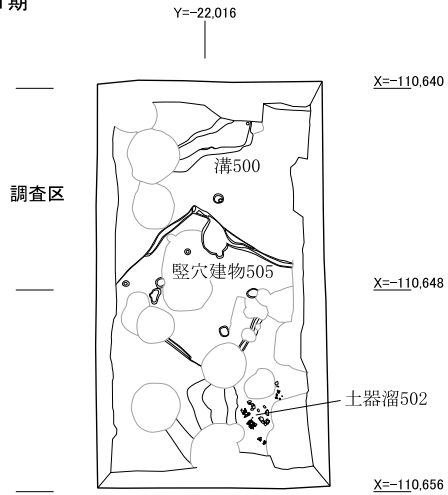
第1期 弥生時代から古墳時代の烏丸綾小路遺跡に関連する遺構群が形成される時である。今調査では古墳時代前期、布留式期の土器溜502が最も古い遺構であったが、市調査区南東部では弥生時代後期前半の竪穴建物1218が検出されている。これまで綾小路通以南での弥生時代後期の遺構の検出例は少なかったが、今回、竪穴建物が検出されたことによって、弥生時代後期の集落がさらに南に広がることが明らかとなった。同じく市調査区北側で見つかった土坑1220からは、複合口縁をもつ丸平底の甕が出土している。但馬地方からの搬入品と考えられ、時期は土器溜502と同じ布留式期である。その後、古墳時代中期後葉に至り、溝500と竪穴建物505が構築される。古墳時代中期の竪穴建物の検出は烏丸綾小路遺跡では初例となる。京都市内全域を見ても古墳時代中期の竪穴建物の検出例は極めて少ないが、中期後葉から増加する傾向にある。今調査事例もその1例であり、北山城の集落動態を考える上でも大きな成果といえよう。

第2期 平安京遷都から11世紀前半に大規模な整地が行われるまでの時期で、主体となる遺構の時期は平安時代中期の10世紀後半である。基盤層上面の窪地を埋めたと考えられる整地層からは9世紀から10世紀前半代の土器が出土しているが、宅地として利用され始めるのは周辺調査事例と同じく、10世紀中頃以降と考えられる。今調査と市調査区ともに小規模な柱穴などを検出したに留まり、活発な土地利用は次の第3期、平安時代後期に入ってからのものである。

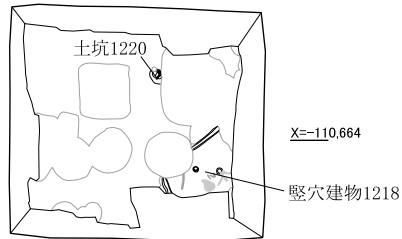
第3期 平安時代後期に11世紀前半代の遺物を含むいわゆる「ウグイス土」で大規模な整地が行われて以降、鎌倉時代の13世紀中葉までの時期である。小規模な柱穴が密集し、市調査区では11世紀後半に埋まった井戸1200も検出され、宅地としての利用が最も活発化した時期である。調査区北端で検出した東西方向の溝440は綾小路の南内溝の可能性はあるが、11世紀中葉までには埋められている。

第4期 寺院に関連すると考えられる施設が造られる時期である。整地層、各遺構から出土した土器から、寺院成立年代は14世紀末から15世紀初頭と考えられる。層厚0.4～0.6mもの大規模な整地を行い、風呂221などが構築される。調査区南東で検出した土坑群は、寺院造営に用いるため

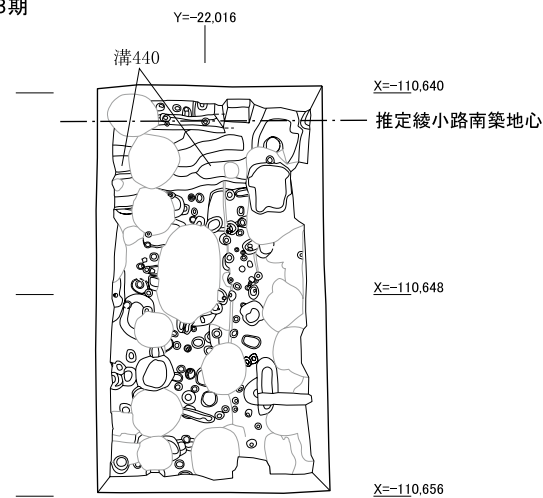
第1期



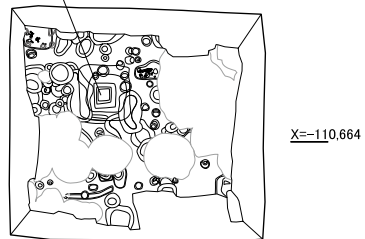
市調査区



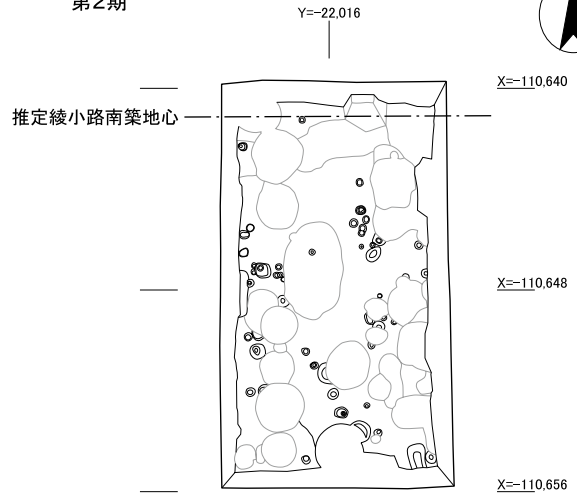
第3期



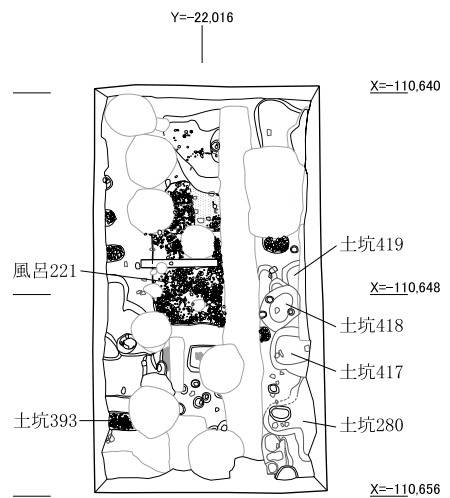
井戸1200



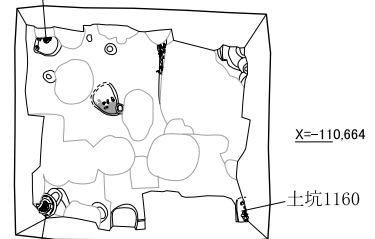
第2期



第4期



土坑1100

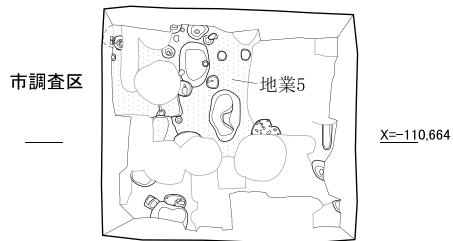
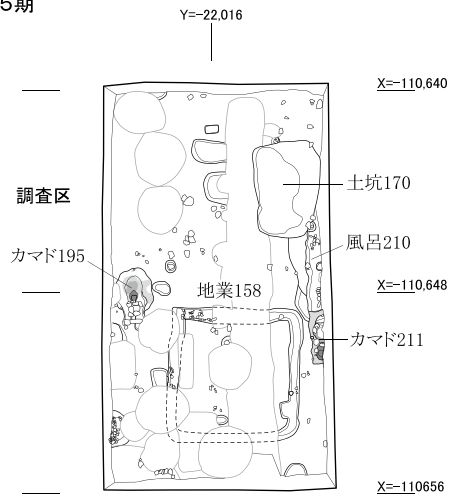


埋葬1081

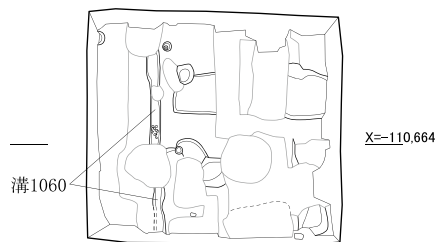
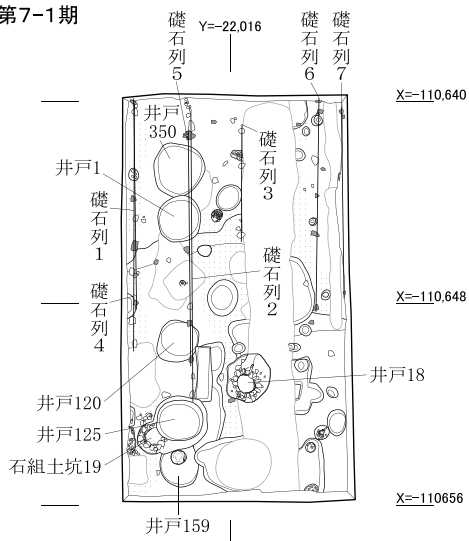


図44 遺構変遷図1 (1:300)

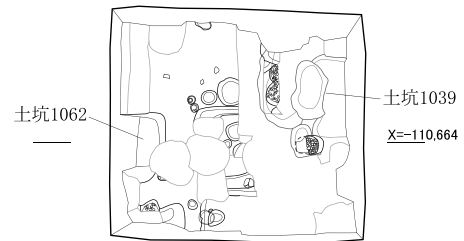
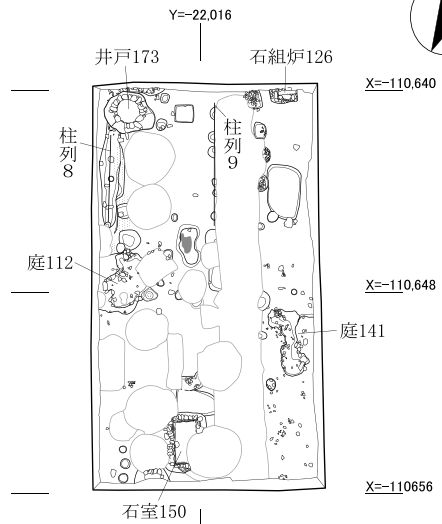
第5期



第7-1期



第6期



第7-2期

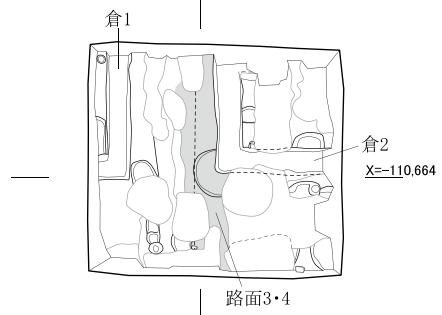
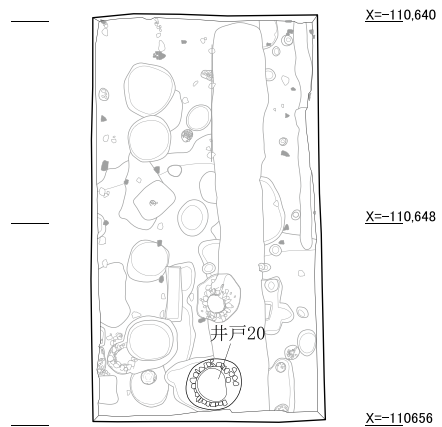


図45 遺構変遷図2 (1:300)

の粘土採掘土坑と考えられる。風呂遺構と寺院については次項で詳述するが、今調査区と市調査区ともに13世紀から14世紀代の遺物が出土する遺構は多くなく、その間は活発な土地利用がなされていなかった可能性が高い。粘土採掘土坑の存在も、その上部に建物などがなかったことを示すものであり、そうした場所を選んで、新たに寺院が造営されたと推測される。

第5期 第4期に造営された寺院が再整備される時期である。整地層出土遺物から、再整備の年代は15世紀中葉と考えられる。第4期の風呂221の建て替えと考えられる風呂210とそれに付随するカマド211、単独のカマド195、地業158などが構築される。地業158は一辺約5.0mの正方形の布掘地業であり、宝形造りの蔵であったと考えられるが、風呂210と近接しており、出土遺物の帰属時期に差異はないものの、存立期間にわずかな時間差があった可能性がある。市調査区でも、寺院に関連する堂舎の基礎部分と考えられる礫を多量に含む土を盛り上げた亀腹状の地業5が検出されている。この寺院の廃絶時期は、風呂210を削平する火災処理のための土坑170から出土した土器の年代から、15世紀末と考えられる。

第6期 綾小路に面して町家が形成される時期である。第5期の風呂210の埋土最上層から16世紀前葉の土器が出土していることから、15世紀末の寺院廃絶後、16世紀前葉まで土地は放棄されており、16世紀中葉になって整地が行われ町家となったと考えられる。下京城は、天文五年(1536)に延暦寺が洛中洛外の法華寺院を焼き討ちにした天文法華の乱でほぼ全域が焼失したとされるが、出土土器の年代から、ここで町家が形成されたのは天文法華の乱以後と推測される。検出された遺構には坪庭と考えられる庭112・141、石組みの井戸173、石組炉126、石室150などがある。坪庭が2つあることから、調査区内に2軒分の町家が存在すると考えられた。その境界は、第6期の町家境を踏襲したと考えられる第7期の柱列と溝の存在から庭112の東、石室150の西のY=-22,017.5ライン付近であったと推測される。つまり、井戸173と庭112、柱列8は西側町家に伴う遺構、石組炉126と庭141、石室150、柱列9は東側町家に伴う遺構となる。中世末期の坪庭がほぼ完全な形で見つかったのは初めてであり、特に西側町家の庭112は手水鉢が据えられるなど、現代の町家の坪庭にも見られる景観がこの時期に出現していたことがわかったことは大きな成果である。また、市調査区部分は町家の裏手空間であったと考えられ、粘土採掘のための土取り穴と考えられる大規模な土坑1039と土坑1062が検出されている。

第7期 第7-1期としたものは16世紀後半から19世紀の半ばまでの、第6期の町家が建て替えてを繰り返しながら踏襲され続けていく時期である。安土桃山時代の礎石列4・5と江戸時代前期の礎石列1・2がほぼ同じ位置で検出され、その間に17世紀から19世紀半ばの井戸やトイレ遺構と考えられる石組土坑19などが南北に並ぶ。また、市調査区では礎石列2・5を南に延長した位置で、17世紀初頭から18世紀初頭まで掘り直しを行いながら継承された溝1060が検出されている。童侍者町町内会所蔵の明治年間の『家券』²⁾『券状』に付属する「下京第拾壹區綾小路通室町東入童侍者町」の図に、現代の地図と調査区を重ねると、礎石列2・5と溝1060の位置は、田中長兵衛宅と永野物集女宅の敷地境の位置とほぼ一致する。これらのことから、16世紀後半から明治年間まで約300年間、町家の敷地境が変わることなく踏襲されたことが明確となった。

第7-2期は、明治年間に田中長奈良漬店が隣接する永野物集女宅の敷地の一部を買い受け、現在の間口になって以後の時期である。田中長奈良漬店の製造に関わる施設が出土した。今調査区では大規模な石組みの井戸20、市調査区では砂と粘土を交互に入れ突き固めた倉の基礎が2基見つかっている。

(2) 2時期の風呂遺構と寺院について

今調査では、2時期の風呂遺構を検出し、その風呂は寺院に関連するものであると推測した。風呂とした根拠については、まず、第3面(第5期)で検出したカマド211が風呂210とした大規模土坑と接続していたことがあげられる。カマド211の焚口は北を向いており、大規模土坑に向かって火を焚くことになる。その先にある大規模土坑は、平面長方形で深さがあり、さらに中には砂が入れられていたことから、砂に水を浸透させる排水施設の可能性を考えた。また、第4面(第4期)で検出した風呂221とした土坑も平面長方形で深さがあり、中には礫が詰められ同じく排水機能をもつと考えられた。南側は攪乱が激しいものの、カマドの痕跡と思われる炭集中部も2箇所を確認できた。これらのカマドと一連となって排水が必要な施設として、禅宗寺院の浴室などに見られる蒸し風呂形式の風呂ではないかと推測するに至った。

蒸し風呂形式の風呂とは、カマドで沸かした湯の蒸気を風呂屋形と呼ばれる高床簀子板敷きの建物に送り込み、風呂屋形の中で汗を流すものである。現代の湯につかる風呂が一般化するの江戸時代後期以降で、それ以前は蒸し風呂が一般的であったとされる³⁾。正安元年(1299)成立の『一遍上人絵伝』や観応二年(1351)の成立とされる『慕婦絵詞』、天文五年(1536)成立の『東大寺縁起絵巻』などの絵画資料に描かれた蒸し風呂や現存する禅宗寺院の浴室をみると、カマドは大・小2基がセットとなるものが多く、近隣には水を汲む井戸あるいは水桶が伴っている。蒸し風呂形式の風呂の発掘調査事例としては、広島県万徳院跡⁴⁾、和歌山県根来寺跡⁵⁾、京都市平安京左京三条三坊十町跡⁶⁾のものなどがある。万徳院は吉川元長が天正二年(1574)に建立した寺院跡で、風呂屋と井戸が近接して見ついている。根来寺は真言宗寺院であるが、その中の坊院跡で16世紀の湯屋が検出されている。平安京左京三条三坊十町跡は、織田信長が天正四年(1576)に造営を開始した二条御新造跡で、その時期の庭に面した浴室遺構が検出されている。いずれも複数のカマド、土間、石敷き、井戸あるいは水溜めを伴うことなどが共通する。風呂屋形の床下は、蒸気が水となって落ちるため、根来寺のものは礫敷き、二条御新造のものは礫詰めになっていた。今調査で検出した第3期の風呂210は砂が入れられており、第4期の風呂221は礫が詰められていた。また、風呂221には、集石237とした石敷きや三和土230とした土間が付属し、南西には水溜め用ともなる埋甕267がある。風呂210も断面観察で北側に石敷き状のものが取り付くことを確認しており、両者ともに過去の調査事例との共通点が多いことも風呂とする根拠となろう。風呂210では、砂の上面で風呂屋形の柱を支える礎石と考えられるものも複数検出している。さらにこの風呂210は、第4期の風呂221を真東に約5m移動させた位置にあり、規模も類似することから、風呂221から風呂210への建て替えが行われたと考えられる。

次に、上記の風呂を寺院に伴うものとした根拠について述べたい。そもそも寺院において風呂とは僧侶が沐浴潔斎する場として存在したとされる⁷⁾。そこから、病氣治療などのための施浴として一般にも開放され、それが布教活動につながるなど、風呂は寺院内でも重要な意味を持っていたと考えられる。禅宗寺院においては七堂伽藍のひとつが「浴室」であり、中世以前においては風呂と寺院は切り離しては考えられないものであった。しかし、大量の燃料を必要とする風呂に入浴することは贅沢行為であることから、客をもてなし楽しむ娯楽的要素が加わり、室町時代以降、有力大名などの屋敷地に風呂がつくられる例が増加する。信長の二条御新造の風呂もその一例といえる。また室町時代後期には町湯の存在が公家の日記などから知られることから、風呂の存在のみで寺院と断定することはできない。そこで、風呂以外の出土遺構を見ると、第5期では、蔵の基礎と考えられる地業158や、亀腹状の地業5が見つまっている。いずれも宝蔵や御堂など寺院に存在しても良い建物として想定することは可能である。

さらに、もうひとつ寺院とする根拠となったのが、第4期・第5期の遺構出土遺物の内容である。軒瓦や丸・平瓦、雁振瓦、敷塼などの瓦類が多数出土した。室町時代後期の京を描いたとされる上杉家伝来の「洛中洛外図屏風」において、瓦葺きもしくは檜皮葺きで大棟にのみ瓦を葺く萱棟の建物として描かれるのは、御所や公家二条家の邸宅二条殿などの例外を除けば寺社に限定される⁸⁾。また土器類については風炉や香炉類の出土が多く、金属製品では飾り金具類が多数出土するなどの特徴があげられ、一般的な町家域の出土遺物とは異なった様相を見せている。以上の遺構、遺物の両面からみて、寺院跡である可能性が高いと判断した。また、寺院跡であるとすれば、それは、ある程度の規模をもち、財力を蓄えた寺院であったと推測される。調査面積は市調査区と合わせても250㎡に満たないものの、出土した瓦類や輸入陶磁器、国産陶磁器類などの内容は、京都市域でいえば、山科本願寺跡や本圀寺跡などの室町期の大寺院の出土遺物と共通するものである。また、灰を溜めた土坑や砥石の出土量が多いことから、香炉灰や金属製品の寺内生産機能を持っていた可能性も考えられる。

しかし、この寺院について、その存在を示す同時代史料は確認できていない。ただし、調査地が所在する童侍者町に南接する二帖半敷町の町名の由来として、寛文四年(1664)に成立したとされる京の地誌『京雀』に「・・(略)・・。むかしこの町に五条寺とて真言師の寺ありしを、師の房身まかりける時、二人の弟子に寺をふたつにわけてとらせければ、五条寺ふたつにわけて二帖半じきの町と名づけしとにや。・・(略)・・。」との記載がある⁹⁾。今回検出した遺構は、本堂などの寺院の中心建物ではないことから、寺中心部は調査地南側の二帖半敷町にあったとすれば、『京雀』に記された「五条寺」の一部である可能性がある¹⁰⁾。また、今調査でみつかった寺院の建立時期は、出土遺物から14世紀末から15世紀初頭と推測されるが、これは法華宗による洛中弘道が盛んになる時期とも重なる¹¹⁾。それ以後、下京では法華宗が町衆の信仰を集めたが、法華宗以外の各宗派も相次ぎ洛中への進出をはかっていた時期でもある。「五条寺」以外にも、法華寺院やそれ以外の宗派の寺院であった可能性も残り、この寺院の由来については今後の検討課題としたい。

最後に、この寺院の廃絶年代について触れたい。第5期の風呂210を削平する土坑170から出土

した遺物は京都の土器編年の京都Ⅸ期新段階の中でも新しい様相をもつものである。京都Ⅸ期新段階の実年代は1470～1500年頃とされる。時の関白太政大臣近衛正家の日記『後法興院記¹²⁾』に、「明応三年七月六日 南方に火事あり。四条室町と云々。数刻炎上、近来の大焼亡なり。五十四町を廻ると云々。東は烏丸、西は堀河、南は五条、北は四条と云々。」との記載がある。明応三年は西暦では1493年にあたり、日記にある大焼亡の範囲に調査地は含まれる。土坑170出土の遺物は二次的に火を受け、多量の焼土とともに出土しており、この明応三年（1493）の火災後に廃棄されたものである可能性が高い。遺構・遺物からは、これ以後当地で寺院が再建された痕跡は確認できず、この火災によって焼失し、そのまま廃絶した、あるいは移転したと推測される。

註

- 1) 赤松佳奈「平安京左京五条三坊十町跡・烏丸綾小路遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成27年度』京都市文化市民局 2016年 刊行予定。
- 2) 『券状 写 下京九町組 童侍者町』『家券 童侍者町』
- 3) 大場 修『物語ものの建築史 風呂のはなし』鹿島出版 1986年
- 4) 『史跡吉川氏城館跡 万徳院跡－第2次発掘調査概要－』広島県教育委員会 1992年、『史跡吉川氏城館跡 万徳院跡－第3次発掘調査概要－』広島県教育委員会 1993年
- 5) 『根来寺坊院跡』岩出町教育委員会 2005年
- 6) 柏田有香『平安京左京三条三坊十町跡・烏丸御池遺跡・二条殿御池城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009－20 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 7) 前掲註3に同じ。
- 8) 小澤 弘・川嶋将生『図説 上杉本「洛中洛外図屏風」を見る』河出書房新社 1994年
- 9) 『京雀』二巻、『新修京都叢書』第1巻 臨川書店 1993年所収。
- 10) 二帖半敷町では今調査地の南隣接地で発掘調査（図1・表1－15）が実施されているが、近世以降の攪乱が著しく、中世の遺構面の残存状況が良好でなかったため、寺院に関連する遺構は確認されていない。
- 11) 「下京区概説」『史料京都の歴史 第12巻 下京区』平凡社 1981年、「第二章 宗教と商業の都市」『京都の歴史 3 近世の胎動』学林書院 1968年
- 12) 『陽明叢書記録文書篇第八輯 後法興院記三』思文閣出版 1991年所収。

表8-1 土器一覧表

番号	器種	器形	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調	備考
1	古式土師器	甕	土器溜502	12.4	(4.3)	-	口縁部20	7.5YR7/4 にぶい橙色	布留式甕
2	古式土師器	甕	土器溜502	13.9	(5.2)	-	口縁部20	7.5YR7/6 橙色	布留式甕
3	古式土師器	壺	土器溜502	15.0	(3.7)	-	口縁部40	7.5YR7/4 にぶい橙色	布留式甕
4	古式土師器	甕	土器溜502	12.4	(2.5)	-	口縁部40	2.5Y8/2 灰白色	
5	古式土師器	甕	土器溜502	15.8	(4.7)	-	口縁部10	2.5Y8/2 灰白色	
6	古式土師器	小型丸底壺	土器溜502	-	(3.2)	-	体部20	5YR6/8 橙色	
7	古式土師器	直口壺	土器溜502	12.0	(8.9)	-	口縁部20	2.5YR6/8 橙色	
8	古式土師器	直口壺	土器溜502	16.4	(10.0)	-	口縁部25	7.5YR7/6 橙色	河内搬入品か
9	古式土師器	広口壺	土器溜502	26.0	(3.2)	-	口縁部破片	2.5Y8/2 灰白色	
10	古式土師器	高杯	土器溜502	-	(3.7)	-	脚柱部20	7.5YR7/4 にぶい橙色	
11	須恵器	杯蓋	堅穴建物505	-	(3.8)	-	15	N5/0 灰色	
12	須恵器	杯身	堅穴建物505	-	(2.7)	-	15	N5/0 灰色	
13	須恵器	壺	溝500	7.1	(7.5)	-	70	N7/0 灰白色	
14	土師器	皿	第2期整地層	10.8	-	-	10	10YR8/2 灰白色	灯明皿
15	須恵器	蓋	第2期整地層	13.0	(1.3)	-	10	N6/0 灰色	
16	灰釉陶器	壺	第2期整地層	-	(9.6)	9.2	30	2.5Y7/1 灰白色	
17	緑釉陶器	椀	第2期整地層	-	(2.3)	6.4	20	胎土:2.5Y7/1 灰白色 釉:7.5Y6/2 灰オリーブ色	東海系
18	緑釉陶器	鉢	第2期整地層	15.7	(8.3)	-	20	胎土:2.5Y7/1 灰白色 釉:7.5Y6/3 オリーブ黄色	
19	黒色土器	椀	第2期整地層	15.0	(3.2)	-	5	10YR7/3 にぶい黄橙色	内黒
20	土師器	皿	第3期整地層	11.0	1.4	-	25	10YR8/3 浅黄橙色	
21	土師器	皿	第3期整地層	16.0	(2.5)	-	10	5YR7/6 橙色	
22	土師器	皿	第3期整地層	12.0	(1.8)	-	20	7.5YR7/4 にぶい橙色	
23	土師器	皿	第3期整地層	15.4	(2.8)	-	20	7.5YR7/6 橙色	
24	土師器	皿	第3期整地層	16.0	(2.8)	-	10	5YR7/6 橙色	
25	土師器	羽釜	第3期整地層	22.4	(16.5)	-	40	10YR8/3 浅黄橙色	
26	灰釉陶器	小椀	第3期整地層	10.0	3.2	4.6	25	胎土:2.5Y7/1 灰白色 釉:10Y6/1 灰色	
27	灰釉陶器	椀	第3期整地層	-	(3.4)	6.6	30	胎土:2.5Y7/1 灰白色 釉:7.5Y6/3 オリーブ黄色	
28	灰釉陶器	壺	第3期整地層	-	(7.2)	-	口縁部60	胎土:N7/0 灰白色 釉:10Y6/2 オリーブ灰色	
29	輸入 青磁	椀	第3期整地層	-	(2.0)	8.0	10	胎土:N7/0 灰白色 釉:5Y6/2 灰オリーブ色	越州窯
30	輸入 白磁	椀	第3期整地層	16.7	(6.0)	-	口縁部25	胎土:5Y8/1 灰白色 釉:5Y7/1 灰白色	
31	土師器	皿	溝440	9.8	1.7	-	95	10YR7/2 にぶい黄橙色	
32	土師器	皿	溝440	10.6	2.0	-	25	10YR7/3 にぶい黄橙色	
33	土師器	皿	溝440	11.6	1.4	-	25	7.5YR7/4 にぶい橙色	

表8-2 土器一覧表

番号	器種	器形	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調	備考
34	土師器	皿	溝440	12.0	(2.0)	-	20	10YR7/3 にぶい黄橙色	
35	土師器	皿	溝440	12.4	2.0	-	20	10YR7/3 にぶい黄橙色	
36	土師器	皿	溝440	16.0	(2.7)	-	10	10YR7/3 にぶい黄橙色	
37	黒色土器	椀	溝440	-	(2.3)	7.3	20	10YR7/3 にぶい黄橙色	内黒
38	黒色土器	椀	溝440	-	(3.2)	(7.0)	20	10YR7/3 にぶい黄橙色	内黒
39	輸入 白磁	椀	溝440	14.0	(2.7)	-	10	N8/0 灰白色	
40	土師器	皿	土坑292	8.6	1.4	-	100	10YR7/3 にぶい黄橙色	
41	土師器	皿	土坑292	8.8	1.6	-	95	10YR7/4 にぶい黄橙色	
42	土師器	皿	土坑292	9.2	1.7	-	70	10YR7/3 にぶい黄橙色	
43	土師器	皿	土坑292	14.9	2.6	-	40	10YR7/3 にぶい黄橙色	
44	土師器	皿	土坑292	14.8	3.5	-	60	10YR7/4 にぶい黄橙色	
45	瓦器	鉢	土坑292	21.0	(4.3)	-	口縁部10	N3/0 暗灰色	
46	焼締陶器	鉢	土坑292	33.0	(9.3)	-	口縁部20	2.5Y5/2 暗灰黄色	常滑
47	山茶椀	椀	土坑292	7.0	(2.5)	-	20	2.5Y7/1 灰白色	
48	土師器	皿	土坑426	8.9	1.6	-	100	2.5Y7/2 灰黄色	
49	土師器	皿	土坑426	9.2	1.8	-	100	7.5YR7/4 にぶい橙色	
50	土師器	皿	土坑426	9.4	1.7	-	70	7.5YR7/4 にぶい橙色	
51	土師器	皿	土坑426	9.7	1.5	-	100	5YR6/6 橙色	
52	土師器	皿	土坑426	10.0	1.8	-	40	10YR7/3 にぶい黄橙色	
53	土師器	皿	土坑426	10.0	1.9	-	50	7.5YR7/4 にぶい橙色	
54	土師器	皿	土坑426	12.8	2.5	-	25	10YR7/4 にぶい黄橙色	
55	土師器	皿	土坑426	14.0	2.7	-	25	2.5Y7/2 灰黄色	
56	土師器	皿	土坑426	14.0	2.5	-	25	10YR8/4 浅黄橙色	
57	土師器	皿	土坑426	15.0	(2.8)	-	15	10YR7/3 にぶい黄橙色	
58	土師器	皿	土坑426	15.0	2.8	-	30	7.5YR7/4 にぶい橙色	
59	土師器	鍋	土坑426	20.4	(6.2)	-	口縁部20	10YR8/3 浅黄橙色	
60	瓦器	蓋	土坑426	8.3	(1.8)	-	40	N4/0 灰色	
61	瓦器	椀	土坑426	15.0	5.9	6.2	25	N4/0 灰色	
62	輸入 白磁	椀	土坑426	17.0	2.4	-	口縁部10	胎土:5Y8/2 灰白色 釉:5Y7/2 灰白色	
63	輸入 白磁	椀	土坑426	-	(3.4)	-	口縁部 破片	胎土:N8/0 灰白色 釉:5Y7/2 灰白色	
64	輸入 白磁	皿	土坑426	9.6	2.4	3.3	90	胎土:N8/1 灰白色 釉:5Y7/3 浅黄色	
65	輸入 白磁	壺	土坑426	8.8	(4.6)	-	口縁部80	胎土:N8/0 灰白色 釉:10Y7/1 灰白色	
66	土師器	皿	土坑300	9.0	1.1	-	40	10YR7/2 にぶい黄橙色	

表8-3 土器一覧表

番号	器種	器形	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調	備考
67	土師器	皿	土坑300	8.2	1.3	-	100	10YR7/2 にぶい黄橙色	
68	土師器	皿	土坑300	8.4	1.7	-	80	10YR7/2 にぶい黄橙色	
69	土師器	皿	土坑300	12.2	2.2	-	100	10YR7/2 にぶい黄橙色	
70	土師器	皿	土坑300	12.6	2.2	-	100	10YR7/2 にぶい黄橙色	
71	土師器	皿	土坑300	12.8	2.1	-	60	10YR7/2 にぶい黄橙色	
72	瓦器	椀	土坑300	11.7	3.1	-	60	2.5Y8/1 灰白色～N2/0 黒色	
73	瓦器	椀	土坑300	16.0	(3.5)	-	20	2.5Y8/1 灰白色～N3/0 暗灰色	
74	山茶椀	椀	土坑300	-	2.0	7.8	20	2.5Y7/1 灰白色	硯転用
75	須恵器	鉢	土坑300	28.0	(8.2)	-	10	N4/0 灰白色	
76	焼締陶器	甕	土坑300	25.0	(4.3)	-	10	N5/0 灰色～2.5YR4/2 灰赤色	備前
77	輸入白磁	椀	土坑300	17.6	(3.6)	-	10	胎土:N8/0 灰白色 釉:7.5Y7/1 灰白色	
78	輸入白磁	椀	土坑300	-	(3.4)	5.9	底部100	胎土:N8/0 灰白色 釉:7.5Y7/2 灰白色	
79	灰釉陶器	椀	土坑434	-	(2.0)	7.6	底部40	胎土:2.5Y6/3 にぶい黄色 釉:5Y7/1 灰白色	墨書
80	土師器	皿	土坑263	7.1	1.9	-	100	10YR8/3 浅黄橙色	
81	土師器	皿	土坑263	11.7	3.1	-	100	10YR8/3 浅黄橙色	
82	山茶椀	椀	土坑263	4.0	2.7	(5.1)	40	2.5Y7/1 灰白色	
83	焼締陶器	壺	土坑263	-	(27.7)	22.2	50	7.5YR6/2 灰褐色	備前
84	土師器	皿	第4期整地層	6.8	1.9	-	100	10YR8/2 灰白色	
85	土師器	皿	第4期整地層	6.8	1.9	-	80	10YR8/3 浅黄橙色	
86	土師器	皿	第4期整地層	6.8	2.0	-	90	10YR8/2 灰白色	
87	土師器	皿	第4期整地層	7.3	1.9	-	80	7.5YR8/2 灰白色	
88	土師器	皿	第4期整地層	9.0	1.8	-	30	10YR8/2 灰白色	灯明皿
89	土師器	皿	第4期整地層	9.2	(1.8)	-	30	7.5YR7/1 明褐色	灯明皿
90	土師器	皿	第4期整地層	9.2	2.1	-	40	10YR8/2 灰白色	灯明皿
91	土師器	皿	第4期整地層	9.2	1.9	-	30	7.5YR8/2 灰白色	灯明皿
92	土師器	皿	第4期整地層	9.5	2.6	-	60	10YR8/2 灰白色	
93	土師器	皿	第4期整地層	9.7	2.6	-	95	10YR8/2 灰白色	
94	土師器	皿	第4期整地層	11.8	(2.8)	-	25	10YR8/2 灰白色	
95	土師器	皿	第4期整地層	12.0	(3.0)	-	25	7.5YR8/4 浅黄橙色	
96	土師器	皿	第4期整地層	13.0	(3.3)	-	25	10YR8/3 浅黄橙色	
97	土師器	皿	第4期整地層	9.2	1.7	-	20	5YR7/4 にぶい橙色	
98	土師器	皿	第4期整地層	10.0	1.9	-	25	10YR7/2 にぶい黄橙色	
99	土師器	皿	第4期整地層	10.4	(1.9)	-	20	10YR7/2 にぶい黄橙色	

表8-4 土器一覧表

番号	器種	器形	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調	備考
100	瓦器	鍋	第4期整地層	28.6	(10.1)	-	30	2.5Y7/1 灰白色	
101	瓦器	鍋	第4期整地層	28.3	(10.8)	-	25	N5/0 灰色	
102	施釉陶器	卸目皿	第4期整地層	14.0	3.2	9.0	40	胎土:N7/0 灰色 釉:7.5Y7/2 灰白色	瀬戸 灰釉
103	施釉陶器	椀	第4期整地層	16.8	(6.5)	-	40	胎土:10YR7/2 にぶい黄橙色 釉:7.5Y6/2 灰オリーブ色	瀬戸 灰釉
104	輸入 白磁	蓋	第4期整地層	3.0	1.9	2.5	100	胎土:2.5Y8/2 灰白色 釉:2.5Y8/2 灰白色	
105	土師器	皿	土坑417	6.1	1.9	-	100	2.5Y8/1 灰白色	
106	土師器	皿	土坑417	6.2	1.9	-	100	7.5YR8/4 浅黄橙色	
107	土師器	皿	土坑417	6.3	1.7	-	100	10YR8/2 灰白色	
108	土師器	皿	土坑417	6.4	2.0	-	100	7.5YR8/3 浅黄橙色	
109	土師器	皿	土坑417	6.5	1.8	-	100	10YR8/2 灰白色	
110	土師器	皿	土坑417	6.6	1.9	-	100	7.5YR8/2 灰白色	
111	土師器	皿	土坑417	6.7	1.9	-	100	7.5YR8/3 浅黄橙色	
112	土師器	皿	土坑417	6.7	1.9	-	100	2.5Y8/2 灰白色	
113	土師器	皿	土坑417	6.7	2.0	-	100	7.5YR8/1 灰白色	
114	土師器	皿	土坑417	6.8	2.1	-	100	2.5Y8/2 灰白色	
115	土師器	皿	土坑417	6.8	1.9	-	100	2.5Y8/2 灰白色	
116	土師器	皿	土坑417	7.0	2.0	-	100	7.5YR8/3 浅黄橙色	
117	土師器	皿	土坑417	7.9	2.4	-	100	10YR8/2 灰白色	
118	土師器	皿	土坑417	8.0	2.4	-	100	10YR8/1 灰白色	
119	土師器	皿	土坑417	8.0	2.4	-	100	10YR8/3 浅黄橙色	
120	土師器	皿	土坑417	8.1	2.2	-	100	10YR8/2 灰白色	
121	土師器	皿	土坑417	8.1	2.4	-	95	10YR8/2 灰白色	
122	土師器	皿	土坑417	8.1	2.3	-	100	10YR8/1 灰白色	
123	土師器	皿	土坑417	8.1	2.4	-	100	10YR8/2 灰白色	
124	土師器	皿	土坑417	8.2	2.3	-	100	10YR8/2 灰白色	
125	土師器	皿	土坑417	8.2	2.3	-	100	10YR8/2 灰白色	
126	土師器	皿	土坑417	8.3	2.4	-	100	10YR8/2 灰白色	
127	土師器	皿	土坑417	8.3	2.4	-	100	10YR8/2 灰白色	
128	土師器	皿	土坑417	8.4	2.4	-	75	10YR8/2 灰白色	
129	土師器	皿	土坑417	9.3	1.9	-	30	7.5YR8/3 浅黄橙色	
130	土師器	皿	土坑417	9.2	1.9	-	100	10YR8/3 浅黄橙色	灯明皿
131	土師器	皿	土坑417	9.0	1.9	-	100	10YR8/2 灰白色	灯明皿
132	土師器	皿	土坑417	9.2	1.9	-	95	10YR3/1 黒色褐色	灯明皿

表8-5 土器一覽表

番号	器種	器形	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調	備考
133	土師器	皿	土坑417	9.2	2.0	-	80	7.5YR8/3 浅黄橙色	
134	土師器	皿	土坑417	9.3	1.7	-	45	10YR8/3 浅黄橙色	
135	土師器	皿	土坑417	9.4	1.9	-	50	10YR8/3 浅黄橙色	
136	土師器	皿	土坑417	10.0	(2.8)	-	30	10YR8/2 灰白色	
137	土師器	皿	土坑417	10.2	2.5	-	40	10YR8/2 灰白色	
138	土師器	皿	土坑417	10.3	2.9	-	30	10YR8/2 灰白色	
139	土師器	皿	土坑417	10.4	2.7	-	75	7.5YR8/3 浅黄橙色	
140	土師器	皿	土坑417	10.4	2.7	-	100	7.5YR8/3 浅黄橙色	
141	土師器	皿	土坑417	10.5	2.6	-	25	10YR8/2 灰白色	
142	土師器	皿	土坑417	11.2	3.0	-	40	10YR8/3 浅黄橙色	
143	土師器	皿	土坑417	11.3	3.2	-	50	10YR8/1 灰白色	
144	土師器	皿	土坑417	11.4	3.3	-	75	10YR8/2 灰白色	
145	土師器	皿	土坑417	11.5	3.0	-	25	10YR8/2 灰白色	
146	土師器	皿	土坑417	11.6	3.1	-	70	10YR8/2 灰白色	
147	土師器	皿	土坑417	11.7	3.3	-	50	10YR8/2 灰白色	
148	土師器	皿	土坑417	11.8	3.3	-	100	10YR8/2 灰白色	
149	土師器	皿	土坑417	11.9	3.2	-	95	10YR8/2 灰白色	
150	土師器	皿	土坑417	13.9	3.3	-	75	7.5YR8/2 灰白色	
151	土師器	皿	土坑417	12.0	3.1	-	100	10YR8/2 灰白色	
152	土師器	皿	土坑417	12.0	3.2	-	100	10YR8/1 灰白色	
153	土師器	皿	土坑417	12.2	3.2	-	25	10YR8/3 浅黄橙色	
154	土師器	皿	土坑417	13.3	3.6	-	40	10YR8/2 灰白色	
155	土師器	皿	土坑417	13.2	3.9	-	40	10YR8/2 灰白色	
156	土師器	皿	土坑417	13.4	3.5	-	50	7.5YR8/3 浅黄橙色	
157	土師器	皿	土坑417	13.5	4.0	-	45	10YR8/3 浅黄橙色	
158	土師器	皿	土坑417	13.6	3.8	-	40	10YR8/2 灰白色	
159	土師器	皿	土坑417	13.7	3.4	-	45	7.5YR8/3 浅黄橙色	
160	土師器	皿	土坑417	13.8	3.9	-	40	7.5YR8/3 浅黄橙色	
161	土師器	皿	土坑417	13.8	3.6	-	100	10YR8/2 灰白色	
162	土師器	皿	土坑417	13.9	3.8	-	90	10YR8/2 灰白色	
163	土師器	皿	土坑417	14.0	3.8	-	45	10YR8/2 灰白色	
164	土師器	皿	土坑417	14.1	3.6	-	40	10YR8/2 灰白色	
165	土師器	皿	土坑417	14.2	(3.5)	-	25	10YR8/2 灰白色	

表8-6 土器一覧表

番号	器種	器形	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調	備考
166	土師器	皿	土坑417	16.3	(4.0)	-	15	10YR8/2 灰白色	
167	土師器	皿	土坑417	7.2	1.6	-	60	7.5YR7/4 にぶい橙色	
168	土師器	皿	土坑417	7.5	1.5	-	100	10YR6/3 にぶい黄橙色	
169	土師器	皿	土坑417	7.6	1.7	-	100	10YR7/2 にぶい黄橙色	
170	土師器	皿	土坑417	7.7	1.6	-	50	7.5YR5/2 灰褐色	
171	土師器	皿	土坑417	7.9	1.5	-	100	7.5YR7/4 にぶい橙色	
172	土師器	皿	土坑417	8.0	1.8	-	100	10YR7/3 にぶい黄橙色	
173	土師器	皿	土坑417	8.1	1.8	-	80	7.5YR7/4 にぶい橙色	
174	土師器	皿	土坑417	8.2	1.4	-	100	7.5YR7/4 にぶい橙色	
175	土師器	皿	土坑417	9.7	2.0	-	60	7.5YR7/4 にぶい橙色	
176	土師器	皿	土坑417	9.9	2.0	-	40	7.5YR7/4 にぶい橙色	
177	土師器	皿	土坑417	10.0	1.8	-	50	10YR7/3 にぶい黄橙色	
178	土師器	皿	土坑417	10.1	1.9	-	100	2.5Y8/2 灰白色	
179	土師器	皿	土坑417	10.1	2.0	-	100	7.5YR7/4 にぶい橙色	
180	土師器	皿	土坑417	10.2	2.2	-	100	7.5YR7/4 にぶい橙色	
181	土師器	皿	土坑417	10.2	2.4	-	100	7.5YR7/4 にぶい橙色	
182	土師器	皿	土坑417	10.3	2.0	-	100	7.5YR7/4 にぶい橙色	
183	土師器	皿	土坑417	10.5	2.1	-	100	2.5Y8/2 灰白色	
184	土師器	皿	土坑417	10.7	2.1	-	100	7.5YR7/4 にぶい橙色	
185	土師器	皿	土坑417	10.8	2.1	-	70	10YR6/3 にぶい黄橙色	
186	土師器	皿	土坑417	10.9	2.0	-	60	7.5YR6/4 にぶい橙色	
187	施釉陶器	鉢	土坑417	13.6	(3.4)	-	10	胎土:5Y8/1 灰白色 釉:5Y6/3 オリーブ黄色	瀬戸 灰釉
188	須恵器	鉢	土坑417	26.0	(8.4)	-	15		
189	須恵器	鉢	土坑417	27.2	(7.8)	-	15		
190	瓦器	壺	土坑417	6.7	(5.5)	-	30	N4/0 灰色	
191	瓦器	火鉢	土坑417	-	-	-	-	N4/0 灰色	
192	瓦器	鍋	土坑417	23.5	(6.8)	-	10		
193	瓦器	鍋	土坑417	28.0	(7.4)	-	25	N4/0 灰色	
194	土師器	皿	風呂221	6.7	2.0	-	100	7.5YR8/1 灰白色	
195	土師器	皿	風呂221	6.9	2.0	-	80	10YR8/3 浅黄橙色	
196	土師器	皿	風呂221	6.9	2.1	-	100	7.5YR8/3 浅黄橙色	
197	土師器	皿	風呂221	7.0	2.1	-	95	7.5YR8/2 灰白色	
198	土師器	皿	風呂221	8.5	2.5	-	100	7.5YR8/3 浅黄橙色	

表8-7 土器一覽表

番号	器種	器形	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調	備考
199	土師器	皿	風呂221	8.2	2.1	-	40	2.5Y8/2 灰白色	
200	土師器	皿	風呂221	10.1	(3.1)	-	20	7.5YR8/2 灰白色	
201	土師器	皿	風呂221	11.2	2.9	-	25	10YR8/1 灰白色	
202	土師器	皿	風呂221	11.2	3.0	-	25	10YR8/1 灰白色	
203	土師器	皿	風呂221	11.3	2.7	-	20	10YR8/1 灰白色	
204	土師器	皿	風呂221	11.4	(3.0)	-	30	2.5Y8/1 灰白色	
205	土師器	皿	風呂221	11.4	2.7	-	20	7.5YR8/4 浅黄橙色	
206	土師器	皿	風呂221	11.5	2.8	-	25	7.5YR8/4 浅黄橙色	
207	土師器	皿	風呂221	11.6	2.8	-	30	10YR8/3 浅黄橙色	
208	土師器	皿	風呂221	11.7	3.1	-	40	7.5YR8/3 浅黄橙色	
209	土師器	皿	風呂221	13.1	3.2	-	25	7.5YR8/2 灰白色	
210	土師器	皿	風呂221	13.1	(3.9)	-	30	2.5Y8/1 灰白色	
211	土師器	皿	風呂221	13.2	3.3	-	60	2.5Y8/1 灰白色	
212	土師器	皿	風呂221	13.2	3.5	-	30	10YR8/1 灰白色	
213	土師器	皿	風呂221	13.4	3.4	-	15	7.5YR8/1 灰白色	
214	土師器	皿	風呂221	13.4	3.3	-	30	10YR8/2 灰白色	
215	土師器	皿	風呂221	14.1	4.0	-	50	10YR8/2 灰白色	
216	土師器	皿	風呂221	14.2	(3.7)	-	20	7.5YR8/1 灰白色	
217	土師器	皿	風呂221	13.7	3.5	-	20	10YR8/1 灰白色	
218	土師器	皿	風呂221	14.3	(3.6)	-	20	7.5YR8/1 灰白色	
219	土師器	皿	風呂221	16.2	3.5	-	10	10YR8/2 灰白色	
220	土師器	皿	風呂221	17.0	4.0	-	40	7.5Y8/2 灰白色	
221	土師器	皿	風呂221	18.3	(4.7)	-	10	2.5Y8/1 灰白色	
222	土師器	皿	風呂221	7.5	1.5	-	60	7.5YR7/4 にぶい橙色	
223	土師器	皿	風呂221	7.6	1.3	-	70	5YR6/6 橙色	
224	土師器	皿	風呂221	7.7	1.7	-	60	10YR8/1 灰白色	
225	土師器	皿	風呂221	7.8	1.9	-	60	7.5YR7/4 にぶい橙色	
226	土師器	皿	風呂221	7.8	1.8	-	90	10YR4/1 褐灰色	
227	土師器	皿	風呂221	7.9	2.0	-	60	7.5YR7/4 にぶい橙色	
228	土師器	皿	風呂221	8.2	1.6	-	80	10YR7/3 にぶい黄橙色	
229	土師器	皿	風呂221	10.1	2.2	-	80	内:7.5YR8/3 浅黄橙色 外:10YR4/1 褐灰色	
230	土師器	皿	風呂221	10.3	2.2	-	100	10YR8/3 浅黄橙色	
231	土師器	皿	風呂221	10.4	(2.1)	-	40	7.5YR7/4 にぶい橙色	

表8-8 土器一覧表

番号	器種	器形	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調	備考
232	土師器	皿	風呂221	10.4	2.2	-	40	7.5YR7/4 にぶい橙色	
233	土師器	皿	風呂221	10.5	2.2	-	20	7.5YR7/4 にぶい橙色	
234	土師器	皿	風呂221	10.6	2.0	-	30	10YR7/2 にぶい黄橙色	
235	土師器	皿	風呂221	-	-	5.4	底部60	10YR7/4 にぶい黄橙色	
236	土師器	皿	風呂221	-	-	5.5	底部100	10YR7/4 にぶい黄橙色	
237	土師器	皿	風呂221	9.0	2.9	5.7	90	10YR7/4 にぶい黄橙色	
238	土師器	皿	風呂221	-	-	7.3	底部40	10YR7/4 にぶい黄橙色	
239	土師器	皿	風呂221	16.0	1.4	-	30	10YR7/4 にぶい黄橙色	
240	山茶椀	椀	風呂221	13.5	4.0	-	30	N7/ 灰白色	
241	瓦器	羽釜	風呂221	-	-	-	-	N3/ 暗灰色	
242	瓦器	片口鍋	風呂221	-	-	-	-	10YR5/1 褐灰色	
243	瓦器	火鉢	風呂221	17.4	9.2	-	20	2.5YR5/6 明赤褐色	
244	須恵器	鉢	風呂221	27.6	7.9	-	40	5YR5/3 にぶい赤褐色	東播
245	焼締陶器	播鉢	風呂221	-	-	-	-	5Y5/3 灰オリーブ色	
246	焼締陶器	甕	風呂221	-	-	-	口縁部5	7.5YR3/3 暗褐色	
247	焼締陶器	甕	風呂221	-	-	-	口縁部5	7.5Y5/2 灰オリーブ色	
248	輸入 青磁	筍花入	風呂221	-	-	-	-	胎土:2.5Y6/1 黄灰色 釉:10Y5/2 オリーブ灰色	
249	土師器	皿	土坑253	6.6	1.9	-	100	2.5Y8/2 灰白色	
250	土師器	皿	土坑253	6.7	1.9	-	100	10YR8/4 浅黄橙色	
251	土師器	皿	土坑253	6.8	2.0	-	70	10YR8/3 浅黄橙色	
252	土師器	皿	土坑253	11.2	3.2	-	100	10YR8/4 浅黄橙色	
253	土師器	皿	土坑253	11.3	2.9	-	100	10YR8/4 浅黄橙色	
254	土師器	皿	土坑253	11.4	3.1	-	100	10YR8/3 浅黄橙色	
255	土師器	皿	土坑253	11.4	3.0	-	100	10YR8/4 浅黄橙色	
256	土師器	皿	土坑253	11.6	3.1	-	100	10YR8/3 浅黄橙色	灯明皿
257	土師器	皿	土坑253	13.2	3.4	-	35	10YR8/3 浅黄橙色	
258	土師器	皿	土坑253	13.8	3.5	-	30	7.5YR7/4 にぶい橙色	
259	土師器	皿	土坑253	14.2	(3.3)	-	25	10YR8/3 浅黄橙色	
260	土師器	皿	土坑253	7.8	1.6	-	100	10YR7/3 にぶい黄橙色	
261	土師器	皿	土坑253	7.8	1.8	-	100	10YR7/4 にぶい黄橙色	
262	土師器	皿	土坑253	8.0	1.5	-	100	2.5Y7/2 灰黄色	
263	土師器	皿	土坑253	8.0	1.7	-	100	2.5Y7/3 浅黄色	
264	土師器	皿	土坑253	8.0	1.8	-	100	7.5YR7/4 にぶい橙色	

表8-9 土器一覧表

番号	器種	器形	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調	備考
265	土師器	皿	土坑253	8.1	1.8	-	100	7.5YR8/4 浅黄橙色	
266	土師器	皿	土坑253	9.9	2.2	-	100	10YR7/4 にぶい黄橙色	
267	土師器	皿	土坑253	9.9	1.8	-	100	10YR7/3 にぶい黄橙色	
268	土師器	皿	土坑253	10.0	1.9	-	80	7.5YR7/6 橙色	
269	土師器	皿	土坑253	10.4	2.2	-	80	10YR8/3 浅黄橙色	灯明皿
270	土師器	皿	土坑253	10.7	2.3	-	100	10YR7/3 にぶい黄橙色	
271	土師器	皿	土坑253	10.7	2.3	-	100	10YR7/3 にぶい黄橙色	
272	瓦器	風炉	土坑253	17.6	(9.0)	-	口縁部15	N5/0 灰色	
273	輸入 白磁	皿	土坑253	11.2	(3.8)	-	口縁部10	胎土:N8/0 灰白色 釉:10GY8/1 明緑灰色	
274	輸入 白磁	椀	土坑253	16.2	(3.3)	-	口縁部10	胎土:N8/0 灰白色 釉:7.5Y7/1 灰白色	
275	輸入 青磁	椀	土坑253	-	(3.2)	4.9	底部100	胎土:N7/0 灰白色 釉:薄緑色	
276	土師器	皿	土坑393	6.6	2.0	-	100	2.5Y8/2 灰白色	
277	土師器	皿	土坑393	6.7	1.8	-	100	7.5YR8/2 灰白色	灯明皿
278	土師器	皿	土坑393	6.7	1.8	-	100	10YR8/3 浅黄橙色	
279	土師器	皿	土坑393	6.8	1.9	-	100	10YR8/2 灰白色	
280	土師器	皿	土坑393	9.1	2.0	-	100	7.5YR8/3 浅黄橙色	
281	土師器	皿	土坑393	9.2	2.0	-	100	7.5YR8/3 浅黄橙色	
282	土師器	皿	土坑393	11.2	3.0	-	60	10YR8/2 灰白色	
283	土師器	皿	土坑393	11.4	3.2	-	100	10YR8/2 灰白色	
284	土師器	皿	土坑393	11.6	3.0	-	100	7.5YR8/2 灰白色	
285	土師器	皿	土坑393	11.6	3.4	-	100	10YR8/2 灰白色	灯明皿
286	土師器	皿	土坑393	11.6	3.2	-	70	10YR8/3 浅黄橙色	
287	土師器	皿	土坑393	11.6	3.3	-	100	7.5Y8/2 灰白色	
288	土師器	皿	土坑393	11.7	3.2	-	60	7.5YR8/3 浅黄橙色	
289	土師器	皿	土坑393	13.4	3.6	-	100	7.5YR8/1 灰白色	
290	土師器	皿	土坑393	14.0	3.7	-	70	10YR8/3 浅黄橙色	
291	土師器	皿	土坑393	8.2	1.8	-	90	10YR7/2 にぶい黄橙色	
292	土師器	皿	土坑393	7.3	1.6	-	100	10YR7/3 にぶい黄橙色	
293	土師器	皿	土坑393	7.7	1.5	-	100	10YR8/2 灰白色	
294	土師器	皿	土坑393	7.6	1.6	-	60	10YR7/2 にぶい黄橙色	
295	土師器	皿	土坑393	8.0	1.7	-	95	7.5YR7/3 にぶい橙色	
296	土師器	皿	土坑393	8.0	1.7	-	90	10YR7/3 にぶい黄橙色	
297	土師器	皿	土坑393	10.3	2.2	-	95	7.5YR7/4 にぶい橙色	

表8-10 土器一覧表

番号	器種	器形	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調	備考
298	土師器	皿	土坑393	10.3	2.0	-	70	10YR7/2 にぶい黄橙色	
299	土師器	皿	土坑393	10.5	2.2	-	70	10YR7/2 にぶい黄橙色	灯明皿
300	土師器	皿	土坑393	10.6	2.1	-	100	10YR7/3 にぶい黄橙色	灯明皿
301	土師器	皿	土坑393	11.0	2.0	-	100	10YR7/4 にぶい黄橙色	灯明皿
302	土師器	皿	土坑393	12.8	2.9	-	70	10YR7/3 にぶい黄橙色	
303	焼締陶器	甕	埋甕267	-	(26.4)	19.2	30	2.5Y5/2 暗灰黄色	常滑
304	土師器	皿	第5期整地層	7.0	2.0	-	100	10YR8/3 浅黄橙色	
305	土師器	皿	第5期整地層	7.4	1.8	-	80	10YR8/2 灰白色	
306	土師器	皿	第5期整地層	7.1	1.9	-	60	10YR8/3 浅黄橙色	
307	土師器	皿	第5期整地層	7.6	2.1	-	20	10YR8/3 浅黄橙色	
308	土師器	皿	第5期整地層	8.4	2.2	-	30	10YR8/2 灰白色	
309	土師器	皿	第5期整地層	8.4	1.6	-	40	10YR8/2 灰白色	
310	土師器	皿	第5期整地層	12.4	2.8	-	20	10YR8/2 灰白色	
311	土師器	皿	第5期整地層	12.8	3.0	-	30	7.5YR8/3 浅黄橙色	
312	土師器	皿	第5期整地層	13.2	3.6	-	35	10YR8/3 浅黄橙色	
313	土師器	皿	第5期整地層	13.2	(3.1)	-	20	10YR8/3 浅黄橙色	
314	土師器	皿	第5期整地層	7.0	1.6	-	60	10YR8/2 灰白色	
315	土師器	皿	第5期整地層	8.1	1.8	-	70	10YR7/2 にぶい黄橙色	
316	土師器	皿	第5期整地層	8.4	1.7	-	30	10YR7/3 にぶい黄橙色	
317	土師器	皿	第5期整地層	11.0	(2.0)	-	30	7.5YR7/4 にぶい橙色	
318	土師器	耳皿	第5期整地層	長5.4	1.6	短3.6	100	7.5YR8/4 浅黄橙色	
319	土師器	ミニチュア 片口鉢	第5期整地層	7.2	2.5	-	25	10YR8/3 浅黄橙色	
320	瓦器	ミニチュア 壺	第5期整地層	2.7	2.3	-	60	2.5Y7/1 灰白色	
321	瓦器	ミニチュア 壺	第5期整地層	2.4	3.0	-	100	7.5Y6/1 灰色	
322	瓦器	ミニチュア 壺	第5期整地層	2.4	3.5	-	100	N4/0 灰色	
323	瓦器	香炉	第5期整地層	12.6	5.3	8.9	30	7.5Y4/1 灰色	
324	瓦器	羽釜	第5期整地層	20.4	(4.7)	-	10	N3/0 暗灰色	
325	瓦器	羽釜	第5期整地層	22.4	(15.3)	-	口縁部25	N3/0 暗灰色	
326	施釉陶器	香炉	第5期整地層	8.9	(2.8)	-	口縁部15	胎土:2.5Y7/2 灰黄色 釉:10YR2/2 黒褐色	瀬戸美濃系 鉄釉
327	施釉陶器	香炉	第5期整地層	11.0	(3.3)	-	10	7.5Y6/3 オリーブ黄色	瀬戸美濃系 灰釉
328	施釉陶器	香炉	第5期整地層	9.3	5.8	7.7	100	7.5Y7/3 浅黄色	瀬戸美濃系 灰釉
329	施釉陶器	皿	第5期整地層	5.6	1.3	-	50	内:7.5Y6/2 オリーブ灰色 外:2.5Y7/2 灰黄色	瀬戸美濃系 灰釉
330	施釉陶器	輪花皿	第5期整地層	11.0	(2.9)	-	10	内:2.5Y7/2 灰黄色 外:7.5YR6/6 橙色	瀬戸美濃系 灰釉

表8-11 土器一覽表

番号	器種	器形	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調	備考
331	施釉陶器	天目椀	第5期整地層	11.6	5.8	4.2	35	胎土:2.5Y8/2 灰白色 釉:10YR2/2 黒褐色	瀬戸美濃系 鉄釉
332	施釉陶器	壺	第5期整地層	7.0	(3.8)	-	10	2.5YR3/1 暗赤灰色	瀬戸美濃系 鉄釉
333	須恵器	鉢	第5期整地層	28.8	(6.0)	-	10	7.5Y4/1 灰色	
334	須恵器	鉢	第5期整地層	30.3	(5.9)	-	10	2.5Y6/2 灰黄色	
335	焼締陶器	播鉢	第5期整地層	30.8	(8.4)	-	15	5Y5/1 灰色	備前 8条1単位播目
336	輸入 青磁	鉢	第5期整地層	16.0	(4.6)	-	10	7.5Y5/2 灰オリーブ色	
337	輸入 青磁	椀	第5期整地層	-	(3.2)	4.7	15	7.5GY7/1 明緑灰色	
338	輸入 華南三彩	鉢	第5期整地層	20.0	(4.0)	-	5	胎土:10YR8/2 灰白色 釉:濃緑色	
339	土師器	皿	風呂210	6.2	1.7	-	80	7.5YR8/4 浅黄橙色	
340	土師器	皿	風呂210	6.3	1.7	-	100	10YR8/4 浅黄橙色	
341	土師器	皿	風呂210	6.6	1.8	-	70	10YR8/3 浅黄橙色	
342	土師器	皿	風呂210	7.2	1.6	-	50	10YR6/3 にぶい黄橙色	
343	土師器	皿	風呂210	9.2	(1.8)	-	70	10YR8/3 浅黄橙色	
344	土師器	皿	風呂210	9.2	1.9	-	40	10YR8/3 浅黄橙色	
345	土師器	皿	風呂210	9.2	1.8	-	60	10YR8/3 浅黄橙色	
346	土師器	皿	風呂210	9.2	2.0	-	90	7.5YR8/4 浅黄橙色	
347	土師器	皿	風呂210	11.4	(3.2)	-	30	10YR8/3 浅黄橙色	
348	土師器	皿	風呂210	13.0	(3.5)	-	20	10YR8/3 浅黄橙色	
349	土師器	皿	風呂210	6.6	1.4	-	50	10YR7/4 にぶい黄橙色	
350	土師器	皿	風呂210	9.8	2.0	-	60	5YR7/6 橙色	
351	土師器	皿	風呂210	10.0	1.9	-	80	5YR7/6 橙色	
352	土師器	皿	風呂210	10.2	2.1	-	60	10YR7/4 にぶい黄橙色	
353	土師器	皿	風呂210	10.8	2.1	-	40	10YR7/3 にぶい黄橙色	
354	施釉陶器	片口鍋	風呂210	-	(3.5)	-	10	胎土:2.5Y8/2 灰白色 釉:5Y7/3 浅黄色	瀬戸美濃系 灰釉
355	土製品	取瓶	風呂210	4.8	1.8	-	70	10YR5/1 褐灰色	
356	土師器	皿	地業158	6.4	1.7	-	25	10YR8/2 灰白色	
357	土師器	皿	地業158	7.0	1.8	-	30	10YR8/3 浅黄橙色	
358	土師器	皿	地業158	8.6	(1.5)	-	25	10YR8/3 浅黄橙色	灯明皿
359	土師器	皿	地業158	9.0	(1.8)	-	20	10YR8/2 灰白色	
360	土師器	皿	地業158	15.0	(2.6)	-	20	10YR8/2 灰白色	
361	土師器	皿	地業158	16.0	(3.5)	-	10	10YR8/3 浅黄橙色	
362	施釉陶器	椀	地業158	15.0	(2.9)	-	15	胎土:10YR8/1 灰白色 釉:7.5YR7/2 灰白色	瀬戸美濃系 灰釉
363	施釉陶器	天目椀	地業158	12.2	(2.9)	-	10	胎土:10YR7/1 灰白色 釉:7.5YR3/2 黒褐色	瀬戸美濃系 鉄釉

表8-12 土器一覧表

番号	器種	器形	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調	備考
364	焼締陶器	播鉢	地業158	15.4	(4.5)	-	20	10YR8/1 灰白色	信楽 3条1単位播目
365	輸入陶磁器	天目椀	地業158	-	(2.0)	4.7	底部100	10YR7/1 灰白色～10YR4/2 灰黄褐色	
366	土師器	皿	土坑170	6.5	1.5	-	65	10YR8/3 浅黄橙色	
367	土師器	皿	土坑170	6.7	1.6	-	50	10YR8/2 灰白色	
368	土師器	皿	土坑170	6.7	1.5	-	30	7.5YR6/4 にぶい橙色	
369	土師器	皿	土坑170	6.9	1.7	-	100	7.5YR8/4 浅黄橙色	
370	土師器	皿	土坑170	6.9	1.8	-	100	7.5YR8/3 浅黄橙色	
371	土師器	皿	土坑170	7.0	1.6	-	100	7.5YR8/4 浅黄橙色	
372	土師器	皿	土坑170	7.1	1.6	-	70	7.5YR8/3 浅黄橙色	
373	土師器	皿	土坑170	7.1	1.7	-	100	7.5YR8/4 浅黄橙色	
374	土師器	皿	土坑170	7.3	1.6	-	100	7.5YR8/4 浅黄橙色	
375	土師器	皿	土坑170	8.2	1.6	-	100	7.5YR6/4 にぶい橙色	
376	土師器	皿	土坑170	8.3	1.9	-	60	7.5YR6/4 にぶい橙色	
377	土師器	皿	土坑170	8.4	1.8	-	100	7.5YR7/4 にぶい橙色	
378	土師器	皿	土坑170	8.5	1.7	-	50	2.5Y8/2 灰白色	
379	土師器	皿	土坑170	8.5	2.0	-	40	10YR8/2 灰白色	
380	土師器	皿	土坑170	8.6	1.6	-	40	7.5YR8/4 浅黄橙色	
381	土師器	皿	土坑170	8.7	1.9	-	45	10YR7/4 にぶい黄橙色	
382	土師器	皿	土坑170	8.8	1.8	-	100	10YR8/3 浅黄橙色	
383	土師器	皿	土坑170	8.9	1.8	-	100	10YR8/4 浅黄橙色	
384	土師器	皿	土坑170	11.4	2.1	-	65	10YR8/3 浅黄橙色	
385	土師器	皿	土坑170	11.6	2.0	-	25	7.5YR7/6 橙色	
386	土師器	皿	土坑170	11.7	2.5	-	65	10YR8/3 浅黄橙色	
387	土師器	皿	土坑170	12.0	2.3	-	30	10YR8/3 浅黄橙色	
388	土師器	皿	土坑170	12.1	2.2	-	45	7.5YR7/6 橙色	
389	土師器	皿	土坑170	12.2	2.3	-	80	7.5YR8/4 浅黄橙色	
390	土師器	皿	土坑170	12.3	2.3	-	40	7.5YR7/3 にぶい橙色	
391	土師器	皿	土坑170	12.3	2.0	-	30	10YR8/3 浅黄橙色	
392	土師器	皿	土坑170	12.4	2.4	-	45	7.5YR7/4 にぶい橙色	
393	土師器	皿	土坑170	12.6	2.1	-	25	7.5YR8/4 浅黄橙色	
394	土師器	皿	土坑170	13.2	2.3	-	20	10YR8/4 浅黄橙色	
395	土師器	皿	土坑170	13.9	2.6	-	75	7.5YR8/6 浅黄橙色	
396	土師器	皿	土坑170	14.2	2.4	-	20	10YR7/3 にぶい黄橙色	

表8-13 土器一覧表

番号	器種	器形	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調	備考
397	土師器	皿	土坑170	14.3	2.6	-	20	7.5YR7/4 にぶい橙色	
398	土師器	皿	土坑170	14.4	2.5	-	20	10YR7/3 にぶい黄橙色	
399	土師器	皿	土坑170	14.5	2.6	-	15	10YR8/3 浅黄橙色	
400	土師器	皿	土坑170	14.6	2.4	-	25	7.5YR7/4 にぶい橙色	
401	土師器	皿	土坑170	14.7	2.5	-	25	7.5YR7/4 にぶい橙色	
402	土師器	皿	土坑170	15.0	2.3	-	20	7.5YR8/4 にぶい橙色	
403	土師器	皿	土坑170	15.1	2.6	-	45	7.5YR7/4 にぶい橙色	
404	土師器	皿	土坑170	15.3	2.5	-	70	7.5YR7/4 にぶい橙色	
405	土師器	皿	土坑170	19.1	2.7	-	45	10YR8/3 浅黄橙色	
406	土師器	皿	土坑170	6.6	1.4	-	20	10YR8/4 浅黄橙色	
407	土師器	皿	土坑170	6.8	1.3	-	20	7.5YR7/4 にぶい橙色	
408	土師器	皿	土坑170	7.4	1.5	-	100	10YR7/3 にぶい黄橙色	
409	土師器	皿	土坑170	7.5	1.5	-	100	7.5YR7/4 にぶい橙色	
410	土師器	皿	土坑170	7.6	1.5	-	100	7.5YR7/4 にぶい橙色	
411	土師器	皿	土坑170	7.7	1.9	-	65	7.5YR8/3 浅黄橙色	
412	土師器	皿	土坑170	7.8	1.8	-	100	5YR7/4 にぶい橙色	
413	土師器	皿	土坑170	7.9	1.8	-	100	10YR7/3 にぶい黄橙色	
414	土師器	皿	土坑170	8.0	1.7	-	100	2.5YR7/4 淡赤橙色	
415	瓦器	羽釜	土坑170	26.4	-	-	-	10YR8/3 浅黄橙色	
416	瓦器	火鉢	土坑170	-	-	-	-	N7/0 灰白色	
417	瓦器	火鉢か	土坑170	-	-	-	-	N6/0 灰色	
418	瓦器	火鉢か	土坑170	-	-	-	-	N4/0 灰色	
419	瓦器	風炉	土坑170	-	-	-	-	5YR6/3 にぶい橙色	
420	瓦器	風炉	土坑170	-	-	-	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	
421	瓦器	火鉢	土坑170	-	-	-	-	10YR7/4 にぶい黄橙色	底に穿孔 植木鉢に転用
422	瓦器	火鉢	土坑170	-	-	-	-	内:N5/0 灰色 外:10YR7/3 にぶい黄橙色	
423	施釉陶器	皿	土坑170	11.2	2.4	-	20	胎土:2.5Y8/1 灰白色 釉:5Y6/2 灰オリーブ色	瀬戸美濃系 灰釉
424	施釉陶器	卸目皿	土坑170	14.5	-	-	45	胎土:N8/0 灰色 釉:7.5Y6/2 灰オリーブ色	瀬戸美濃系 灰釉
425	施釉陶器	鉢	土坑170	21.4	-	-	10	胎土:2.5Y8/1 灰白色 釉:7.5Y6/2 灰オリーブ色	瀬戸美濃系 灰釉
426	施釉陶器	鉢	土坑170	36.6	-	-	10	胎土:N6/0 灰色 釉:7.5Y5/2 灰オリーブ色	瀬戸美濃系 灰釉
427	施釉陶器	天目椀	土坑170	11.6	6.3	-	55	胎土:5Y8/1 灰白色 釉:7.5YR2/1 黒色	瀬戸美濃系 鉄釉
428	施釉陶器	香炉	土坑170	11.0	4.7	-	65	胎土:2.5Y8/2 灰白色 釉:7.5YR3/1 黒褐色	瀬戸美濃系 鉄釉
429	施釉陶器	片口鍋	土坑170	-	-	-	-	胎土:2.5Y8/2 灰白色 釉:7.5Y6/2 灰オリーブ色	瀬戸美濃系 灰釉

表8-14 土器一覧表

番号	器種	器形	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調	備考
430	須恵器	壺	土坑170	-	-	11.5	底部45	N5/0 灰色	
431	焼締陶器	壺	土坑170	16.0	-	-	-	7.5YR4/1 褐灰色	備前
432	焼締陶器	壺	土坑170	11.0	(20.2)	-	-	7.5YR4/2 灰褐色	信楽
433	輸入 青磁	椀	土坑170	13.8	6.1	-	70	胎土:N8/0 灰白色 釉:10Y6/2 オリーブ灰色	
434	輸入 青磁	椀	土坑170	14.1	-	-	75	胎土:N8/0 灰白色 釉:10Y6/2 オリーブ灰色	
435	輸入 青磁	椀	土坑170	14.9	6.2	-	20	胎土:N7/0 灰白色 釉:10Y6/2 オリーブ灰色	
436	輸入 青磁	椀	土坑170	13.6	-	-	15	胎土:N7/0 灰白色 釉:7.5Y5/2 灰オリーブ色	
437	輸入 青磁	椀	土坑170	-	-	5.7	底部50	胎土:N7/0 灰白色 釉:10Y6/2 オリーブ灰色	
438	輸入 青磁	椀	土坑170	14.2	-	-	10	胎土:N8/0 灰白色 釉:5GY7/1 明オリーブ灰色	
439	輸入 青磁	椀	土坑170	14.8	-	-	10	胎土:N7/0 灰白色 釉:5Y4/2 灰オリーブ色	
440	輸入 青磁	椀	土坑170	15.0	-	-	35	胎土:N8/0 灰白色 釉:5GY7/1 明オリーブ灰色	
441	輸入 青磁	香炉	土坑170	12.5	(6.4)	-	15	胎土:10YR8/2 灰白色 釉:7.5GY7/1 明緑灰色	
442	輸入 青磁	香炉	土坑170	11.0	5.8	-	40	胎土:N8/0 灰白色 釉:2.5GY7/1 明オリーブ灰色	
443	輸入 青磁	小杯	土坑170	5.4	(3.3)	-	35	胎土:N8/0 灰白色 釉:10Y6/2 オリーブ灰色	
444	輸入 白磁	椀	土坑170	9.5	(3.8)	-	25		
445	輸入 白磁	皿	土坑170	10.1	2.5	-	25		
446	輸入 白磁	皿	土坑170	13.6	(3.6)	-	70		
447	土師器	皿	風呂210 最上層	11.8	(2.2)	-	40	7.5YR7/6 橙色	
448	土師器	皿	風呂210 最上層	11.8	2.2	-	95	10YR7/4 にぶい黄橙色	内面に釘付着
449	土師器	皿	風呂210 最上層	14.6	2.4	-	98	7.5YR6/4 にぶい橙色	
450	土師器	皿	風呂210 最上層	14.6	2.6	-	60	10YR3/2 黒褐色	灯明皿か
451	土師器	皿	風呂210 最上層	14.6	2.8	-	80	7.5YR6/6 橙色	
452	土師器	皿	風呂210 最上層	14.6	2.8	-	60	7.5YR7/4 にぶい橙色	
453	土師器	皿	風呂210 最上層	14.8	2.5	-	80	7.5YR7/4 にぶい橙色	
454	土師器	皿	風呂210 最上層	7.2	1.4	-	40	7.5YR6/2 灰褐色	
455	土師器	皿	風呂210 最上層	7.9	1.7	-	100	10YR6/4 にぶい黄橙色	
456	輸入 青磁	小椀	風呂210 最上層	11.7	4.2	5.2	80	胎土:N8/0 灰白色 釉:5GY7/1 明オリーブ灰色	
457	輸入 白磁	皿	風呂210 最上層	10.1	2.8	3.9	100	胎土:10YR8/2 灰白色 釉:2.5Y8/1 灰白色	灯明皿
458	土師器	皿	カマド195	8.7	1.8	-	60	10YR7/3 にぶい黄橙色	
459	土師器	皿	カマド195	12.4	1.9	-	50	10YR8/2 灰白色	
460	土師器	皿	カマド195	13.6	1.9	-	20	2.5Y7/3 浅黄色	
461	土師器	皿	カマド195	6.7	1.5	-	100	7.5YR6/4 にぶい橙色	
462	土師器	皿	カマド195	8.6	1.7	-	25	10YR7/3 にぶい黄橙色	灯明皿

表8-15 土器一覧表

番号	器種	器形	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調	備考
463	施釉陶器	皿	カマド195	8.4	2.0	-	70	2.5Y7/3 浅黄色	瀬戸美濃系 灰釉
464	土師器	皿	石組炉126	8.5	1.8	-	100	10YR8/3 浅黄橙色	
465	土師器	皿	石組炉126	8.6	1.6	-	100	7.5YR8/4 浅黄橙色	
466	土師器	皿	石組炉126	8.7	1.5	-	90	5Y6/6 橙色	
467	土師器	皿	石組炉126	8.9	1.5	-	90	7.5YR7/4 にぶい橙色	墨痕あり
468	土師器	皿	石組炉126	9.4	1.6	-	60	2.5Y8/2 灰白色	灯明皿
469	土師器	皿	庭141	7.6	1.4	-	20	10YR7/3 にぶい黄橙色	
470	土師器	皿	庭141	10.0	1.8	-	100	10YR8/2 灰白色	
471	土師器	皿	庭141	10.4	(2.2)	-	30	10YR7/3 にぶい黄橙色	
472	土師器	皿	庭141	14.6	(2.1)	-	20	10YR8/2 灰白色	
473	土師器	皿	庭141	14.6	(2.2)	-	10	10YR8/2 灰白色	
474	施釉陶器	鉢	庭141	27.0	(3.6)	-	10	2.5Y7/2 灰黄色	瀬戸美濃系 灰釉
475	焼締陶器	播鉢	庭141	26.8	(6.2)	-	10	10Y8/3 浅黄橙色	信楽 5条1単位播目
476	土師器	皿	庭112	6.4	1.3	-	30	7.5YR7/4 にぶい橙色	
477	土師器	皿	庭112	6.6	(1.2)	-	30	10YR6/3 にぶい黄橙色	
478	土師器	皿	庭112	7.3	2.3	-	90	10YR7/2 にぶい黄橙色	墨痕あり
479	土師器	皿	庭112	8.0	(1.8)	-	10	10YR8/4 浅黄橙色	
480	土師器	皿	庭112	8.6	1.5	-	25	10YR7/3 にぶい黄橙色	
481	土師器	皿	庭112	11.1	(2.0)	-	10	7.5YR6/4 にぶい橙色	蹲踞35掘形出土
482	土師器	皿	庭112	13.0	(2.1)	-	20	10YR8/2 灰白色	
483	土師器	皿	庭112	14.4	(2.2)	-	10	10YR8/1 灰白色	蹲踞35掘形出土
484	土師器	皿	庭112	14.4	(2.4)	-	25	7.5YR7/4 にぶい橙色	
485	焼締陶器	播鉢	庭112	-	(5.6)	-	破片	5YR4/3 にぶい赤褐色	備前
486	焼締陶器	播鉢	庭112	-	(5.2)	(13.0)	15	5YR5/4 にぶい赤褐色～N5/0 灰色	備前 8条1単位播目
487	焼締陶器	壺	庭112	16.6	(4.6)	-	10	2.5Y7/1 灰白色	
488	土師器	皿	石室150	8.5	1.9	-	20	10YR8/2 灰白色	
489	土師器	皿	石室150	8.6	1.4	-	25	10YR7/3 にぶい黄橙色	
490	土師器	皿	石室150	8.6	1.7	-	65	10YR8/2 灰白色	
491	土師器	皿	石室150	8.8	1.4	-	30	10YR8/2 灰白色	
492	土師器	皿	石室150	9.0	1.8	-	15	10YR8/2 灰白色	
493	土師器	皿	石室150	9.1	1.8	-	30	10YR8/2 灰白色	
494	土師器	皿	石室150	9.2	1.6	-	15	7.5YR8/4 浅黄橙色	
495	土師器	皿	石室150	9.4	2.0	-	15	10YR8/2 灰白色	

表8-16 土器一覧表

番号	器種	器形	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調	備考
496	土師器	皿	石室150	10.1	1.8	-	45	7.5YR8/3 浅黄橙色	
497	土師器	皿	石室150	11.2	1.9	-	20	2.5Y8/1 灰白色	
498	土師器	皿	石室150	11.3	2.1	-	20	10YR8/3 浅黄橙色	
499	土師器	皿	石室150	11.6	(2.0)	-	20	10YR7/2 にぶい黄橙色	
500	土師器	皿	石室150	11.7	(2.0)	-	15	2.5Y8/2 灰白色	
501	土師器	皿	石室150	12.0	2.0	-	20	10YR8/2 灰白色	
502	土師器	皿	石室150	12.1	(2.1)	-	20	10YR8/2 灰白色	
503	土師器	皿	石室150	12.3	2.1	-	15	10YR8/3 浅黄橙色	
504	土師器	皿	石室150	13.4	1.9	-	20	10YR7/2 にぶい黄橙色	
505	土師器	皿	石室150	7.4	2.0	-	20	10YR8/3 浅黄橙色	
506	土師器	皿	石室150	5.8	1.2	-	80	7.5YR8/3 浅黄橙色	
507	土師器	皿	石室150	6.1	1.3	-	50	7.5YR7/2 明褐灰色	
508	土師器	皿	石室150	6.2	1.1	-	100	10YR7/3 にぶい黄橙色	
509	土師器	皿	石室150	6.3	1.2	-	100	10YR7/3 にぶい黄橙色	
510	土師器	皿	石室150	6.0	1.2	-	45	10YR8/2 灰白色	
511	土師器	皿	石室150	6.0	1.2	-	45	10YR7/2 にぶい黄橙色	
512	土師器	皿	石室150	6.5	1.2	-	100	10YR8/2 灰白色	
513	土師器	皿	石室150	6.8	1.2	-	50	10YR7/3 にぶい黄橙色	
514	土師器	皿	石室150	8.4	1.5	-	35	10YR7/2 にぶい黄橙色	
515	施釉陶器	卸目皿	石室150	14.2	2.5	-	20	胎土:10YR8/2 灰白色 釉:5Y6/4 オリーブ黄色	瀬戸美濃系 灰釉
516	施釉陶器	鉢	石室150	15.0	-	-	5	胎土:N8/0 灰白色 釉:10Y6/2 オリーブ灰色	瀬戸美濃系 灰釉
517	焼締陶器	鉢	石室150	-	-	-	-	5YR2/2 灰褐色	備前
518	焼締陶器	壺	石室150	-	-	10.2	底部25	7.5YR5/2 灰褐色	備前
519	焼締陶器	播鉢	石室150	-	-	-	-	2.5YR5/3 にぶい赤褐色	備前
520	輸入 青磁	椀	石室150	-	-	-	5	釉:5GY6/1 オリーブ灰色	
521	輸入 青磁	椀	石室150	-	-	-	5	胎土:N8/0 灰白色 釉:10YR6/2 オリーブ灰色	
522	輸入 青磁	椀	石室150	-	-	4.8	底部25	胎土:N6/0 灰色 釉:2.5GY6/1 オリーブ灰色	
523	輸入 青磁	皿	石室150	11.8	3.4	-	65	胎土:N7/0 灰白色 釉:7.5Y6/2 灰オリーブ色	
524	輸入 白磁	皿	石室150	8.6	-	-	5		
525	輸入 白磁	椀か	石室150	-	-	4.3	底部30		
526	輸入 白磁	椀か	石室150	-	-	3.3	底部55		
527	輸入 李朝	椀	石室150	15.2	-	-	25		
528	輸入 李朝	瓶	石室150	-	-	-	-	胎土:2.5YR4/2 灰赤色 釉:N2/0 黒色	

表8-17 土器一覽表

番号	器種	器形	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調	備考
529	輸入 李朝	瓶	石室150	-	-	10.0	-	胎土:2.5YR4/2 灰赤色 釉:N3/0 暗灰色	
530	土師器	皿	埋納212	10.6	1.9	-	70	7.5YR7/6 橙色	灯明皿
531	土師器	皿	埋納212	11.0	2.1	-	100	10YR8/3 浅黄橙色	灯明皿
532	土師器	皿	埋納212	11.0	1.9	-	100	7.5Y7/6 橙色	灯明皿
533	土師器	皿	埋納212	11.4	2.3	-	95	7.5Y7/4 にぶい橙色	灯明皿
534	土師器	皿	井戸18	9.7	2.4	-	50	7.5YR8/4 浅黄橙色	
535	土師器	皿	井戸18	9.8	1.9	-	50	7.5YR7/4 にぶい橙色	
536	土師器	皿	井戸18	9.8	2.1	-	90	10YR8/3 浅黄橙色	灯明皿
537	土師器	皿	井戸18	10.0	2.3	-	100	10YR8/3 浅黄橙色	灯明皿
538	土師器	皿	井戸18	10.1	2.2	-	100	10YR8/3 浅黄橙色	灯明皿
539	土師器	皿	井戸18	10.7	2.2	-	100	7.5YR8/3 浅黄橙色	
540	土師器	皿	井戸18	10.8	2.3	-	30	5YR7/6 橙色	
541	土師器	皿	井戸18	10.9	2.1	-	25	7.5YR8/4 浅黄橙色	
542	土師器	皿	井戸18	11.0	2.0	-	45	10YR5/1 褐灰色	灯明皿
543	土師器	皿	井戸18	11.1	2.3	-	75	7.5YR8/3 浅黄橙色	
544	土師器	皿	井戸18	11.3	2.1	-	75	7.5YR5/1 褐灰色	灯明皿
545	土師器	皿	井戸18	11.4	2.3	-	45	7.5YR8/3 浅黄橙色	
546	土師器	皿	井戸18	11.5	2.1	-	20	7.5YR8/3 浅黄橙色	
547	土師器	皿	井戸18	12.0	2.4	-	80	7.5YR7/4 にぶい橙色	
548	土師器	皿	井戸18	12.2	2.0	-	100	10YR8/3 浅黄橙色	
549	土師器	皿	井戸18	5.4	1.3	-	95	7.5YR8/3 浅黄橙色	灯明皿
550	土師器	皿	井戸18	5.5	1.0	-	100	7.5YR8/3 浅黄橙色	
551	土師器	皿	井戸18	6.0	1.1	-	100	10YR8/2 灰白色	灯明皿
552	土師器	鉢型土器	井戸18	6.0	1.8	-	10	7.5YR7/3 にぶい橙色	
553	土師器	小壺	井戸18	2.1	2.6	-	100	10YR8/3 浅黄橙色	
554	土師器	小壺	井戸18	2.0	2.2	-	100	10YR8/3 浅黄橙色	
555	土師器	塩壺	井戸18	5.8	9.6	-	90	5YR7/6 橙色	
556	土師器	塩壺	井戸18	5.2	5.4	-	40	7.5YR8/4 浅黄橙色	
557	瓦器	鉢	井戸18	23.2	-	9.5	底部100	N4/0 灰色	
558	施釉陶器	天目碗	井戸18	9.8	-	-	15	胎土:10YR8/2 灰白色 釉:10YR2/1 黒色	美濃 鉄釉
559	施釉陶器	碗	井戸18	10.0	6.9	-	85	釉:2.5Y8/1 灰白色	唐津 灰釉
560	施釉陶器	碗	井戸18	11.0	-	-	10	胎土:N8/0 灰白色 釉:10Y7/1 灰白色	唐津 灰釉
561	施釉陶器	皿	井戸18	13.1	3.5	-	20	胎土:5YR7/4 にぶい橙色 釉:7.5Y6/2 灰オリーブ色	唐津 灰釉

表8-18 土器一覧表

番号	器種	器形	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調	備考
562	施釉陶器	水指	井戸18	-	-	-	底部25	胎土:2.5Y8/3 淡黄色 釉:10YR7/2 にぶい黄橙色	唐津 灰釉 鉄絵
563	染付	皿	井戸18	13.8	3.2	-	35		伊万里
564	染付	皿	井戸18	-	-	5.0	底部100		伊万里
565	染付	皿	井戸18	13.7	3.6	-	80		伊万里
566	染付	椀	井戸18	13.7	4.4	-	95		伊万里
567	染付	筒椀	井戸18	-	-	5.1	底部100		伊万里
568	青磁	椀	井戸18	9.8	7.3	-	75	胎土:N8/0 灰白色 釉:5GY7/1 明オリーブ灰色	伊万里
569	焼締陶器	小壺	井戸18	-	-	4.0	底部40	10YR6/4 にぶい黄橙色	備前
570	焼締陶器	建水	井戸18	12.8	7.5	-	40	2.5YR4/2 灰赤色	備前
571	焼締陶器	播鉢	井戸18	38.8	16.3	-	40	7.5YR4/2 灰褐色	丹波
572	輸入 青花	椀	井戸18	6.7	4.5	-	30		
573	輸入 青花	椀	井戸18	6.4	-	-	20		
574	輸入 青花	椀	井戸18	9.0	-	-	25		
575	輸入 青花	椀	井戸18	8.3	5.5	-	70		
576	輸入 青花	椀	井戸18	13.5	6.1	-	90	2.5Y6/1 黄灰色	
577	輸入 色絵磁器	皿	井戸18	-	-	-	底部25		
578	輸入 青花	皿	井戸18	11.2	2.4	-	20		
579	輸入 青花	盤	井戸18	-	-	-	底部10		
580	輸入 白磁	仏像	井戸18	-	-	-	-		徳化窯

表9 瓦類一覧表

番号	種類	文様	出土遺構・層	色調	備考
瓦1	軒丸瓦	重圈文	土坑170(5期)	N6/0 灰色	
瓦2	軒丸瓦	蓮華文	土坑289(4期)	7.5YR7/1 明褐灰色	
瓦3	軒丸瓦	巴文	カマド100(6期)	10YR6/3 にぶい黄橙色	二次被熱
瓦4	軒丸瓦	巴文	第4期整地層	N4/0 灰色	
瓦5	軒丸瓦	巴文	土坑170(5期)	7.5YR7/6 橙色～N4/0 灰色	二次被熱
瓦6	軒丸瓦	巴文	井戸350(7期)	2.5Y5/2 暗灰黄色	
瓦7	軒平瓦	唐草文	土坑417(4期)	N6/0 灰色	
瓦8	軒平瓦	唐草文	風呂221(4期)	N3/0 灰色	
瓦9	軒平瓦	唐草文	試掘坑清掃中	N5/0 灰色	
瓦10	軒平瓦	唐草文	第4期整地層	N4/0 灰色	
瓦11	軒平瓦	唐草文	井戸173(6期)	5Y6/1 灰色	
瓦12	軒平瓦	唐草文	試掘坑清掃中	N4/0 灰色	
瓦13	軒平瓦		風呂221(4期)	5Y4/1 灰色	
瓦14	丸瓦		土坑170(5期)	5Y6/1 灰色	二次被熱
瓦15	丸瓦		第5期整地層	N7/0 灰白色	
瓦16	平瓦		第5期整地層	N4/0 灰色	
瓦17	平瓦		土坑170(4期)	2.5Y5/1 黄灰色	二次被熱
瓦18	平瓦		第5期整地層	N5/0 灰色	
瓦19	雁振瓦		土坑170(5期)	10YR7/4 にぶい黄橙色～N5/0 灰色	二次被熱
瓦20	雁振瓦		土坑170(5期)	10YR6/4 にぶい黄橙色～N6/0 灰色	二次被熱
瓦21	塼		地業158	N4/0 灰色	
瓦22	塼		第6期整地層	2.5Y6/2 黄灰色～N5/0 灰色	
瓦23	有孔塼		井戸173掘形(6期)	5Y7/1 灰白色～N6/0 灰色	
瓦24	有孔塼		井戸173(6期)	N5/0 灰色	
瓦25	有孔塼		第4期整地層	N4/0 灰色	

圖 版



1 第1期 竪穴建物505 (北東から)



2 第1期 土器溜502 (南南東から)



3 第1期 溝500 (東から)



1 第2期 全景 (南から)



2 第3期 全景 (南から)



3 第3期 溝440 (東から)



1 第4期 全景（南から）



2 第4期 集石226（東から）



3 第4期 集石224（東から）



4 第4期 土坑215（北西から）



1 第4期 風呂221・三和土230・集石237（東から）



2 第4期 風呂221・三和土230・集石237（南から）



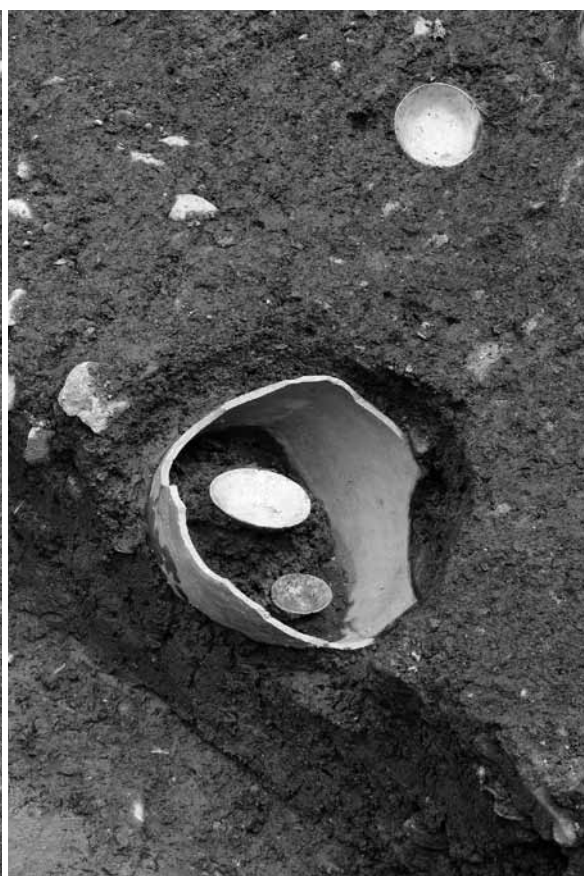
1 第4期 土坑253 (東から)



2 第4期 土坑393 (東から)



3 第4期 埋甕267 (北から)



4 第4期 土坑263 (北東から)



1 第5期 全景（南から）



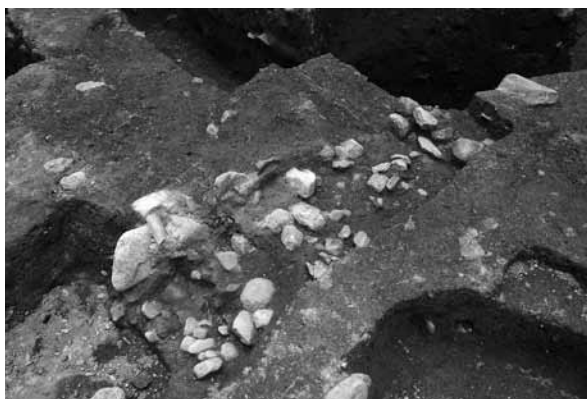
2 第5期 カマド211（南西から）



3 第5期 風呂210（北から）



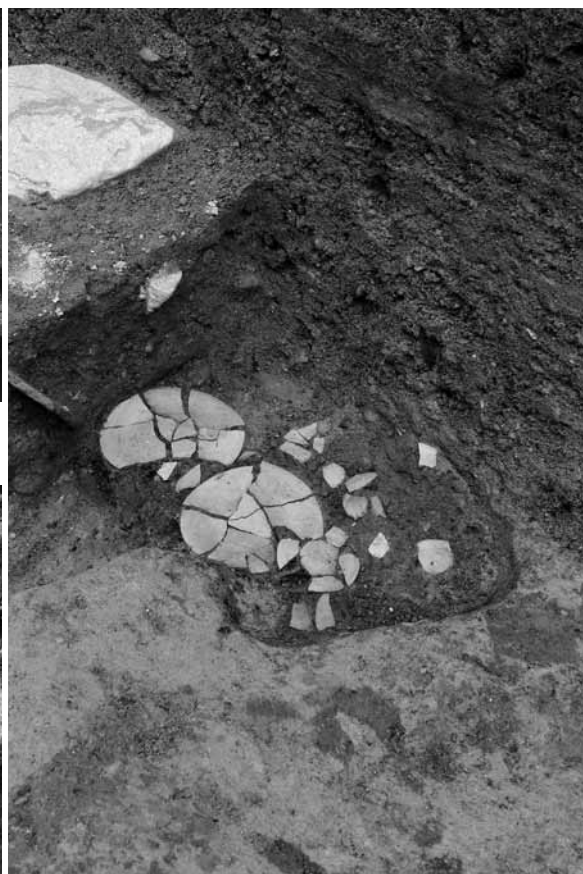
1 第5期 カマド195 (南東から)



2 第5期 地業158北西部 (北東から)



3 第5期 地業158断面 (東から)



4 第5期 風呂210上層土器出土状況 (南西から)



1 第6期 全景（南から）



2 第6期 石室150（南から）



3 第6期 石組炉（南南東から）



1 第6期 庭141 (北東から)



2 第6期 庭112 (南南東から)



1 第6期 井戸173 (南東から)



2 第7期下層 礎石列4・5 (北から)



3 第7期 全景 (北東から)



1 第7期 井戸18・20、石組土坑19（北東から）



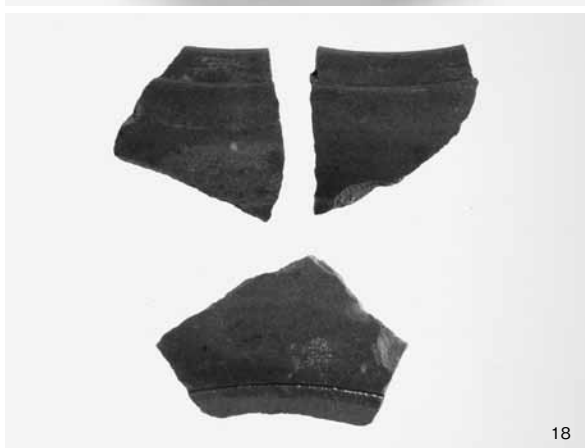
2 第7期 井戸18（東から）



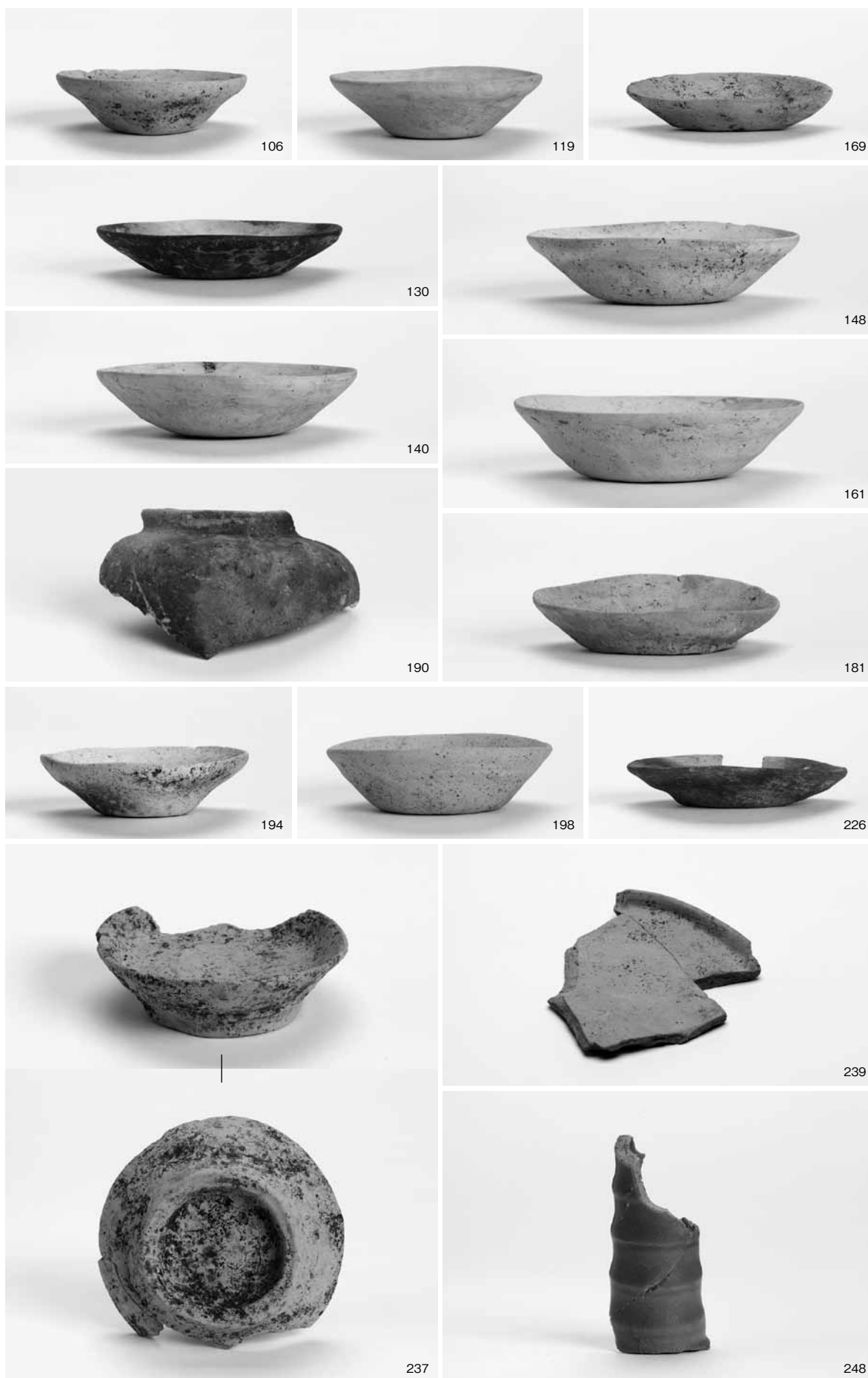
3 第7期 石組土坑19（東から）



4 第7期 埋納遺構212（南西から）



土器 1 (土器溜 502 · 溝 500 · 第 2 期整地層 · 第 3 期整地層 · 土坑 426 · 土坑 263 出土)



土器 2 (土坑417・風呂221出土)



土器 3 (土坑 393 · 埋甕 267 · 第 5 期整地層出土)



土器 4 (土坑170出土)



土器 5 (井戸18出土)



瓦1



瓦5



瓦2



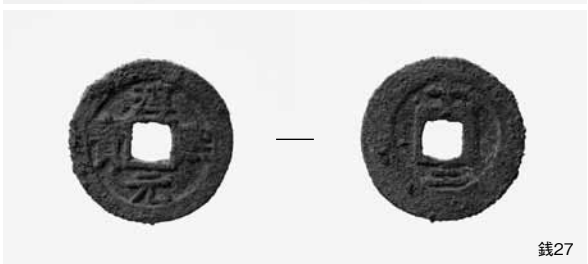
瓦9



瓦14



瓦19



錢27



金4



錢28



金9



錢36



金26



石製品

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうごじょうさんぼうじゅっちょう・からすまあやのこうじいせき							
書名	平安京左京五条三坊十町跡・烏丸綾小路遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2015-7							
編著者名	柏田有香							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2015年12月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡 からすまあやのこうじいせき 烏丸綾小路遺跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 あやこうじどおりからすま 綾小路通烏丸 にしているどうじしゃちょう 西入童侍者町 160・161	26100	1 712	35度 00分 09秒	135度 45分 32秒	2015年5月 11日～2015 年7月14日	144㎡	ビル新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城跡	古墳時代	堅穴建物、土器溜、溝	古式土師器、須恵器		室町時代の寺院に関連する遺構群が見つかった。		
烏丸綾小路遺跡	集落跡	平安時代～鎌倉時代	柱穴、ピット群、土坑、溝	土器類、瓦類、金属製品、石製品、ガラス				
		室町時代	風呂、埋甕、土坑、集石、土葬墓、カマド、地業	土器類、土製品、瓦類、金属製品、銭貨、鑄造関係、石製品				
		戦国時代	井戸、柱列、溝、庭、カマド、石組炉、石室	土器類、金属製品、銭貨、石製品				
		安土桃山時代～江戸時代	礎石列、井戸、埋納遺構、埋甕、石組土坑	土器類、瓦類、金属製品、銭貨、石製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-7

平安京左京五条三坊十町跡・
烏丸綾小路遺跡

発行日 2015年12月25日

編集行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961